
機動戦士ガンダムの世界に転生？ くそっ しょうがねえな

as

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムの世界に転生？くそっ しょうがねえな

【Nコード】

N0455S

【作者名】

as

【あらすじ】

テンプレ転生でやってきたレア・プラナ。生まれた先はガンダム世界…が、何かがおかしい。

おぼろげな原作知識、自身よりよっぽどチートくさいガンダムとアムロ、原作介入しようにも既に狂った世界観。

冒険王版機動戦士ガンダム、君は、生きのびる事が出来るか？

転生オリ主誕生の巻（前書き）

転生〱ガンダム 大地に立つ！！！！まで

転生オリ主誕生の巻

サイド7から数百キロ、地球や太陽からも陰になる宙域。

ジオン公国軍特令要撃隊所属の巡洋艦であるムサイから、2機の
人型ロボット…MS『ザク』^{モビル・スーツ}がサイド7に向けて射出された。

『シャア少佐、なぜ新兵を大事な敵新兵器への偵察任務につけたのです？ジーンとデニムではまだ……』

「中尉！地球連邦軍も巻き返しに必死なのだよ。V作戦…連邦の切り札とも言えるだろう……」

『でしたら！』

「情報だけでいいのだ。ベテランでは功を焦る！」

『な、なるほど。さすがシャア少佐。深い読みで……』

暗黒の宇宙をブリッジの艦橋から眺める、彼方では小さくコロニーのビーコン光が明滅していた。

「我々は全てのスペースコロニーを調べた。残るは開発中のサイド7だけだ……」

- - -

地球から最も遠い位置にあるスペースコロニー、サイド3が『ジオン公国』を名乗り地球連邦に対し反逆の狼煙をあげた。

攻撃は2波に分かれて行われ、この戦争で人類は全人口の50%弱を開戦から一週間で失った。

人類は、自らの行為に恐怖した……

- - -

- - 俺、レア・プラナは転生者である - -

所謂テンプレにより子犬を助けようとして、トラックの前に飛び出しミンチよりひでえ状態に

嘘だと言ってよ！な、気分で合挽き肉となった自分を見下ろしていると、自分はトウモロコシの神です、と言う半裸の青年が現れ

わが眷属を助けようとしたその心意気に感動云々。

『転生』をさせてくれることになったのだ！

「へー、すごいね！帰っていいよ」

（頭にトウモロコシを乗つけた半裸の兄ちゃんがわけの分からな
い事を言ってくる……

というかトウモロコシの神って何だよ……八百万かよ……夢なら
覚めてくれえ……！）

《いえ、これは夢ではありません。》

「考えてる事に返事しないでくださいよ」

ちよつと浮いてるし、光ってるし、もしかして本当に神なのだろ
うか。

《それで、何処に転生したいですか？》

「そもそも、神だつてんならその場で生き返らせてくれないん
じゃないですかね？」

《私はトウモロコシの神ですよ？ミンチを人間に再結成する……
なんてこと、できません》

満面の笑みで言い放った

（役にたたねえ……）

キッ

睨まれた。うお、後光が！眩しい！やめッ！

《……まあ、そのまま此处に留まって自縛霊となるのもかまいませんが、キツいと思いますよ》

「そらまた、なんで……です?」

「というか、何故自縛霊限定なのだろうか?普通に輪廻転生させてくれば良いのでは。輪廻転生あるのか知らないけど。」

《ほら、場所が場所っていうか道路の真ん中じゃないですか》

「ええ、そうですね。それが?」

《トラックや自動車が、年中無休365日24時間貴方に向かって突進してくるんですよ?霊体なので通り抜けますけど。》

貴方は、輪廻転生に至るまでの1800日間、精神を保っています?》

自分の死因になったトラックの突進攻撃に5年も耐えられるとは思わない

「お願いします」

土下座をした、驚いたことに足が無い事に今になって気が付いた。なるほど幽霊である。

《ええ、安心しました。自縛霊……まあ、輪廻転生まで動けないから仕方ないんですけど、途中で精神が壊れてそのまま……なんてことが多々ありますね。》

我が眷属を救おうとしてくれた貴方を、そんな風にしてしまう事

はできなかった》

「それで、ですね……転生なんですけど」

やんわりと催促をする

《私が言うのもナンですが、割り切るの早いですね貴方。もっとこう……》

「天涯孤独で親友もないもので。就職もできないし、心機一転！
って感じで一つ」

《はあ、それで、何処に転生したいですか？》

転生オリ主的には キタコレ！ と、思っべきなのだろうが、案
外自分がその時に直面すると、特に思い浮かばない

エヴァでアスカたんぺろp……いや、アセロラドリンクみたいに
なりたくないな。今だと何だ？ IS？ うーん、女尊男卑はちよつと…

そつだ、転生といえばチートオリ主！ バビロン！ 17分割！ 能力
を先に考えよう！ うはwww

《健康な体、ちょっと良い動体視力、物覚えが良い、程度のチー
トしか出来ませんよ、なんといったってトウモロコシの神ですので》

クソツ！ 使えnGYAAAAA後光で目が！

《次言ったら適当な所に放りこみますからね》

「言っていないじゃないですか」

《あ?》

「申し訳ありません!」

我ながら美しい土下座である、足の先がランプから出てくる時のジーニーのようになっているのが見えた。

《じゅー きゅー》

(ひいつ、鬼だ)

《いーち》

「が、ガンダムで!ガンダムの世界でお願いします!MSに乗りた
いなー!」

《分かりました、では、行ってらっしゃい。》

周囲が白く塗りつぶされていく。まるで、目の前の半裸の青年、
いや、神に向かって世界が純白になっていくようだ。

「ええっ!?こう、テンプレオリ主だと、顔がどうかコーディネ
ーターとかイノベイダーとか、ほら!」

《無理ですつてば》

「使えねえーっ! …… あっ!」

白色が止まった

《……（ニッコリ）》

満面の笑み。しかし目が笑っていない。

《逝ってらっしゃい》

世界が、ちょっと灰色に染まっていた。

-
-
-
-

あれから17年、俺、レア・プラナは、スペースコロニー『サイ
ド7』にいる

今日は宇宙世紀0079年9月18日、時間は朝の6時

歴史が動く日だ

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

俺、レア・プラナのこれまでの軌跡をあげていこうと思う

地球生まれ、赤茶色の髪、やや長めに適当に切りそろえ。耳を垂らした犬みたいな髪型なのは合い挽きだったからだろうか？

赤茶色の目、顔はまあ、前世と同じだ。バレンタインにチョコ2個貰えるくらい……なので、そんなに悪くないと思いたい。思いたい！

モビル・ワーカー（略称MW。MSの先祖のような物）の脚部ダンパー関連部品工場、いわゆる中小企業の専務の一人息子

幼少期は神童、とまではいかないが、才子としてチャホヤされ続け、調子に乗って未来知識^{チート}を使って無双するかなー^^wwwwwwww

などと思っていたが、10歳の時に父の勤めていた会社が倒産、一家離散。というか、父も母も浮気相手とサヨナラバイバイ。残された俺は連邦運営の孤児院へ

12歳の時、連邦の命令で強制疎開、ついた先はサイド7。oh・shit！

働かざるもの喰うべからず、と言うことで、幸運にも（神のご加護により）MWの操縦が人並み以上だった俺は15歳になるとアルバイトとして連邦系企業の資材運搬等を行っていた。

この時、原作介入じゃー！と、アムロ・レイやフラウ・ボウラ未来のWB（ホワイト・ベース ペガサス級強襲揚陸艦2番艦の略）クルーとご対面……と、行きたかったのだが

残念ながら彼らは『上』に住んでいた為、17歳のこの日まで会うことは出来なかったのである。

上、と言われると混乱するだろうが、コロニーは回転する筒の内側に街があるのだ。コロニーの中央を空とし、更に上には街がある。つまり、レアの真上の地区がアムロたちがいる街だ。

イメージ的には、隣の隣の町、といった所か。そんな場所、用が無いのに行くわけが無いし、行っても接点が無いので関係が出来るはずもないのだが。

ガラス部からコロニー外の採光ミラーを通して光を集める。遠心力により、コロニー内部には擬似的に重力が存在し、無重力の中ふわふわと漂うことも無い。

そんな密閉空間で、爆発が起きたらどうなるだろうか。

答えは簡単、密閉されていた空気が開いた穴から排出され、周囲の大地や機材、人ごと漆黒の宇宙に放り出されるのである

バリバリバリッ！

数百メートル先に現れた緑色の鋼鉄の巨人が、手に持つマシンガ

ンを狂ったように撃ち続ける

マシンガンから排出された、人の腕より大きい超高温の薬莖が足元の民間人たちに降り注ぐ

ドバツ！

軍港の機材運搬口や運搬エレベーター近くに設置された対空機銃で精一杯の抵抗をしていた連邦軍の兵が、辺りの搬入される予定だった機材ごと破壊される

「クソツタレ！」

なんてこった！ホワイトベースに乗ることが出来れば、未来知識^{チート}でモテモテ、ウハウハ、戦後は軍人恩給でうまうま

なんて思ってた俺のアホ！戦争なんだぞ！人も死ねば怪我もする、アニメじゃないんだ！なんでそんな軽い考えだったんだ！

レアは後悔していた。

そもそも、サイド7襲撃の正確な日時などとうに忘れてしまったので、8月から運搬のバイトを入れ続け、やっと起こった襲撃だった。

連日早朝から深夜までの作業、中卒なので一旦この仕事をやめてしまえば、この周辺で働くことなど出来まい。という理由で、やめる事も出来ない

そんなわけで、連日の仕事に疲れきり、加えて早朝の冴えない頭で襲撃だ。当たり前のように、逃げ惑う民間人が1人増えたただだ

った。

「おおーい、こっちだ！急げ！」

連邦軍のノーマルスーツ（宇宙作業服）を着た男が避難民の誘導を行っていた、これ幸いとシエルターに飛び込むレア。

あれから十分ほど経ち、振動も、爆発音も、銃声も、どんどん大きく頻度が増す一方だった

「落ち着け！敵は機動歩兵二人だ！」

連邦軍将校の制服を着た男が民間人に言う

（機動”歩兵”？ふざけやがって！どこが歩兵だボケ！）

レアが少しずれた抗議の声を上げようとしたとき、横の禿げた中年男が金切り声を上げた

「敵の支援部隊が現れるのは時間の問題だ！今のうちに我々をサイド7から脱出させる！」

「そうだ！サイド7には千人くらいしか人間はいないんだ！軍人なんざその中の極一部だろう！このまま押し切られて死ぬのがオチだ！」

「ホワイト・ベースがある、あれなら全員脱出できるだろう！」
周りの民間人の怒声がどんどん大きくなる、こうなったらもう止まらない。止めることは出来ない。

（ん、なんで民間人がそんな軍事機密を知っているんだ？）

レアは一瞬疑問を浮かべたが、先程の禿げオヤジが制服を突き飛ばし、シエルターを出て行った。

（うーむ、これはラッキーなのか？まあいい、ホワイトベースに乗れるんだ）

レアも後に続いた。続々と出てくる民間人

「僕たちも行こう！」

（今の声は！？）

レアは立ち止まり、後ろを向いた。昔見たあるロボットアニメの主人公のような声が聴こえたのだ。それが、彼を救った。

ギ……

緑の巨人の赤い一つ目が不気味に蠢き、ドドド、と銃口から唸り声のような音がした後、彼の前にいた人たちが、いなくなった。

レアは爆風で吹き飛ばされ、気を失った。五体満足だったのは”神のご加護”かもしれない。

レアが目覚めると、左目に激痛が奔った。

（おいおい神様よ、俺は健康なんじゃなかったのかよ？クソツタレ……どうなってんだ？）

実際はザクの攻撃で吹き飛ばされ、はずみで飛び散った破片が目に入ったのだったが、一時的なショックで記憶が混乱した彼には分からない事だった。

ゴウン　ゴウン

音が聴こえる

ギツ　ギツ

力強く、頼もしい、そんな音だ。この音は、皆を守ってくれる、目の前の敵を打ち破ってくれる。

そんな気がした。

「あ、あれは……！」

今ここに、白色の鋼鉄の巨人が立ち上がった

「……ガンダム……！」

レアのつぶやきに答えるように、白色の巨人は唸りを上げ

” 右腕を振りかぶり、殴った ”

” 二機のザクが爆発した ”

「 え、ええ ? 」

- - 【冒険王版ガンダムに転生しました】 - -

転生オリ主誕生の巻（後書き）

干く騙して悪いが…

ということ、冒険王版ガンダムです。

あまりにアレだと話題だったので、試しに買ってみた結果、予想してたよりもアレというとてもない漫画だったのです。

ツツコミたくなるんですが、原作は一切ツツコミ無くストーリーが進みます。

こりゃあ、オリ主でも入れて突っ込まないと！と、いうことで書き始めたSSです。

可哀想なオリ主君の明日はどっちだ！？

11/04/25 05:36 サイド9 サイド3に修正、ご指摘ありがとうございます

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

オリ主混乱の巻（前書き）

ガンダム破壊命令まで

オリ主混乱の巻

あの後、レアは無事にホワイトベースに乗りこみ、左目の処置を行った後、ブリッジに呼ばれ出頭、原作メンバーとの感動の対面を果たした。

が、レアの頭の中は先程の戦闘……”ガンダムがザクを殴り壊した”事による混乱でいっぱいだった。

（ええええ？どうなってんだ？なんでザク？がガンダムのパンチ一発で壊れるんだ！？）

「おい、お前」

（バルカンごときじゃあ壊れないんじゃないのかザク？って！？ええええ！？）

「聞いているのか！お前！」

（あれか？シャイニングフィンガー的なアレなのか？嘘だろ……）

「貴様！返事くらいせんか！」

先程からなんだか煩い、と、顔を上げるとそこには強面のガッチリとした体格の男が目の前にいた。顔が近い！

「うおっ！は、ハイッ！なんでしょうかね！？」

「お前、I V S 運搬のプラなんたらだろう？手伝え！」

「はあ？」

意味が分からない、何だこの野郎。というか顔が近い！

「あの、どなた様ですかね」

「俺か？俺はリュウ・ホセイ。今お前が乗っているこの戦艦に配属されたパイロット候補生だ」

リュウ・ホセイ！なんだっけ、あの、コアファイターで特攻する人でしょ。うん。知ってる。

「で、お前は？」

「あー……レア・プラナだ。……です」

「おお。プラナんとかで有ってたじゃないか！ワッハッハ！」
(全然面白くないわボケ)

「で、その連邦軍のパイロット候補生様が俺に一体何の御用で？」

「ああ、外にまだ使える資材が転がってるんだが、手が足りん。
レア、お前、MSに乗れ！」

「ハアア！？」

(それはガンダムというかアムロにやらせろよ！いや、でもMSに乗れるのか！ひゃっほー)

「ああつと、いいいえ！乗ります乗らせていただきます！」
と、小躍りしながらリュウに答えた。満面の笑みである。

リュウは春先に出てくるお花畑な人に話しかけちゃったかな？と、

一瞬判断を誤ったかと思ったが、目の前の男は運搬作業中にかなりの操縦技量を見せていた、と、思い直す。

事実、数週間前MWに乗ったレアは、崩壊するコロニー壁部用機材を周囲にあった鉄骨一本で全て打ち払い、下にいた作業員を救っていた。

といっても、レア自身はこの事をたいして難しい事だと思わずにやってのけた。地味ーな神様補正サマサマである。

ちなみに、先程リュウが言ったIVS運搬での出来事である

MS格納庫に向かう道中、レアはリュウに質問をした。

「ホセイさん、あの白い奴、凄かったですねえ！ザク？を両手で一撃必殺！！マニピュレーターに粉碎用の高熱発生器でも積んでるんでしょ？」

「（……ザク？）ああ、ガンダムか。いや、あのガンダムにはそんな代物積んでいないぞ」

「えっ」

（ええ？シャイニングフィンガーじゃないの？ええ？）

「それと、リュウでいい。『ホセイさん』なんざくすぐったくてかなわん」

「は、はあ……」

（パンチ>>>>バルカン砲なの？ええ……？）

レアが思考の渦に飲み込まれている間にも作業はつつがなく進行了た。

といつても、リュウがガンタンクの下部に乗り、レアは上部で確認作業と補助をマイクで指示するだけだった。

人並み以上にMSを扱えるとしても、マニュアルすら読んだことの無いレアが手足のようにMSを動かすことは出来ないのだ。ニユータイプじゃないし。もちろん種なんか割れない。

最終的に、ホワイトベースの運用可能な兵器はガンダム・ガンキヤノン二機・ガンタンク・コアファイターの予備機となった。

（あれ、ガンキヤノン二機あるのにガンタンクもあるの？あれ？）
レアがまた混乱していた。

- - - - -

いよいよサイド7からの出航である

が、レアは救護室にいた。左目が疼くのである。これがチートオリ主であれば、ギアスだったり魔眼だったりするのだろうが、残念レアはちよつと健康な普通の人だった。

（つていうか、フラウ・ボウとかセイラ・マスに会おうかなーって思つて来たのに、誰もいねえでやんの……）

割とミィハーなレアである。特に、セイラ・マスには会つてみたかった。彼は此処までの不可思議な違和感は、自分の読んだことの

ないガンダム、つまり小説版ガンダムなのだろうと彼は決定していた。

といっても、アムロが死ぬらしいという情報と、セイラとヤツていたという情報は知っていた。中学時代のオタ友達からの又聞きだった。

だったら俺もXXXな感じになりたいなーなってみたいなー……とか思っていたが、残念冒険王は少年漫画だった。

「あの、左目のほう、包帯外しますね。」

（でもなー、なんかおかしいんだよなこの世界。西暦で言くと2100年？くらいなんだろうけど、なんというか、所々古臭いセンスがあるんだよね……）

「いきますね、ちょっと痛いですよ……」

「ぐあぁっ！痛くてえ！」

レアの、殆ど核心に近い考察は強制的に中断された。ちなみに冒険王版ガンダムは79年5月頃の連載である。

「クソツタレ！なんだってんだ！？」

赤茶色の髪、アジア系であろう顔立ち。看護兵が目の前にいたのに気付かなかった。

「あ、ごめんなさい。でも、今消毒して、包帯替えないといつまでも痛いままですよ」

「おうわっ！？す、すみません、怒鳴ったりして。大丈夫でしたか？」

「ええ、でも、あまり怒鳴らないでくださいね？小さい子もいる

んだし、ご老人もいますし。ストレスが溜まるのは分かりますが、抑えてあげてください……パイロットでしょう?」

「あー、いえ、違うんですよ。俺はパイロットじゃあないんだ」
(白いエプロンに赤十字、おまけに階級は軍曹ときたか。正規クルーだな)

「ええ? 違うんですか? あの、戦車みたいなMSに乗ってましたよね?」

(なるほど、資材搬入の時に見たのか。たしかに、看護兵なら救急物資の確認に来るか)

「違いますよ、MSのパイロットじゃあない。でも……」

「でも?」

「ここから脱出するなら人手がいる。そうなりゃ、少しでも動かせる奴は乗ることになるでしょうね。民間人でも」

「ええ……」

少し顔が暗くなる、そうか。正規兵だろうし、現状を考えると心苦しいだろうな。

(だつたら……)

「でも、そうなったら嬉しいですね」

「……それは、何故です?」

「怪我すりゃあんたみたいな可愛い娘の看病受けられるってんだ、そりゃあ嬉しいさ」

少し、ほんの少しだけど、笑ってくれた

瞬間

ドドヴオオオオ！

コロニーが崩壊を始める、敵……十中八九シャアだろう。の、攻撃だ

「そ、それじゃあ！」

言って、レアは駆け出した

「あ、あの！」

「なんだ！？」

振り向かずに答える

「お気をつけて！」

片手をひらひらと振って答えた。

自室に戻ったレアは（個室。資材運搬作業後に案内された、間違はなくパイロットをやらされるのだろう。もっともMSに乗りたい彼としてはどんとこいだったが）、ベットに顔を埋めてゴロゴロと転がっていた。

（うおおー！何恥ずかしいこと言ってるの俺！うおおー！うおおー！）

女っ気の全く無い運搬行、しかも神経を使う軍施設へのMW作業の連続。そして、今日の死。死。死。

レアの脳内がちょっとアレになってしまっても仕方ないことだった。脳がエロの方にシフトしてたし。

- - - - -

ビービー！

壁に設置されたモニタが起動する、反応する間も無くブライト艦長からの緊急招集が発動した。

『アムロがガンダムで勝手に発進した！貴様もMSを動かせるのだろう！？急いでMS格納庫へ向かえ！』

「無理です」

『えっ』

「えっ」

『貴様はガンタンクを使って機材運搬を行っていただろう！今は少しでも火力が必要だ。相手は赤い彗星だからな！』

「そんな無茶な！キラじゃあるまいし……俺はガンタンクのマニュアルすらまともに目を通してないんですよ！？」

『（…キラ…？）ならばリュウと共にガンタンクで甲板上に付け

！観測手ならやれるだろう！』

「わ、分かりましたよ！今から向かいます！」

（うはー、二回目が実践ってか。というか、俺に人を殺せるのか……？いや、今回はリュウが砲手だから、俺は間接的に人殺しの手伝いをするわけか……）

MSデッキに辿り着いたレアに待っていたのはリュウの怒声だった
「遅いぞ！アムロはもうガンダムで出ているんだ！急げ！早く乗れ！」

「了解です！」

先程から爆発音が断続的に聴こえている、こりゃ、外はエライ事になってるな。

（クソツタレ。俺が人殺しかどうかなんて考えてる場合じゃないな、敵は赤い彗星、こんな半端じゃあ速攻でお陀仏だ。よし！）

タラップからガンタンクの上部観測コックピットに乗り込む。今更だが、ガンタンクって宇宙空間で動けるのか？いや、昔遊んだゲームだと普通に使えたし大丈夫だな、と、スルーする。
深く考えてはいけないのだ。

『リュウ・ホセイ、ガンタンク出るぞ！』

「レア・プラナ、ガンタンク観測手。行きます！」

ノリで言ったが自分が動かすわけではない。

ホワイトベースのMSデッキ前部が開いていく

『レア、外に出たらまず甲板上に移動し固定、簡易砲台として動くぞ。言っちゃナンだがお前が一番危ないからな！ちゃんと報告しろよ！』

「ひでえやリュウさん！あんた鬼か！？」
鬼だ

『それだけ言えるなら十分だ！ホレ、行くぞ！』
ニヤリと笑ってリュウが答えた、彼なりにリラックスさせようとしたようだ。

レアの予想通り外はエライ事になっていた

ガンダムが赤色のザクに後ろから羽交い絞めされていたのだ

『フッフ、お前の力はこんなものか』
通信機の混線だろうか、通信機からは仮面のロリコンの声である
うものが発信している

『くそっ こんなところで！』
通信機からアムロのものだろう声が聴こえると共に、羽交い絞めにされたガンダムにザクが迫る！

「リュウさん、あれ！ガンダムが！」

『分かってる！おい、アムロ！今助けてやるからな！』

「データを！」

ガンタンクの観測室から、砲手のリュウにレアがガイドを送る。
クソツタレ！自分じゃ何も攻撃できない！もどかしいな！

『おおっ！』

ビシューッ

ガンダムがビームサーベルを振り切り、ザクを両断した

（ええ〜……）

ドワーッ

ザクが大爆発を起こす、しかし、ガンダムには傷一つつかない。
しかし、その光景に驚愕したもう一機のザクが動きを止めた。

ガンダムがビームライフルを取り出し、撃つ！

バッ

グアッ

一瞬後、ザクが爆発を起こす！

『ざまあみろー！』

アムロの声が、通信機から聴こえた。

（……ええ〜？……）

オリ主混乱の巻（後書き）

IVS運搬はもう出ない設定なんで忘れていいです
ガンタンクの設定は捏造です

看護兵。ヒロイン要員、なのですが、冒険王ガンダムは基本的にアムロさんが大暴れする少年漫画です。
作者は頑張って恋愛要素を入れようとするかもしれませんが、いつのまにか消えているかもしれません。名前すら出てないし。

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

もうガンダムだけでいいんじゃないかの巻（前書き）

大気圏突入まで

（パプワ？ルナツー？そんな物は存在しない）

もうガンダムだけでいいんじゃないかの巻

あれから、ブライトの帰還命令でホワイトベースのMSデッキに帰還したレアは、アムロ・レイと会話をしようとして先程帰還してきたガンダムの方に向かっていている。

あの英雄、アムロ・レイとの対面だ！という高揚感もあるのだが、先程のパンチの件もそうだが、口の悪さが気になってしょうがなかったのだ。

彼の中では、一つの疑念が渦巻いていた。

『アムロ・レイは憑依オリ主なのではないか』、と。

- - -

ここで非常に噛み砕いて説明すると、

普通に生まれるのが新たな人格を『新規作成』

転生が前の人格を『コピーして保存』

憑依が前の人格を他のキャラの人格に『上書き保存』

と、覚えれば良い。厳密には違うが、とにかく、レアはアムロが立場は違えど自分のお仲間であると思っているのだ。

- - -

プシューッ

ガンダムの前部搭乗口が開き、アムロが顔を出した。

「ふう……」

アムロ・レイだ。現実にはアムロがいたらこんな顔だろう、という顔だった。

「レイ、お疲れさん！」

出来るだけ、明るく声を掛ける。

「あなたは……？」

「俺はレア・プラナ、さっきの戦闘でガンタンクで援護に出た……
と言っても、リュウさんの上で観測手をやったただけだ」

「ああ、あなたが！ありがとうございます。お陰で助かりました！
ああ、アムロでいいですよ」
イヤミか？

「いやいや、俺は何もやってないしな。いやホントに。サイド7から赤い彗星相手にザクを4機も倒しちゃうなんて、凄いじゃないか！」

「いえ、後の2機はレアさん達のガンタンクが出てきてくれたお陰で、敵の注意が逸れたからですよ」

「それでもたいしたもんだよ。ところで……」

（本題である憑依者かどうかを聞き出したい、が、冷静になって考えてみる。

『アムロ、君は憑依者かい？』 ……ダメだ！万一違った場合この後の関係が苦しすぎる！頭の中が年中春な人だと思われる（う！）

ピーン！閃いた！ まあ、これはイメージであり彼はNT（ニュータイプ）の略、なんか凄いサイキッカー）ではないのだが。

「サイド7の時、たまたま外で見てたんだが、ザク？をパンチで殴って破壊してたよな？あれ、一体どうやってやったんだ！？」

（どうだ、憑依者ならこの質問なら気付くんじゃないか？ビームサーベルでコックピットだけを狙う有名なシーンならアニメを見ない人でも知っているはず！

俺は違和感を持っているぞ！どうだ！？）

「ああ、あの時はそのボタンを押しました」

What？

「すまん、よく聞こえなかった。もう一度頼む」

「そのボタンですよ。ほら、あの緑色の」

頭が真っ白になるとはこの事だろうか、レアの脳内会議場はドリフのコントのオチ並に愉快なことになっている。

「おおーい！二人とも、そこにいたか。レア！アムロ！ブライトが呼んでいる、至急ブリッジに集合だそうだ」

「分かりました、リユウさん。あれ、行かないんですか？レアさん。レアさん？　　おい」

- - - -

何処の世界にボタン一つでパンチを繰り出し、目の前に迫る敵ロボットを破壊できるマシンがあるのだろうか？

（パンチだ！ガンダム！　ガオーン　ってか？）

レアが脳内コントから抜け出して来た時、事態は一変していた。

気付けば自分は救護室のベッドの上、左目の痛みもだいぶ引いているようだ。

「知らないも、目が覚めたんですね！良かった！……ああ？」

（言えなかった、クソッ！いや、まあ、知らない天井じゃないんだが。一回来たし……）

「一日働き詰め直後の直後に戦闘、痛み止めの効果切れ、帰還後の急激なストレスからの開放。ショックな事が重なりましたし、気絶して運ばれてきたんですよ？あなた」

（赤茶色の髪、白いエプロンに赤十字、おまけに階級は軍曹。あの時の女の人か……）

別れの時の無駄にキメたかつこつけを思い出し、恥ずかしさで少し頬が赤くなるレアだった

「包帯も変えましたし、鎮痛剤も投与しました。メディ・ジェルもそろそろ定着するでしょうし、もう2日ほど安静にすれば包帯を外せますよ」

「ああ、ありがとう。つつても、こんなに早く手厚い看護を受けられるとは思わなかったね」

そりゃそうだ、あれからまだ一日も経っていない。はずだ。……ッ！どれくらい寝ていた！？

「俺が倒れてどれくらい経った！？」

「5日ほどですね、あなた、ろくに栄養も取ってなかったでしょう？」

そりゃそうだ、男所帯の運搬業だ、まともなメシにはありつけなかった。というか食べる暇が無かった。

「それで、5日もダウンしてたのか。うわーダッサいな俺」
ガシガシと頭をかいた。汗の臭いがする。シャワーを浴びたい。

「無理しないでくださいね、体調管理もパイロットの仕事。でしょう？」

くすり、と彼女が笑い

「ただ乗ってただけだけだな」
俺も苦笑して応えた

- - - - -

『大気圏突入15分前、各員は所定の位置につき待機。民間人は安全を確保の上、振動に備えること』

艦内放送だ、大気圏突入！？シャアが来るんじゃないか！？

「クソツタレ！」

あわてて走り出す。医療用の簡易式シャツとトランクスのような物しか着ていなかったが、気になどしてられない。

「あ、ま、待ちなさい！」

看護兵が何か言っているが聞こえない。急いでMSデッキに行かなければ！

「レアさん！」

「おお、レア！大丈夫なのか！？」

アムロとリュウだ。その横にいるのは……あー、誰だ？まあいい、今はMSに乗るのが先だ。

「急いでMSに乗りましょう！シャアが来るんだ！」

「レア、無茶言つな！お前さんは病み上がりだろう？」

「そうですよ、レアさん。無茶です」

「そうそう、アムロとリュウがやってくれるってんだから、邪魔な怪我人は二人に任せて休んでなつて！」

「カイさん！そんな言い方は……！」

なるほど、こいつがカイか。言われりゃそんな感じだ。

「言い争ってる場合じゃないだろうが！早くMSに乗せる！」

『乗せてやれ、リュウ！』

「ブライト！聞いていたのか！？」

全員が驚きモニターの方を見た、MSパイロットの詰め所のような場所なのだ、艦長と繋がっていても不思議ではないか。

『相手はあの赤い彗星だ、どんな手を使ってくるのか分からん。出ないにしても、待機状態にしておけば、不測の事態には対処できるだろう』

「しかしブライト、レアは怪我人だ。しかも病み上がり。こう言うのもナンだが、MS搭乗訓練も適性検査もしていないじゃないか。

正直、レアを乗せるくらいならカイを乗せたほうがまだマシだ」

「お、俺かよ！？嫌だぜ俺は！そ、そうだ！タンクの適正はハヤトの方が上だろ！ハヤトを乗せるよ！！」

『フン、いいか、カイ！今は戦力が少しでも多いほうが良い！ハヤトがガンタンクに乗るのなら、お前はガンキャノンに乗るんだ！これは命令だ！』

「横暴だぜ！ブライトさんよオ！」

室内の空気が悪い。ブライトの言い方は確かに悪いが、今は戦力が必要なのも事実。

プシュー

密閉室の扉が開く、白い服を着た女性が入ってきた。先程の看護兵だ。今日はよく会っな。

「ハアツ、ハアツ、ま、待ってください。彼を、レア・プラナさんをMSに乗せるのは看護兵として反対です！」

『君は？』

「あ、し。失礼しました！看護兵のマサキ・アンドー軍曹であります！」

敬礼をして応えた。あまりやり慣れていないのだろう、動作がぎこちなかった。

あ、名前今知ったわ俺……

- - - - -

結局、俺はMSに乗せてもらえなかった。が、ブリッジでオペレーター兼索敵レーダー補助の役目を負わされる事になった。

難しく言ってるが、レーダーを見て敵が何処にいるかをアムロに教えるだけだ。ちなみにセイラさん……らしき人は艦内のダメコンオペレーションだ。

今戦場に出ているのはアムロの乗ったガンダムただ一機、正直に言うとうと、悔しい。

が、今の俺の役目は探索とオペレーションだ。正確に敵位置を示し、味方の援護を行う。ここを切り抜けさえすれば、またMSにも乗れるだろう。

「アムロ！敵MSが3機接近、速度からしておそらくザクだ！」

『ちっ 今度は赤い彗星抜きかい!!』

（小説版アムロってこんなに口悪いのか……いや、やっぱり憑依者？うーむ……）

間違いである。

おそらく被弾面積を減らす為であろう棒立ちの頭からの進行をやめ、近付いた敵のザクがヒートアクス片手にガンダムに襲い掛かる！

ガシッ

が、ガンダムの堅牢なシールドによって弾かれる

その隙を狙い、もう一機のザクがマシンガンでガンダムを狙う！

バッ

が、ガンダムの堅牢なシールドによって弾かれる

硬直した後方のザクに、ホワイトベースからの主砲がお見舞いされた。やった！

ガンダムは……左手に持ったビームサーベルで横に切り払っていた。さすがはアムロ。でもいつの間にシールド右手に持ち替えたの？

「やったな、アムロ！」

『ヘッ！ざまあみやがれ！』

瞬間

ムサイからのビーム砲が、ガンダムに直撃した

『うあああー！』

「アムロ！」

なんてことだ！小説版のガンダムはアムロが死ぬとは聞いていたが、こんなに早く死ぬなんて！ちくしょう！ちくしょう！あの時俺が無理してでも出ていれば！！

眩いビームの粒子光が消える、周囲のチリやデブリが、放たれた主砲の威力を物語るように硝子の雲になっていた。

雲が晴れる。

無傷だった。

（……ええ……？）

ブライト艦長がおもむろに通信用のマイクを取り出す。

「アムロ、大気圏内に飛び込め！」

『逃げろって言うのか！？』

「バカ！避難民の命だってかかってるんだ！突破口を開くんだ！」

一瞬呆けていたレアだったが、何とか立ち直った。慣れてきたよう
だ。

「か、艦長！無茶です！敵戦艦の主砲が直撃したんですよ！？そんな状態で大気圏突入なんてしたら！」

『くそっ しょうがねえな』

（…………ええ…………？）

無事に大気圏突入できた。

もうガンダムだけでいいんじゃないかの巻（後書き）

前回書き忘れていましたが、MWの設定も捏造です。

看護兵の名前が明かされましたが彼女はオリキャラではありません、苗字はオリジナルですけど。捏造です。

このSSのほぼ全ては捏造でできています

が、アムロやガンダム関係のぶっ飛んだ行動や結果は恐ろしいことにほぼ原作通りです。

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

成層圏に白騎は翔ぶの巻（前書き）

ガルマ出撃すまで

成層圏に白騎は翔ぶの巻

「高度20,000、敵反応無し。各員は艦の被害報告を知らせ！」
メガネの少年が現状報告を促す、型に嵌った様な言い方なのはマニュアルをそのままぞっているからだ。

そもそも、現状のホワイトベースにはサイド7の襲撃によって正規の軍人は戦闘に参加しなかった救護兵や修理兵、コックや機関部の整備兵等の後方人員しか残っていないので仕方が無い。

生き残る為に必死にオペレーション業務を覚えた彼は褒められてもよい程だ

『右舷後部オートリジェクターの反応無し！右舷後方以外は問題無し』

『光学探索、大気圏突入時の衝撃で艦首下部第2から第5ブロック、左舷後方部第3、第6ブロックの反応無し！』

『左舷中央部格納対空機銃の格納部分に異常アリ！修理班によれば予備部品が無いので弾薬を他ブロックの機銃に回したらどうかとのこと』

次々と損傷報告が上がってくる。

サイド7の崩壊、シャアの二度の攻撃、無茶な大気圏突入。ルナツーでの修理や補給が無かったホワイトベースは大きなダメージを負っていた。

「まずいな、修理班は艦首光学探索ブロックを最優先で修理に向か

え！外部作業は対流圏、10,000……いや、5,000を切つてから作業に向かえ」
ブライトが指示を出す。たしかに前方への敵探索が不十分なのは追われる状況では苦しいか。

「艦首のダメージがひどいわ。早めに修理すべきなんじゃないかしら？」

操艦席からブライトに声をかける女性、おそらくミライ・ヤシマだろう。

たしかに、艦の操縦という非常に重要な位置にいる彼女だ、目隠しして操艦しているような今の状況はすぐにでも改善してほしいはずだ

- - -

激動といってもいい一日（レアは気絶していたので六日だが、彼の主観では一日）で忘れていたが、色々とイベントが発生していたはずだ。

（旧ザクが補給を邪魔する話があったよな？ルナツってどんな感じだったんだろう？小惑星を基地に改造するなんて凄くワクワクする）

そこまで妄想して、レアにある疑問が浮かんだ

もう一人軍人いなかったっけ？

誰だっけ、思い出せない。聞いた方が早いかな。

「艦長、他に……」

（あー……何て言えばいいんだ？『お前の変わりに指揮できる奴はいないのか？』うん、ダメだな。まあ、小説版にはいないんだろう）

「どうした!？」

「いえ、なんでもないです」

リード中尉、哀れである。

（それにしても、ブライトが荒れてるなあ……。無理も無いが、19歳で艦長だ。俺だったら死んでもやりたくない）

老けて見えるがブライトは現代日本で言えばまだ成人すらしていない、そんな状況で艦の命を預かるのだ。彼の胃は雷鳴鳴り響く暗雲の如し。ジオン軍人もビツクリだ

高度18,000……17,000……順調だ

「「アムロ!」」

金髪さんと栗色髪の少女が声をあげる、つて、アムロ!?

「アムロ、大丈夫なのか!？」

「ええ、大丈夫ですよレアさん。セイラさん、フラウ、ジオンは？」

おーう、まあ可憐な少女に聞きたいわな。今のオペレーターは俺なんだけどな!

「彼に聞いてみましょう、私はダメコンのオペレーションをやっていたから。あの、ちょっといいかしら？」

「はいはいなんです!？」

ちなみにレアが女性と話す時妙に丁寧に話そうとして変な口調になっているのは、紳士的に接すればモテるだろう!という安直な考えからだ。失敗しているが。

「あなた、名前は？」

「レア・プラナだ」

「そう、セイラ・マスよ。セイラでいいわ、ところで、ジオンなんだけど……」

「探索には反応無し。艦長、連邦に援軍呼んだほうが良いんじゃないですかね？」

「そうだな、高度5、000になったら……」

（ん、まてよ？探索は死んでるんじゃないか!?しまった!）

「まずい!前方右・左脚部探索、艦前方に探索向けられるか!？」

「どうした!？」

「艦長!今前から敵が来たら、目視以外じゃ発見できない!こいつはマズいぞ!」

『こちら右脚部探索、前方数キロに敵の爆撃機だ!どうして前部探索は気付かなかったんだ!？』

「今は前の目が死んでるんだ!すまんが前脚部探索は艦前方を注視してくれ!左もだ!」

『わ、わかった!』

「探索の映像、長距離でジャミングもかかっていますが、補正かけて出します！」

（マズイぞマズイぞクソツタレ！ジオンに爆撃機は存在しない！それなのに爆撃機と見間違う大きさの航空機だ！つまり……）

映像がモニタに出る

「なんだあれは……！」

ブライトの顔が驚愕に染まる

グオン グオン

パープルの巨大な翼、ずんぐりと膨らんだ胴体、攻撃色の赤い眼のような縦の装甲

49

「て、敵の制空権内に入っちゃったんだ……！」

アムロが吼える

ガウ攻撃”空母”

つまり、無数の艦載機と護衛戦闘機の群れの登場だ

「戦いの経験のあるものはただちに戦闘配置につけ！」

ブライトが咄嗟に命令を下す。さすがは軍人か、持ち直しが早い。

「くりかえす、戦闘配置につけっ！！」

吐き捨てるように言った。

また戦闘に出られない、が、そんな事を言ってる場合じゃないか！

「アムロ！ガンダム発進準備だ！」

「おおっ」

- - - - -

「アムロ・レイ、ガンダム 行きまーす！」

（おお、不謹慎だがちよつと感動だな）

「アムロ、すまんが今回も俺がオペレーターだ。一息ついて適性検査受けるまではセイラさんの美声は我慢してくれよ！」

「れ、レアさん！」

ズバーッ

ガンダムがスーパーマンのように両手を前に突き出し敵戦闘機の群れに迫る。

（あれ、なんとかならねえのかなあ……）

「アムロ、連続で悪いが今回の戦闘も援護はホワイトベースの対空機銃と主砲だけだ！」

「わかりました！」

「そのかわり、対空機銃の砲手はリュウさんやカイ達だ！帰る家は絶対に安全だ！やっちまえ！」

『おおよ！』

コアファイターにリュウが乗るという手もあったのだが、大気圏突入時は非常時に備えていたし、今の戦闘は乗り込む暇も無く対空戦闘だ。

今は、対空火力が少しでも必要だ。何故なら

「左舷、弾幕薄いぞ！なにやってんの！」

（おお……）

左舷の対空砲が一機潰れているからだ。

「目視する限りでは敵戦闘機は15、6といったところだ。シャアの部隊からザクを4機も潰したお前ならやれるさ！」

『やってやるぜ！』

「お前、本当にアムロかよ……」

『ああ？』

「なんでもない、気のせいだ」

- - - - -

敵の戦闘機ドップが、ガンダムの直上からひねりを入れ、ガンダムにミサイルポットを叩き込もうと急降下をかける

『でやあーっ！！』

アムロは軽々と避け、ドップはそのままガンダムを避けて離脱しようとするがすれ違う瞬間にビームサーベルで切り捨てられる

(とんでもないな……さすがはNTってか?)

次々に迫ってくるドップを切り捨て、頭部のヘッドバルカンで撃ち墜とされる

見る間にドップは数を減らし、いまや片手で数えるほどだ。

その時、ガウの後部が開く。どういうことだ?

緑色の巨人が2機、ガウから発進した。

「アムロ、敵の増援だ! ザクが二機!」

『了解!』

が、明らかに動きが悪い。ああ、あれはたぶん……

「どういうことかしら? ザクの動きが悪いように見えるわ……」
セイラさんが疑問を口にする。チャーンズ!

「溺れてるんですよ」

「どういうことだ、プラナ?」

ブライトが聞いてくる、あれー? セイラさんポイントチャンスじゃなかったのか?

「あー……ザクって宇宙と地上用でしょ? それに、アレは敵の地上部隊の空母だ。ってことは、あのザクは地上用。そんなザクを成層圏で使うと……?」

「……溺れる……と、いうことか……」

「でも、ここはもう対流圏でしょう? 重力が多少はあるから、動け

るんじゃないくつて?」

「えっ」

(えっ? どうしよう? えっ? えっ?)

レア・プラナ、想定外に弱い男である。

「いや、おそらく推力が足りんのだろう。あのガンダムのパワーですら数分の空中戦闘が限度だ」

(ナイスブライト! 肌色目とか言ってゴメンよ!)

のろのろとガンダムにザクが迫る、ヒートホークを持ち、格闘戦に持ち込もうとしているようだが

バツ

背中にマウントされたビームライフルを手に持ったガンダムに一撃で破壊された

『うっ、うおっ』

混線だ、一撃で破壊されたザクに驚愕したのだろう。その隙は、アムロにとっては一撃を撃ち込むのに十分だった。

ドウッ

「やった!」

長距離レーダー担当の少年が歓声をあげた。まあ、近接戦闘では不要だね。でもレーダー見てようね。

ん? 動きがあった、こりゃ撤退するかな?

「敵空母回頭開始、艦長、撤退しますねこりゃ」

「わかった。プラナ、アムロをホワイトベースに呼び戻せ。無茶はさせるな」

「了解、聞こえたな？アムロ、ホワイトベースに帰還しろ」

『了解しました、帰還します！』

はあ……今日は本当に疲れた、オペレーターなんて俺のガラじゃないってのに……おっと、そうだ

「長距離探査、敵が偵察機を残してるかもしれないから確認頼むぜ！」

「あ、はい！……えーと、たぶんですけど、偵察機みたいなのがいますね。探索範囲ギリギリですし、違うかもしれませんが……」

「いや、たぶん偵察機で正解だろう。あのまま見逃してくれるってことも無いだろうし、そもそも敵の空母が出てくるような所だ。敵の懐だろうな。

で、どうします艦長？」

「……とにかく、このまま下降し、山岳を盾にして連邦軍本部のジヤブローまで向かうしかない……」

ガシューッ

ブリッジの扉が開いた、戦闘態勢は解除されたので、カイやリュウ、ハヤトラしき日系の少年、そしてアムロが入ってくる。

小さな子供も三人ついてきて、アムロやるじゃん！アムロやったな！アムロよくやったぞ！と、褒め称えている。ん？ちよつとナメてないか？

「お疲れだな、アムロ」

「ええ、オペレーターありがとうございました、レアさん」

「ところで、ジオンはどうなったんだブライト？」

「ああ……」

先程の偵察機の件を説明する、と、空気が重くなった。

「次の攻撃は時間の問題か……」

リユウが呟くように言った。

やはり、常に監視され周囲は敵だらけ。重くもなるか。

（少しは明るくしないと、息が詰まっちゃまうな……よし！）
「さて、で、俺の適正検査はいつになったら始まるんだい？」

成層圏に白騎は翔ぶの巻（後書き）

エイプリルフル？冒険王版自体が冗談みたいn…おっと。

オートリジェクターって何でしょうね？

^{すこしふしぎ}SFな世界なんで、各自脳内補完してください。たぶんジャイロ的なアレです。

妄想SFワードって考えるの楽しいよね

まずい、セイラさんの口調が分からない。こんな感じだったよね！？

次くらいにオリ主君がやつとMSに乗ります。たぶん、きっと…

ストーリー部分が、TV版と比べてゴリゴリ削れてることに違和感をもたれると思います。

しかし、冒険王版をメインにしているので寧ろ水増しが大変です。

上手い人ならもつと綺麗に、面白く、読みやすくストーリーを膨らませるのですが、今の作者の技量では無理です。精進精進…

1 1 / 0 4 / 0 1 0 8 : 0 2 微修正・タイトル入れ忘れ修正

1 1 / 0 4 / 0 1 0 8 : 2 0 溺れるゝ辺りを微修正

1 1 / 0 4 / 0 2 0 5 : 2 7 誤字修正

作者はこれが始めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

ガントク回頭せよの巻（前書き）

幕間

ガンタンク回頭せよの巻

「レア、そういえばお前MWの操縦資格を持っていたな？適正ランクはいくつだった？」

「ああ、バイト受かった時に研修で取られたあの資格か。えーと、たしかB - とかなんとか。」

検査官に褒められたんですけど、それってどれくらい上等なモンなんですリュウさん？」

「ほう！B - ときたか！まあ、タンクの時も落ち着いていたしな。それくらいは行くか……」

ほれ、設定完了だ。前と同じで最初に対G適正や反応速度を見るテスト、次いで、歩行訓練、簡単な射撃・格闘テストと続く。が、マニュアルは読んだんだろ？」

「たしかにガンタンクのマニュアルは読んだけど、さっきのタンクでの検査とは別物だろ……ガンダム使つてのテストってのは！」

「なに、足がついたただけだ！気楽にやればいい」

ニヤニヤと笑いながらリュウが言う。コイツ、楽しんでやがるな？

「そうですよ、レアさん。ガンタンクであれだけやれたんですから、ガンダムも上手く使えますよ！」

「アムロ！俺はお前と違って初出撃でザク二機撃破なんて無理なんだよ！！しかもガンタンクから続けてだ！休ませてくれよ！」

- - - -

少し刻は巻き戻る

パイロットのMS慣熟訓練室であるテストルームでレアの適正試験が開始されて2時間ほど経った

MSのコクピットを模した搭乗席に座り、シミュレーターを起動しての非常に簡易的な適性検査である。

このシミュレーターはブロック化した装置ごと動いたり傾いたりして擬似的にかかる重力を表現するのだ。

通常、対G訓練には大きなブランコを横にしたような宇宙飛行士訓練用の装置が必要なのだが、強襲揚陸艦であるホワイトベースにはそのような大掛かりな装置を設置するスペースが無い。その為、簡易的な検査になった。

最初の10分は（おー、ゲーセンみたいだな）、と、気楽だったレアだが擬似的な再現でも9G程度が幾度か発生し、神のご加護で健康で頑丈な体を誇るレアですら苦しくなってきた。

彼の脳内では最初、『俺が乗るのはガンタンクなのに、こんな超重力発生するのか？』という疑問が浮かんだ。

しかし、その疑問を彼は（いやいや、ステップ回避するとこんな感じなんだろうなあ……）と、考え直す。

ここで、彼の原作知識を説明すると、TV版は契約していた専門チャンネルでの再放送をたまに流し見、かつこいいな……と、劇場版三作品をレンタルショップで借りてきて鑑賞。

そしてガンダムを使ってVSするDXなゲームにハマリ、TV放送し始めたSEEDにハマリ、次々と出るガンダムゲームも買っては遊び……と、いうように、彼の原作知識はいわゆる『にわか』ではないのだ。

だから、テンプレチート転生者ならば回避できるような敵との遭遇戦を回避することは、いち民間人である今の彼では不可能だった。

加えて、ゲームになるようなイベントは大きく、悲劇的な戦闘が多く、そしてゲームにあわせて改変されているものが多数だった。そして、彼はそれを正史だと考えている。

そんな状況では転生でのアドバンテージになるような未来知識^{チート}は全く役に立たない。

まあ、この世界は冒険王版なので、TV版を完全に記憶していたとしても同じく役に立たなかったのだが。

転生して17年も経ち、その間そこそこ激動な人生を歩んできたレア・プラナだ。重要な切り札と成りえる未来知識^{チート}も、だんだんと薄れ、消えていく。

そんな現状を危険と考え、転生した時に決めたMSに乗るという目標もあつた事だし、キツイバイトも我慢して原作介入をしようと努力したのだ。

そして、その努力はホワイトベースに乗り、今こうしてMSに乗る為の適性検査まで受けているという形で実った。それが彼にとって

本当に幸せなのかは分からないが。

対G・操縦・簡易的な射撃・格闘訓練ときて、ついに本番のMS対戦闘訓練（検査）だ。

ガンタンの操縦は、（彼の主観では）ちょっと昔に遊んだゲームに置き換えて操作感覚をあわせる事にした。

ポリゴン映像で表現されるザクが遠方に見える。今回レアが乗るガンタンクでとる戦法は、高速で移動し、敵側面から移動しながら攻撃というものだ。

通常の連邦軍が使うシミュレーターでは仮想的は戦車や航空機なのだが、ホワイトベースはV作戦に関わる艦なので、搭載されているシミュレーターの敵もMWを大きくしたような人型にも設定できるようにになっていた。

それにここまでのザクの映像を合成して表示する、といった感じだ。しかし、元となっている敵AIは戦車やヘリ、戦闘機なのであまり練習にはならないというのが現状だ。

そんな状況も、ホワイトベースとガンダムがジャブローに辿り着けることができれば改善されるだろう。

右旋回、直進。目視で敵はまだ見えない。直進、まだだ。直進、見えた！アレだろう。まだ気付いてはいないようだ。先制攻撃だ！

- - -

『当たれえ！』

レアの声がモニター横のスピーカーから響く、ガンタンクの両肩部に備え付けられた220mm砲が吼える！が、あれじゃあ当たらないな。スジは悪くないんだが。

「で、ブライト、どういうことなんだ？」

『レア・プラナはジオンのスパイかもしれん、ということだ』

ブライトの声だけが耳に付けたイヤホンジャックから聞こえた。なるほど、秘匿回線を使えというのはそういう事か。

たしかに、レアやアムロ、カイ、ハヤト達がいるこの場でモニタ越しに顔をあわせて話すような事では無いな。

レアの顔が映ったサブ・モニタをちらりと眺め、眼を細める。接近して両腕部のポップミサイルを撃ちこみ始めた。おいおい、それじゃあガンタンクの優位性を殺してるぞ！

「たしかに、レアはサイド7のホワイトベースが停めてあったYブロックとは反対側のNブロック住人、両親もいない一人暮らし。本人が言うには、だが。

それを信じるならば一般人。その割りに戦場にも混乱せず対応している、しかしなブライト……」

『では、“ザク？”という呼称を知っていたのは何故だ？我々もザクといった呼称は使っていたが、あれが“ザク？”という兵器だとは聞いたことが無い』

「言い間違えかもしれندろう？それに、スパイならばガンタンク

の観測手をやった時にでもジオンに戻ればよかったはずだ。大気圏近くだが、俺達は逃げる前提で戦っていた。

V作戦へのスパイならば外に出てすぐのあの時なら逃げたはずだ。違うかブライト？」

『逆に言えば、逃げることしか出来なかった私達ならスパイ行為を続けることも簡単だったのではなくって？』

「せ、セイラさんも！なら、あのガウの時はどうだ？本当にスパイなら、敵を殺しやすくする手伝いなんぞすまい！」

『いや、対空砲座についていたリュウはあの時のブリッジでの会話を聞いていないだろうが、あの時プラナはガウの事を”空母”と分かっていたようだった。光学探索の報告では”爆撃機”だったのだ。一般人にしては軍隊に詳しすぎる』

『そうね、”溺れるザク”なんて、軍人であるあなた達でも知らなかったのでしょうか？』

そこまで話を聞いていると、リュウの心の中にも疑問が芽を出してきた

アムロはともかく、カイやハヤトの2人はサイド7から大気圏突入までの5日間、少ないながらも練習する時間があつた。それでも、最初は酷いモンだ。歩けもしなかった。それを、そこから数日で戦闘まで持ったいった事は驚愕なのだが。

しかし、レアは違う。あいつはサイド7を脱出した時の戦闘後に倒れて、つい2日前に起きたばかりだ。その直後も戦闘だった、学ぶ時間など無かったはずだ。

それなのに、いくら脚部が無限軌道であるガンタンクであっても戦闘機動まで持っていていけるのは異常の一言だった。今もそうだ。まるで戦闘経験があるような動きを見せている。

「……うーむ、そうか。一応注意はしておく」

『ああ、頼むぞリユウ。一応、数人の正規軍人には注意を払うように言っておく。……そうだな、リユウ、大気圏突入の時、プラナがMSに乗ろうとして来た時に彼を止めた看護兵がいたな？』

「ああ、たしかアンドー軍曹だったか？」

「セイラ、アンドー軍曹を呼び出してくれるか？……ああ、アンドー軍曹。レア・プラナの件なんだが……」

通信を切る。えらいことになったな……見た限りでただのアホなんだが。

- - - - -

「あたれえー！」

左操縦桿のトリガーのような前スイッチを押す、気合入れて叫んだ、当たれよ！

ズガーン

黒煙と舞い上がる土砂、そして炎。

が、真ん中を狙ったのにザクには当たっていない。コリオリ効果ってやつか？よく分からんが……

こちらの攻撃に気付いたのか敵のザクが行動を始める。

ドオウ ドオウ

ザクからのバズーカ砲撃だ。が、こちらも長距離からの砲撃だったのだ、当たらない。

「もう一発！当たれよ！」

トリガーを押す、今度は少し上を狙う。

ズガアーン

黒煙と土砂、が、ダメだ。

（ええい、まどろっこしい！）

敵のバズーカが反撃で飛んでくるが、当たるはずがないので無視して前進を始める

ザクから見て右斜め前方に高速で進軍、その間も当然だがザクをメインモニターの中央に入れ続ける。

前よりは近くなった、トリガーを押し、撃つ！

ズガアーン

また同じ、黒煙と土砂。しまった、ザクが見えない！

ドオウ

バズーカが黒煙の向こうから飛んでくる。危ない！

「こつちが見えないのに相手からは丸見えってか！？これだから融通の利かねえAIは！！」

左斜め前方に切り返し、回避。グッ！横Gがキツい！

そのまま前方に迫るザクにポップミサイルを撃ち込む。回避運動をするザク、左に避けた！

「甘いんだ……よオツ！」

同じくポップミサイルをばら撒きながら左に旋回、Gは耐える！

ザクの目前に接近、避け切れなかったポップミサイルに当たり硬直している。チャンス！

「墜ちろッ！」トリガー！

衝撃！シェイクされた、うおお……これキツツいな！

ステータスを確認。左腕部に直撃！？メインモニタを見れば左にもう一機いた、クソツタレ！芋野郎が！

（なら、あの戦法だ！）

ガンタンクの下部ブースターを最大出力で動かす、急上昇するガンタンクの巨体。

キャノンの斜線に前方のザクを入れる為、前に転がるように下部前方ブースターをカット、強烈な押し付けるようなG！

ブラックアウト寸前のレア、が、意地でトリガーを押す！

「吹き飛ばええええ！」

ズガアアアアン！

ザクが吹き飛ぶ！やった！

キャノンを空中で撃った反動で、今度は逆に引っ張られるような強烈なGを感じながら、ガンタンクは背中から着地（墜落）した。

よっしやああああ！一機やったぞこら！うおおおおえええ！気持ち悪ッ！

ドウッ ドウッ

大きな振動、前部モニタグラックアウト。ステータスオールレッド。搭乗者死亡。

無慈悲な結果が表示される

左のザクを完全に忘れていたレア。アホである。

こうして、レア自身が操縦する初陣たるシミュレーターでのガンタ
ンク対ザク戦は幕を閉じた。

『状況終了、前々から思ってたがアホだなお前』

リュウさんからの通信が入る、酷い言いようだな、こっちは勝つた
めに必死に……うぷ……

「吐いていいっすか……？」

『お前が掃除するならな』

（ひでえや……）

我慢した。

ガンタンク回頭せよの巻（後書き）

作者のイメージとしては、アムロがA A、コウがB +、シローがB、クリスがC +といった感じです。一般人がDとかそんな感じ。専門職（MWを使った運搬業務みたいな）の人ならD +とか。

敵軍でいうと、シャアがA +、ガトーがA、ノリスがA -、バーニイはCといった感じ。

クリスさんよりは動かせますが、B -のレア君はシローのように背部のウェポンラックをビルに押し付けて減速するといった機転はききません。彼の操縦方法は何処か（ゲームやアニメ）で見たモノのコピーでしかありません。

操縦の腕はあるのですが（B）、レア君は地球生まれのオールドタイプなので、宇宙空間の機動がちよつと悪い（-）……といった感じです。

経験を積みればなんとかなる……かな？

ガンタンクの操縦の時にイメージしたのは某土製の銃驚獅子、という割とどうでもいい裏設定。

ブルーじゃねえのかよ？という突っ込みは勘弁してください

たぶんだけど、転生オリ主なのに初陣がよりもよってガンタンクってウチだけじゃないかな？w

残念ながら冒険王世界に旧ザクは存在しません

ところで、side とか入れるべきなんですかね？ほぼレア君の一人称なんでいらないかな？と思ってるんですけど。

1 1 / 0 4 / 0 2 0 5 : 2 6 タイトル微修正

1 1 / 0 4 / 0 2 0 5 : 4 5 いろいろ修正、リユウの会話修正。

1 1 / 0 4 / 0 2 0 5 : 5 0 小説の感想受付がユーザーのみにな
っていたのを全員に設定。今気付きましたごめんなさい

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありました
らご指摘頂けるとありがたいです。

Lost Test Chroniclesの巻(前書き)

幕間
2

Lost Test Chroniclesの巻

グオン グオン

擬似的にはあるが、ガンダムのOSが起動し戦闘態勢に移る。

凄いな、ガンタンクよりも5倍以上のエネルギーゲインがある……でも何に供給されてるエネルギーなんだ？

「リユウさん、アムロでもいいや、このエネルギーゲインってステータスに表示されてるのって何のエネルギー何だ？マニュアルをざっと見た限りじゃ載ってなかったんだが」

『いえ、僕は知りませんね。どうなんですリユウさん？』

『一応重要機密だから載ってないんだが……まあいい、テストパイロットっていう立場上聞いたところによると、メインジェネレーターから発生した余剰エネルギーってのは通常破棄されるんだが、ガンダムやガンキャノンなんかはビームライフルにジェネレーターからエネルギーを供給する際にその余剰エネルギーを『EICA P』ってのにプールしておいて再利用が出来るらしい。タンクはビーム兵器が無いから除外だな。で、そのプール状態からの変換効率だとか何とか』

ふーん、その効率が良ければ良いほど長時間の戦闘も可能になる、か。

「なるほど、まあ、普通に乗る分じゃ関係ないか。それじゃあ初めてオツケーっすよ」

- - - - -

「メインシステム、戦闘モード、起動」

システムが模擬戦の開始を告げる

『レア、今回もさっきと同じでザク二機を相手のシミュレーターだ。目標タイムは10分、ガンダム性能なら十分にこなせるハズだ。ちなみに、さっきから横でお前の失敗に昼飯を賭けてるカイは17分52秒、まともに動かせていなかったハヤトは20分でタイムオーバーだ』

『ちょ、リュウ！お前なんで言っちゃうんだよ！』

「カーイー、お前後でちょっと俺とお話な？……っと、始まった！」

先程と同じ光景だ、前進開始、まずは歩き、走り、続いて走りながら地上でやや上に向けて走り幅跳びのようにブーストジャンプ。

ガンタンクの時とは段違いのスピード、その割にGはそれほどキツくない。近・中対応の格闘戦を想定して作られた機体と、長距離戦や指示目標への超長距離砲撃を想定した機体では全く別物になるのも当然だろう。

あのあとトイレで吐き終わってリュウさんに聞いたところによると、あのシミュレーターは簡単な移動と長距離射撃による訓練だったらしい。

そんなシミュレーターで高速突撃戦をタンクでやった俺は、そりゃあアホだろう。

当たらないからとジャンプしてザクに直に当てるような訓練ではな

く、ゆつくりと移動しながら攻撃してくる敵の攻撃を回避しながら殲滅する砲撃戦の訓練だったのだから。

遠方にザクが一機、おそらく、近くにはもう一機ザクがいるはず。

今度も速攻をかける！

「今度は当たれよ！」

トリガー！前方にステップ移動しながらビームライフルで攻撃をかける、当然、そんな不安定な状態では当たらない。
が、連射すれば！

「おらあッ！」

バツ　バツ

一発のビームライフルがザクに命中、左腕部に命中、か？
続けて撃ち込む、4、5、6、発熱警報！

『レアさん、そんなに連射しているとすぐに弾切れしますよ！？』
アムロからの通信だ、そんなこと……

「分かってんだア、よッ！」
ザクがバズーカで反撃に出る。右にステップして回避！おお、ガンタンクじゃあ高速旋回だけで死ぬかと思ったが、これくらいのGならまだ行けるな。

エネルギー残量を見るに、あと14、5発つてところか。
ゲームみたいにリロードがすぐにできるわけでもなし、温存するか？

ドウッ　ドウッ

岩陰からもう一機のザクが出現、リーダーには映っていなかったがガンタンクの時の経験から回避できた。

二対一、状況は悪いが右側の一機は手負いだ。……冷却完了！このまま射撃で潰す！

バツ

外れ、敵の反撃！クロスファイアは嫌だな、右へ回避！

ドウッ　ドウッ

強大な爆発と威力を持ったザクのバズーカの弾幕の合間に

バツ　バツ

レアが駆るガンダムの朱色のビーム光が煌く

距離は数百メートル、もう既に近距離格闘の間合いに入りそうだ。

「墜ちろってんだよ！」

バズーカの砲撃の合間を縫い、立ち止まって破損した手前のザクを狙撃、やった！

爆発、大きな振動と黒煙、炎。これはシミュレーターだが、実戦なら相手は死んでいるだろう。俺が殺した。

「うおッ！」

黒煙の向こうからバズーカの弾が飛んでくる、直撃コースだ。シールド！

衝撃！ステータスを確認、異常は……ビームライフルの粒子加速器に異常発生、ヤバイ！

咄嗟にビームライフルを投げ捨てるレア、朱の小さな爆発がライフルから起きた。

危なかった、あのまま持っていたら右手のマニピュレータにある接続端子も死んでたな。

ドウッ　ドウッ

バズーカ接近、左へ回避。やれやれ、ガンダムの硬さに感動する暇もなしってか？

右手にビームサーベルを持ち、盾を前に構えてステップをして接近する

ドウッ！ザクが発砲、これは直撃……だが、シールドで無視できる！

「おおおッ！」
ドゴォン！

そのままシールドでザクに体当たりをぶちかます、ぐあッ、さすがに衝撃が大きい、体が軋む。

でもッ……！

「獲った！」

吹き飛んだザクに更にブースターを踏み込み右手のビームサーベルで腹部を横薙ぎに切り抜ける！

そのまま大きく跳んで離脱、一瞬遅れて背部で大きな爆発音！

ドッゴオオン！核融合炉への誘爆だろう、大きなキノコ雲が発生している。

（あぶねー……切ったまま止まったら死んでたな……）

そのまま離れて着地、ステータスを確認。左腕間接部のコンディションイエロー、か。アレだけの衝撃でたったこれだけの被害とは、いよいよもって化け物だなガンダムってのは……

「訓練終了、経過時間6分16秒。システム、通常モードに移行します」

- - - - -

適性検査……という名の訓練というかりユウのシゴキが終わりブリーフィングルームに集まるレア達。

ちなみに、あの時昼食で賭けをしていたカイ君にはお話の結果楽しい楽しいお食事（オートミール三種盛り、兵士どころかホワイトベースに避難してきた民間人にすら大不評）が振舞われる事になった。

ブルー垂れているカイを笑いつつ、ほぼ話したことのなかったハヤトと軽い挨拶を交わす。

と、そこにリュウが遅れて入ってきた。次いで、ブライト、セイラさん、加えて何故か看護兵のマサキ……だったかな？とにかく、彼女も入ってきた。

「さて、検査は終了。ということで、これからお前達が担当するMSを発表する」

「おいおいおい！どういうことなんだいリュウ！俺が適正検査を受けたのはあくまで臨時徴用だったはずだぜ！？いつの間に軍人になっちまったんだ！？」

「か、カイさん……抑えてください……」

「しかしよオハヤト、いくらなんたってコイツは酷いぜ？ええ？」

ブライトが一步前に出て、カイの方を向いて言う。

「それについてはすまない、と思っではいる。が、今は非常時だ。四の五の言わずに乗ってもらう。貴様もこの艦の人々と共にこんな荒野で骸を晒す気はあるまい？」

また空気が悪くなる。ちょっと牛乳とかにぼしとか食べてカルシウム補給したほうが良いんじゃないかねえの二人とも。

「……チツ。ハイハイ、わかりましたよブライトさん」

「そうか……各員、それでいいな？」

「……はい」「……ええ」

アムロとハヤトが応える、俺も一応言っておくか。

「ああ、任せとけて」

ブライトの眼が一瞬鋭くなった、ような気がする。が、すぐに元に戻った。なんだ？

「……ああ、頼んだぞ。ところで、各員には戦時特例で臨時階級を与えていたが、プラナ、貴様には与えていなかったな。民間人がMS搭乗員になるのはマズい、ジャブローに着いたら即拘束、なんざになりたくはないだろう？」

「階級ねえ……」

あまり階級には興味がない、が、MSに乗りたいのにはジャブローに着いたら尋問で戦争が終わるってのも嫌だな……

「ああ。ということで、レア・プラナ、貴様は本日9月24日をもって軍曹と任命する！」

「軍曹ねえ……アムロ、お前は何なんだ？」

「一応、曹長ですよ」

（どっちが上なんだ？）

分からないなら何故聞いた、レア。

「さて、こっからは俺だな。」

今度はリュウさんが一歩前に出て話し始める

「まずはアムロ、お前はそのままガンダムに乗れ」

「分かりました、でも、レアさんもかなり動かしていたようすけど？」

「ああ、たしかにレアは動かしてはいたんだが、いかせん射撃武器の反応が悪い。加えて、スコアはアムロ、お前の方が上だ」

「へえ、アムロ、お前どれくらいであの検査終わらせたの？」

「ええと、たしか3分くらいでした」

「わお……」

（ダブルスコアじゃねえか、とんでもねえマジで……）

「無駄口を挟むな、レア、アムロ。ンン！さて、次はカイだ」

空気を切り替えるようにリュウは一度咳払いをした

「カイ、お前はガンキャノンだ。ハヤトほど適正が無いわけじゃないが、良くもない。が、射撃のセンスは悪くない………ってのが理由だな。次、ハヤト」

「ハイ」

わざわざ返事を挟む。真面目だな。

「ハヤト、お前は他の3人と比べて適性がない。全く無いという事でもないし、訓練すれば十全に動かせるようになるが、生憎今のホワイトベースにはMSは余っていない。ということで、ハヤト、お前は俺とガンタンクだ。」

幸い、先程連邦軍の部隊と連絡がついた。あと数日もすれば補給が届く、その時にでも、MSに補充があれば、再検査して適性を計る。精進するんだな」

「は、ハイ……」

少し俯いて応えた。ああ、ガツチリしたアニキと二人乗りだもんね、嫌だよな。

「さて、最後にお前だ、レア」

「あいよ！」

やーっとMSに乗れるぜ！つつても余ってるのはアレだけ……

「お前は最後に残ったガンキャノンだ、ただし、ガンダムの予備の盾を装備してもらう」

「ハア！？」

いやいやいや、ガンキャノンにガンダムの盾？ねえよバカ！似合わないだろうが！

「適正訓練の結果だ、レア、お前は機体を粗末に扱いすぎだ！ガンタンクの特攻といい、ガンダムの体当たりといい。今のホワイトベースには物資が足りないんだよ。で、そんなお前をガンダムに乗せてほとんどパーツを消費してる暇は無い！」

うえーい、こっちは必死こいてやったのに……

「でも、ガンダムの盾なんて持つちゃ砲撃できないんじゃないですか？たしかガンキャノンって、中距離砲撃支援MSでしたよね？」
「ナイスアムロ！さすが支援攻撃LV3！」

「通常はそうだが、幸いサイド7から持ち出せた武器に肩部用のスプレー・ミサイルランチャーがあった。レアのガンキャノンにはあっちを乗せる。ちなみにもう作業は始まつてるからな、取り替えるだけだから素人でもすぐだ。ま、諦めるんだな」
「ニヤリと笑うリュウ、お前は俺に怨みでもあるのかコラ。」

「さて、以上だ。何か質問はあるか？」

「えーと、いいか？」
「搭乗MSの発表会も終わったことだし、気になっていたことを聞こう。」

「ああ、いいぞ、レア」

「どうして彼女達がここへいるんだ？」

「私がメイン貴方達のメインオペレーターになるからよ、レア」
「ヒュー　カイが口笛を吹いた」

「なるほどね、よかったな、アムロ！愛しのセイラさんの美声をいつでも聴けるぞ！」
「ニヤニヤしてアムロを小突くと、顔を赤くしてアムロが反論してきた。」

「れ、レアさん！」

「まあまあ、俺も彼女みたいな美人さんの声で戦場に出られるってんだから、男名利につきますわな。よろしく！」

「あら、貴方、マサキさんを口説いていたんじゃないかって？」

「いつ!？」

見ると、マサキさんが、苦笑しながらこちらを見ていた

……さん、か。まあ、正規軍人だし、年上だろうな。でもまあ、”あんた”なんて言っちゃってるし、今更マサキさんってのもないか。

「あー、マサキ、えーと、軍曹だったっけ？と、とにかくマサキもかわいいと思うぜ！うん！」

テンパッているレアである。相変わらず咄嗟の事態に弱い男だ。

「か、かわいい!？」

マサキが大声を挙げて驚いている、心なしか頬に朱が増したようだ。

「そ、そうそう、かわいい子にはとりあえず声かけちゃうんだよ俺！わーまいったなーこんなかわいい子に囲まれちゃって！」

こう言っているレアだが、今までそういう関係になったことは一度も無い。

思春期のハイスクールの男子学生が女の子に好かれようと焦って墓穴を掘っている状況に似ていた。

まあ、彼の顔は頑張れば二枚目に見えなくもないかなー？程度では有るし、口は悪いが明朗快活、よく言えば純情で単純だが女好き、

悪く言えば雌犬のケツを追いかける発情期の雄犬のように単純な
で女子の評判はそこまで悪くなかったのだが。

といっても、恋愛対象ではなく、友達や便利な荷物持ち、といった
付き合いである。ようは背伸びしたガキなのだ。17にもなって。

「あ、ああ、そうだマサキ、なんでここにいるんだ？オペレーター
でもないし、MSに乗るわけでもないんだろ？」

若干ラブコメを見るような温い空気になったブリーフィングルーム
の空気を換えるように、レアが切り出す。

「え、ええ、私はMSパイロット担当の医療班になったので、その
報告と、あなた」

「え、俺？」

マサキがレアの事を指差す、人に指差しちゃいけません！

「あなた、シミュレーターでの訓練の後吐いたんでしょう？医務室
に来てくださいね」

「え」！今から昼飯なんだが……」

「ダメですよ、吐いたんでしょう？お昼は抜きにするか、オートミ
ールみたいな胃にやさしいのにしてください。さあ、行きますよ」

「げえっ!？」

プッ

カイが笑った、OK、またお話したいんだよね？

マサキの先導に続き、ブリーフィングルームから出ようとしたとき、
後ろからリュウに声を掛けられた。

「ああ、そうだ、レア。一つ質問なんだが、どうしてガンダムの検査の時にヘッドバルカンを全く使わなかったんだ？」

「そうだっけ？えーと、癖だからかなあ」

その瞬間、その場にいた正規軍人達とセイラの眼が一瞬鋭くなった。……気がする。なんなんだ？

彼は戦闘の時に、昔遊んだゲームの動きをイメージしてトレースする、という戦法を意識無意識問わず取るのだが、そういったゲームではメイン武器とサブ武器を同時に使えなかったり、そもそもサブ武器が無くて全て選択式だったり……という事が多々あった。

その結果、今回のレアもガンダムの頭部にあるバルカンを一切使わず、ビームライフルで牽制を行うという非効率的な作業を行っていた。

「ああ、そうか。もう行っていていいぞ、レア」

「あいよ、カイ、お前もオートミールだからな！」

「ゲエ！？マジかよ！」

「おうよ。アムロ、ハヤト、カイを見張っといってくれよ！」

「了解！」「分かりました！」

笑って別れた

（さて、看護室か。それにしても縁があるなああの部屋……）

Lost Test Chroniclesの巻（後書き）

現在のホワイトベース隊戦力

ホワイトベース：耐久力8割くらい、敵探索・50%、前の探索が特に死んでるので、そのハイパーリンクを使って砲撃する艦中央の52cm火薬式主砲は殆ど目視で狙うようなモンなんで期待できない。両脚部にあるミサイルランチャーはその脚部の探索が生きてるんで前の敵も狙えます。というオリ（裏）設定。もちろん左舷の弾幕は薄い。

艦載機

ガンダム：アムロ・レイ

我らがアムロさんのガンダム、もうコイツだけでいいんじゃないか。は、禁句。

ガンキャノン（キャノン装備）：カイ・シデン

カイさんが乗るガンキャノン、彼の最初で最後の愛機だ。

ガンキャノン（スプレー・ミサイルランチャー装備）：レア・プラナ
一応主人公ことレアの機体。でも……

ガンタンク：操縦者、リュウ・ホセイ 観測手、ハヤト・コバヤシ
初期設定のガンタンク、二人乗り。シリーズが進むにつれて上がダミーになったり、量産されたり、後続機が出たり、試作機が出たり、上半身は回転しなかったりと様々な後付設定が生まれた。

コア・ファイター

全員分（ハヤトは頭部なので乗れない）+最初にリュウが乗っていた予備機がある。

合計5機、ただし、V作戦のMSはその特性上MSの腹部パーツになる為実質的にはリュウの乗っていた予備機が1機しかない。

- - - - -

タイトルはただ単語入れ替えただけです、試験のEXAMだと混乱すると思つんでtestの方で。意味おかしくても雰囲気雰囲気。

おっかしいなあ。レアのキャラがどんどん変なことになってきたw
今回レア君がイメージしたゲームは某戦記です、もちろんPS2版な！

オリ主の搭乗MSは暫定的にガンキャノンになりました、キャノン二機だと地味な描写になっちゃうんで、スプレーミサイル装備ですが。

といつてもレア君は医療班のマサキ軍曹と絡ませる為にすぐ怪我をします。つまり…？

11/04/05 04:09 誤字修正

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

オリ主小活躍の巻（前書き）

戦場は荒野まで

オリ主小活躍の巻

UC0079 9月26日、天候は良好

現在地点は北米、カリフォルニア。太平洋方面へ移動中、敵の索敵から目を晦ますように、崖の間を超低空飛行しつつ進軍中。

ビーツ！ビーツ！

警報が鳴り響く

「こ、これは！」

数日前にシャアの攻撃により、ジャブローではなく北米大陸に降下してしまったホワイトベース。その後方、長距離探索レーダーに入るか入らないかの超長距離でホワイトベースの追跡を続けていた敵の偵察機、その反応が消えた。

報告を受けたブライトは、レア達MSパイロットに対して万一の場合に備えて出撃待機を命じようとしていた時、それは起きた。

「ブライト、敵の地上部隊だ！」
リュウが叫ぶ！

「な、なに！」

ブライトも狼狽して答える、敵の出現が早すぎる！待ち伏せされたか！？

ギャリ ギャリ ギャリ

マゼラ・アタック、ジオン公国軍の地上での主力戦車、その群れが途切れた崖から現れたのだった。

ドオン！ドオン！

上部の砲等が主砲を撃ち

バリバリバリ

下部の無限軌道に備え付けられた同軸三連機銃が唸りを上げる

振動！

「うわああ！」

長距離探索の少年が悲鳴を上げる、クソッ！

「上昇しろ！上昇して振り切るんだ！」

「ぶ、ブライト！駄目よ、ここは敵の懐なんでしょう！？今顔を上げたら撃たれるわ！」

「もう撃たれているだろう！いいから上昇するんだミライ！」

「わ、わかったわ！」

ドドッ

音を上げ、敵の戦車の上部が”分離”し、”飛行しながら”続けて攻撃を放ってきた

「ああっ！」

セイラが悲鳴を上げる

「クッ……第一種戦闘配備だ、総員第一種戦闘配備につけ！モビルスーツ隊！発進準備急げ！リュウ！」

後ろを振り向き、リュウに声をかける。が、いない。たしか、フラウ・ボウとかいう少女が代わりに座っていた。

『もうMSデッキにいる！ハヤト、急げ！何をやっている！』

敵を確認した時点でMSデッキに向かったようだ、さすがに正規軍人だ、頼りになる。

『こちらレア、準備完了！アムロのガンダムはついさっきまで整備

でバラしてたんだ。急がしちゃあいるが素人も混じってる、少し遅れるぜ！」

『カイだ！こっちももう出られるぜ！』

「よし、カイは前方に射出、前方からの増援を見張りつつ対処！プラナ！貴様はカタパルトからではなく直下に降りろ！既に左手の崖の方からこちらに敵が向かっている！」

『あいよ！』『まかされて！』

（プラナの件、あの”癖”。疑惑は残るが四の五の言う暇はなし、か……）

カイのガンキャノンが射出、着地に失敗……何をやっているんだ……プラナのガンキャノンは無事に着地、やはり……いや。

『よおし！ブライト！こちらでも発進準備完了だ！』

「リュウ、お前もプラナと直下に降りて迎撃だ！敵の分離戦闘機の対処を頼む！」

『了解！リュウ・ホセイ、ガンタンク出るぞ！』

（頼んだぞ……！）

- - -

「これが、戦場か……」

無事にホワイトベースの直下に着地、戦場を見回す。

左前方、1km弱。敵の戦車……たしか、マゼラ・アタックだったかな？いや、上が無いからマゼラ……えーと、なんだっけ。まあいい。とにかく、敵だ。

ホワイトベースからの砲撃により、メインモニタで見ていたその敵そして、周囲にいた随伴歩兵が共に吹き飛んだ。

たしかに、MSに乗ってみたいという夢もなかった。WBに乗り、原作キャラにも会えた。

だが、それが何だ？やってることは人殺しじゃないか。

たしかに、彼らはアニメの中のキャラクターだった。じゃあ、今吹き飛んだ敵は？二次元の存在か？

俺が今いるここは、何なんだ？

今吹き飛んだ戦車に乗っていた人は死んだだろう。戦争だ、仕方ない。本当に？

俺はなんでMSに乗った？人殺しをしたかったからか？俺は今、何故戦場にいるんだ？

何故？何故？何故？

『……ア……レア！』

レアは今、戦場という圧倒的な現実打ちのめされていた。

MSに乗って降りたつ直前、もつと言えは先程の戦車の爆発。それを見るまで、彼はどこか”ゲーム”のような感覚でMSに乗っていた。遊びでしかなかったのだ。

そして、今やっと、彼がいる場所を正しく認識したのだった。

そう、”機動戦士ガンダム”などというアニメの中のフィクションの世界ではなく、一発の弾で歩んできた数十年が一瞬で消え去る戦場。

平和ボケした日本人でしかなかったレアには、その事実は重かった。

『レア！聞こえているの！？』

ドウッ　ドウッ

「うわああッ！」

衝撃！ハツとなり恐慌状態から抜け出す。

ステータスを確認、コンディショングリーン、シールドイエロー。

直撃弾はシールドに当たってくれたようだ。

危なかった。

「ハアッ、ハアッ」

こんなところで何故棒立ちしていた！戦場にいるんだぞ！戦場！？
どうして戦場にいる！お前がそう望んだからだ、そうだろレア・プ
ラナ！！

「……ああああああア！！！」

後方に現れたザクに向けて、訓練の時のようにビームライフルの照
準を合わせ、発砲！

ドウッ

直撃！一瞬遅れて、爆炎！ビーム兵器に驚愕した横のザクが硬直、
マーカーをあわせ、発砲！

ドウッ

外れた！続けて！

ドウッ　ドウッ

胸部に直撃、今度は誘爆しなかったようだ。ゆっくりと前に崩れ落
ちる。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ」

『レア、大丈夫？』

セイラさんが俺を呼びかける声が聞こえる、少し、少しだけ、待ってくれ。

「ハアツ……ハアツ……」

『おい、レア！大丈夫か！』

「……ああ、大丈夫だよ、リユウさん」

『……本当か？』

「ああ、マジだよ。上に飛んでる奴、頼むわ……」

『………了解だ。無茶、するなよ』

ハッ、バレてるな。ありや。

「セイラさん、敵は？」

『え、ええ、先程のザクの爆発に巻き込まれなかった戦車が残っているわ。それを』

「おうよ、殲滅してくる」

手が震える、殺した。俺が殺した。形がザクだろうと知ったことか。俺が殺した。

やらなきゃ殺されてた、仕方ない。なんて言わない。

「ミサイルランチャー発射！」

両肩部のスプレーミサイル・ポットから小型のロケットが多数発射される。

帯のように広がる爆炎、生き残った戦車や多数の随伴歩兵も炭になっただろう。

敵は死に、俺は生き残った。

そう、俺はここに生きているんだ。だったら謝らない。ハッ、人殺しと言われようが、知ったことか。
殺した奴の分まで、俺はこの世界で生きて、生きて、生き抜いてやる……！

- - - - -

『うわあああ！』

悲痛な叫び声が聞こえる、ガンキャノンの反応は生きている。

『ハアッ、ハアッ』

「レア！大丈夫なの！？レア！」

着地してすぐ、彼の顔は真っ青になった。あれは、怯えた眼だ。

そして今、直撃を受けた（通信画像が一瞬乱れた、そういう事だろう）彼は叫び声を上げ、直後に眼を瞑った。

アレが、連邦軍の最重要機密であるV作戦へのスパイなのだろうか？疑問がセイラの頭を駆け巡っていた。

演技にしてはやりすぎだし、そもそも、アレが演技だとしたら、ハリウッド賞も総ナメだろう。

あれではスパイなどではなく、戦場に狩り出され怯える唯の青年ではないか。

突如、声上がる

『……………ああああああアア！！』

慟哭！何かを打ち払う、そんな強い意志を籠めた叫びだ。

そうして次の瞬間には、あっという間にザクを二機仕留めてしまった。

「す、凄い……！」

フラウが感嘆の声を出す、たしかに凄い。が、彼を見る私には違うように見える。

怯えた目、精一杯の虚勢。やはり彼はスパイなどではない。今でこそ虚勢を張った獵犬だ、しかし、本質は戦火に怯える子犬に過ぎない。

何故か分からないが、直感のような物が頭の中を駆け巡った。彼も必死なのだ、生き残るために。

- - - - -

『前方にムサイの反応！ミサイルアラート！』
ハアアア！？

おいおいおいおい、ココは地上だぞ！？

ドッグウオオン！

爆発音！クソツタレ、ホワイトベースに当たったな！？

続けてザクが発進する姿が見えた。っていつか、マジでムサイじゃねえか！シユールすぎだろ！

つて、ヤバい！

「ホワイトベース！上がれ！ザクだ！」

『大丈夫よ、アムロが出たわ！』

「よっしゃア！いけるぞ！」

やっちゃってくださいアムロさん！

近づいてきた二機のザクが、アムロのビームサーベルの突きと袈裟切りで一蹴される。

『あざやかア!』『やるな!』

『レアさん!カイさん!お待たせしました、援護します!』

更に一機、ザクがムサイから出撃した。ん、赤い!

「シャアだ!アムロ、手伝え!」

『了解!』

前方にばら撒くようにランチャーをばら撒く、大きくブーストを吹かし左へ回避される。

瞬間、上へ。次の瞬間には回転しながら右前方。クソッ、早すぎる!どこだ!?

ガキッ

アムロのガンダムに組み付くシャア、いつの間に!?

「アムロッ!」

サーベルを振るうも回避、後退しマシンガンをばら撒く。離れたッ!

「墜ちろオ!」

ドゥッ ドゥッ ドゥッ

側転するように回避、なんて奴だ!

『やったぜ、コイツで最後だ!』

ン？ハヤトの声。分離したマゼラトップを全て撃破したようだ。これでホワイトベースは安泰だな。
いや、マズい！

『うあつ、赤い彗星がこっちに来るぞ！』
ドドドッ

両肩部220mキャノン砲をばら撒く、が、当たらない！

ガッ

ガンタンクの背中に取り付いた赤いザク、化け物め！

『あれじゃあ攻撃できないぜ！』

「クソッ！カイ、大きく右から回り込め！」

『フフフフ……』

混線だ、シャアの声だろう。一体何がおかしい！？

シャアのザクがおもむろに、ガンタンクを持ち上げ、ガンダムに投げる！

(……ええ……？)

つて、マズい、あれじゃあ！

ザクが背中部のウェポンラックからバズーカを持ち、手に取る。

ガンダムは押しつぶされて、動けない！間に合ええええ！

ドウッ ドウッ

シャアのザクがバズーカを撃ちこむその瞬間、間にレアのガンキャノンが飛び込んだ。

ドンッ！ ドゴンッ！
直撃！

モニタが割れ、破片が飛び散る。グッ！鋭い痛みが左目に奔る。またかよ！

心の中で悪態、大きく振動

（ああ、俺、死んだな、クソッタレ……）
考えたのはそこまでだった。

ブラックアウト。

オリ主小活躍の巻（後書き）

テンプレ転生者って、すぐに殺人とか手をだしますけど、ああいうの、普通は戸惑うと思うんですよ。

でも、レア君は激動の一年戦争、その中心のWBクルーに自ら望んでなりました。

それはつまり、人殺しへの道ってことで。

普通の人だと、もっと葛藤とか、戸惑いとかあると思うんですが、あつさりなのは作者の力量不足です。

本当に申し訳ない。もっと上手く表現できたはず。

冒険王という原作の関係上、戦闘の連続なんでサクッと乗り越えなければ逆に困るんですけどね。うーん、難しい。

ムサイはマジです。凄いぞ冒険王ジオン、ミノフスキードライブの実用化に60年くらい先駆けてるぞ！

まーた搭乗機体壊したレア君。彼はこれからも、乗り換えという目的のために、作者によって搭乗機体をどんどん破壊されることですよ…

11/04/05 04:03 砲撃の擬音がダウン！で村上SGみたいになってたのを修正

11/04/05 10:37 起動戦士 機動戦士に修正、ご指摘ありがとうございました

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありました

らご指摘頂けるとありがたいです。

マサキズ・リポートの巻（前書き）

幕間3

マサキズ・リポートの巻

あれから4日経った、レアさんは僕とリュウ、ハヤトを庇い重症、一昨日には意識を取り戻したみたいで、看護兵の女の人がせわしく走り回っていた。

ガンキャノンは大破、整備班の人が言うには、上手いことシールドで軽減できてたつてのと、コアファイターが脱出ポットを兼ねていたお陰で生き残った。らしい。

シャアはレアさんを倒した後に撤退、とどめを刺さなかったのは疑問だが、混線していた通信を聞くに、”楽しみはとっておく”らしい。いやらしい奴だ。

撤退していくムサイに追撃をかける暇も無く、ブライトさんの命令でレアさんの乗る壊れたガンキャノンを回収
ホワイトベースに帰還した僕達は沈痛な面持ちでコアファイターの緊急排除レバーを引いた。

血だらけのレアさんの顔色は悪く、そのまま救護室へ直行。その後は最初に言った通りだ。

ガンキャノンという重要な命綱である火力が減ったホワイトベースは、今、隠れるようにニューヨーク、現在はニューヤークだったっけ？にある、廃墟になったドームの中に身を隠していた。

レアさんの身を挺した援護防御が無ければ、ガンダムはともかくガ

ンタンクと、それに乗る二人の命は今頃は荒野に朽ちていただろう。
リュウさんとハヤトは毎日訓練の後見舞いに行っていたし、僕も何
度が行った。

レアさん特有の軽口が聞けないのはなんというか、少し寂しかった
し、元気になってくれて本当によかった。

ベッドの中でダラダラとそんな事を考えながら過ごす、実際、今は
敵から逃げることしか出来ないのだ。中途半端な早朝だが、今から
でも一眠りしておくか？

と、フラウ・ボウが部屋の中に入ってきた。

「アムロ！」

「なんだよ、フラウ・ボウ……」

「敵の偵察機に見つかったらしいのよ、ガンダムの出動準備をしな
いと……」

敵、敵、敵。また敵だ。嫌になってくる……

ハア、と一つため息を吐き、ベッドから起きて制服を羽織る。

ついこの間まで民間人だったのに、軍服を着るのも慣れたもんだな
と、ふと思った。

「……満足に眠らせてもくれねえのかよ」

「アムロ……」

彼女に言っても仕方ないのに、愚痴をこぼしてしまう。

「重いんだよな……ガンダムに乗っていると、責任感つてのが……」

「アムロ……」

近寄ってきて肩を一つポン、と叩きながら言う

「男でしょ！」

フツ……参ったな、そうわれちや頑張るしかないな。

「……まあな」

（ヨオシ！いっちょジオンをぶちのめしてやるか！）

この場にいない転生者だが、彼がいたらこう言っていただろう。

『お前アムロじゃねえだろ！』

- - - - -

「シャア、作戦は分かっているな？」

ご自慢の髪を指先でくるくると回しながら、俺に声をかけてくる

「うむ、俺が敵のMSを木馬から遠ざける！そのスキを突いてガルマ、君のガウで木馬を攻める！」

ニヤリと笑って

「ああ、これで姉上も私の事を認めてくれるだろう！」
ガルマが言う。

「ああ！」

フン、所詮ガルマなど司令官の器ではない、ザビ家の四男というだけの男だ。俺の出世のため、利用できるだけ利用してやる……！

「シャア少佐、ザクの用意が出来ました」

ガルマお付きの近衛兵が声をかけてくる、さて、俺も一仕事するか。

「よしっ！」

「シャア、頼んだぞ！」

「任せておけ、ガルマ。君の方こそ頼んだぞ！」

- - - - -

「はあやれやれ、それにしても、また救護室とはね」

「あら、”生きてただけでめっけもん”じゃなかったのかしら？」
ふふ、と、笑って言う。

「三食オートミールじゃなかったら、マサキとイチヤイチヤするのも楽しかったとは思いますがねえ！」

「こらレア君！マサキ”さん”でしょう？」

「あー、マサキ、さん」

「よろしい！それじゃ、安静にしててくださいね。おやすみなさい」

意識を取り戻して、ほぼ１日経った。

最初はてんやわんやしていたマサキ他看護兵達だったが、俺が左目以外はいたって健康な状態だと検査の結果分かると、今はもう蜘蛛の子を散らすようにいなくなってしまった。

やることもないのでマサキとダラダラと話をしていたところ、様々なことが分かった。

シャアの事、機体の事、今の場所、マサキのこと。

シャアだが、何故か俺を撃った後とどめを刺さずに撤退したらしい。そのお陰で生きてる俺が言うのもナンだが、不可解だ。

しかしまあ、シャアに聴ける筈も無いので助かったことをラッキーと思うことにする。

機体については見舞いに来たリュウから聞いた。どうやら、直撃したのは二発目のみだったようで、一発目はシールドに当たっていたらしい。

らしいというのは、シールドが半分に折れていたからだ。ちなみに二発目は上半身の胸の部分に直撃、腹部のコアファイターが無かったらそのままボキリ、爆死していただろう。脱出装置サマサマである。

今の場所はニューヨーク、つまり、ガウの特攻ステージだ。たしか、
シヤアが裏切るんだよね？

そして最後にマサキのこと。

年齢は19、年上だ。いや、転生前も合わせるとダブルスコアだが、
今の俺は17歳、犯罪の臭いはしない。セーフだ。

その後、俺の年齢を話すと態度が変わった、名前に”さん”付けを
強要するのだ。

どうやら、弟を見るように見られている気がビンビンするのだが、
割とかわい目な女の子と仲良くなったことはあまり無いのでありが
たくご好意に甘えることにする。

他にも、実家は地球のジャパンとか、ペットは白色の猫と黒色の
猫を飼っているとか、様々なことを話した。

こちらも、家庭環境を話したのだが、幼少期は天才児扱いというの
は冗談だと思われたようだし、10歳で親が蒸発した話をした時は
空気が完全に凍ってしまっていた。

まあ、MW適正試験でB-だったという事は凄く凄いと褒められて
嬉しかったし、親父がMWの脚部ダンパー部品に関わっていたとい
う事を話した時は、かなり驚かれた。どうやら、割と有名な軍需企
業連だったらしい。しかも、ジオン系の。

まあ、過去に蒸発してしまった両親の事などもはや興味は無いのだ
が。

ふああ、それにしても暇だ。

- - - - -

レア君が寝たのを確認して、ブリーフィングルームに移動、私が最後だったようだ。

これで、ブリーフィング・ルームに4人が揃った。

「遅れました、マサキ・アンドー軍曹、入ります」

「いや、いい。さて、レア・プラナの件だ。各員の結論を聞こう」
ブライト艦長が口火を切って促す

「まずは俺からだ、レアは身を挺して俺とハヤト、そしてアムロを守った。意識不明になるような怪我を負ってな」

他の三人も頷く、実際、彼の主な負傷は左目の切り傷と出血による意識低下、他は着弾時に受けたであろう衝撃による軽いうち身や打撲だったので、どちらかと言うとショック症状のようなものだったのだろう。

「スパイなら、あの時点で逃げればよかったハズだ。右腕にはビームライフルという新兵器を持っていたし、ガンキャノンの腹部にはコアファイターという最高重要機密が存在していた。成果としては十二分だ」

なるほど、ビーム兵器はジオンには存在しない。喉から手が出るほど欲しいだろう。

私は戦闘班ではないのでコアファイターの重要性はわからないが、これも同じ。

「そもそもだ、俺は身を挺して味方を守るような人間をスパイとは思いたくない……」

項垂れているリュウ・ホセイ少尉を見る、彼は、レア君に命を救われたようなものだ。

「次は私ね、私も彼はスパイではないと思うわ」
セイラ・マス軍曹が口を開く、次は私かな。

「その根拠は？」

ブライト艦長が質問する

「理由は、そうね、リュウの言っているように、身を挺して守るような人間をスパイとは思えないし、そもそも彼、震えていたのよ？ 戦場で。そんな人間、スパイにするかしら？」

「……そうか、他には？」

「そうね、あとは……女の、勘、かしら」

「女の……勘？」

ブライト艦長が驚いた顔をしている、私もビックリだ、彼女、そんな事言うキャラだったかしら？

……とと、次は私ね。

「私も同じく、スパイとは思えません、しかし、看護に当たる際、彼に話を色々聞いた結果、様々な事が分かりました」

ブライト艦長が頷く、早く言え、という事だろう。

「ええと、まず、彼の出生ですが、地球のホンコン地区です、加えて、ジオン系列の軍需企業、その下請け会社の上層部の一人息子だったようです」

「「ジオン系列の軍需産業!？」」

ブライト艦長とホセイ少尉が驚く、セイラ軍曹は腕を組んで壁に背を預けているが、こちらの話に注視しているようだ。

「7年ほど前に、一般には倒産、という風に発表していますがジオニック系列に再編入されてます。整備班長に聞きましたんで、間違っではないかと」

「ならば、ますますスパイなのではないか？」

ブライト艦長が声をあげる

「私も最初はそう思いましたが、どうやら違うようです。彼が10歳の時に両親が蒸発しています、おそらく技術畑の人間だったでしょう。」

その後、連邦系の孤児院に入院、戦時疎開でサイド7に移っています。

これも、以前MPO団体に所属していた看護兵の同僚に聞いたところ、実在する孤児院だそうです」

全員が目を見開く、普段がアレなので意外と言っては失礼だが、へビイな人生を歩んでいるのだった。

「おそらく、ジオンのザクの件は昔父親に聞いたのではないかと。ジオン系列企業の技術畑、それも前触れもなく連れ去られるような有能な人物です」

「ふうむ……たしかに、プラナはスパイではない、という意見が正しく思えるな。しかし、君はプラナとずいぶん仲が良いようじゃないか？ カイが怪我にかこつけてイチャついている、とぼやいていたぞ」

「な、せ、セクハラですよ！ それ！」

たしかにレア君とは仲が良いが、彼は弟のようなモノだ。かわいいと言われた経験は初めてだったので照れてしまったが、それだけだ。うん。

マサキ軍曹、意外に背も高くアジア系の顔立ちなので、様々な人種の入り乱れる宇宙世紀では、彼女はかわいい系ではなくキレ目のカツコイイ系の女の子に分類される。

日本人の感性のレアには、普通にかわいい高校生か大学生にしか見えなかったが。

「せ、セクハラ！？」

「ワッハッハ！ お前の負けだ、ブライト！」

「ふふふ、そうね。社会的に怖いらしいわよ、セクハラ裁判って！」

「う、うむ。すまない、マサキ軍曹、訂正する！」

「は、はあ……」

妙な空気になってしまった、おかしいな、これってスパイ査問会になるかどうかの重い話じゃなかったかしら？

「と、とにかく！ レア・プラナはスパイではない、という結論にす

る。これにより、臨時査問会、およびレア・プラナの独房入りは無
しとする。各員、解散！」

マサキズ・リポートの巻（後書き）

ちよつと時系列で混乱するかもしれませんが、次はガルマ戦、と覚えておいて頂ければOKです。

色々書き方を変えて練習中、おかしくなかったらいいな！

レア君への勘違いは一旦収まります、が、展開によっては再燃するかも。

戦闘一回も無い珍しい回、まあガンダムって意外と多いよね戦闘無いシーン。

筆がノツたのでポンポン書きました。といっても短いですし、幕間ですけど。

11/04/05 09:30 階級を修正

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

嘘の無い世界の巻（前書き）

ガルマ散るまで

嘘の無い世界の巻

アラート音が鳴り響く、こんな大音量を流しては敵に見つけてくれと言ってる様なモノだが、敵のルッゲン偵察機に見つかってしまった今、そんな事はもはや関係が無かった。

「ザク三機接近！うち、一機は通常の三倍程度のスピード！」
メガネの少年が声をあげる

「先頭は赤い彗星よ、ブライト！」
セイラが報告をあげる、三倍のスピードのザク、シャアしかないだろう。

地上でどうやって通常の三倍のスピードを出しているのか不明だが。

「もう少しで連邦軍の制空権だ、無駄な戦闘は避けたかったが……
アムロ、出来るだけ奴らをホワイトベースから遠ざけてくれ！」
ブライトが指示を出す

『分かりました！』

- - - - -

看護室を抜け出し、MSデッキに辿り着いた。今回、おそらく俺の出番は無い。何故なら、シャアはガルマのガウを誘い出し、ホワイトベースが逃げる手伝いを結果的にしてくれる。

ならば、そのまま、過ごせばいい。なるほど安全だ。

「さて、どうするかな。こりゃ」

誰もいなくなったMSデッキで一人ごちる、俺が乗っていたガンキヤノンは再起不能だが、幸い腹部にあたるコアファイターは無事だった。つまり、二機のコアファイターがこのデッキには存在する。

「なににせよ、乗るか」

安全？クソ喰らえだ。

仲間が必死に戦っているのに、自分が未来を知っているからこのうのと過ごせるほどレアは図太くも無かったし、目の怪我くらいでもう乗りたくない！と言うほど腐ってもいなかった。

待機所に行き、ノーマルスーツに着替える。所々からだが突っ張るが、どうせ打ち身程度だ、左目もガーゼの眼帯とメディ・ジェルで無事だ。あとは、どうやって発進するかだ。

よし、アレで行くか！

「整備班！緊急発進命令だ！コアファイターで出るぞ！」

「聞いてないぞ！いいのか？」

メガネの整備スーツであるブルーカラーのノーマルスーツが応える

「艦長命令だよ！急いでくれ！」

素人が混ざっているとは思えない迅速な作業でコアファイターがカタパルトにセットされる。

「レア君！」

おおっと、抜け出した事がバレたみたいだ。マサキがこっちに走っ

てきた。さつさと戦場に出るか。

「あばよ、とつつぁ〜ん！」

お決まりの台詞を口に出し、コクピットに乗り込む。

瞬間、世界が赤一色に染まった

怖い、怖い！怖い！怖い！！

怖くてたまらない、唇が震え、手が震え、続いて体もガタガタと震えだす。

怖い！乗りたくない！死にたくない！嫌だ！嫌だ！！嫌だ！！！！

涙が止まらなくなり、鼻水も垂れ流す。それでも恐怖は収まらない。壊れてしまうのではないかと言うほど震える体を、同じく震える腕で抱きしめる。

頭では今すぐ戦場に駆け出したいと思っている、仲間の手伝いをしなくては。

少しでも生き残る確率を増やす為に。少しでも被害を減らすために。

……少しでも、人殺しの汚名を英雄にするために。

いや、そうか、俺は。俺は、ただの人殺しになるのが嫌だったんだ。

だからMSに乗りたがる。だから戦場に出たがる。
たといいいわけだろうが、正当化できる理由が欲しいのだ。

『お前は人を殺してでも存在している価値がある』そう言って欲しいのだ。

そのくせ、自分が一度死の危機に陥ればこのザマか、エゴの塊だな。
俺は。

「……ア君！……レア君！」

「……ああ……？」

「レア君！落ち着いて！大丈夫！？私よ、マサキ・アンドー！分かる！？」

「ハ……ハ、ハハ。マサキか。……ハハハハ。……震えが止まらないんだ、ダセエだろ？」

涙も出てくる。鼻水もとまらねえ。花粉症なんざ何十年前に絶滅したハズなんだがなあ！ああ、おかしい……」

不意に、何かが覆いかぶさってきた。

「大丈夫！大丈夫よ。あなたは今、無理して戦わなくてもいいの」
耳元にやさしい声が聞こえる、あたたかい気持ちになる。

「駄目だ、駄目なんだ。みんなも戦っている、俺だけがのうのうと過ごしちゃいけない！」

「大丈夫、大丈夫。ね？」

ぎゅっと、暖かいなにかが強く俺を抱きしめる。少しだけ楽になる。

「怖いんだよ！バズーカの弾が俺に当たる、あの瞬間がフラッシュバックするんだ……」

「大丈夫よ、あなたは今、安全よ。私が守っているんですもの。ね？」

震えが収まってくる、涙も緩まってきた。

「あのままじゃあ俺はただの人殺しなんだ！……もつとやれば英雄になる。誰も俺を責めることはできない」

パシン！頬に鋭い痛みが奔る

「レア君、あなたは英雄になりたくてMSに乗っているの？」

「ああ」

違う！

「本当に？」

「……ああ！」

違う！

「じゃあ、あなたは何故、今、そんなに悲しい顔をしているの？」

顔を上げる。マサキが俺を抱きかかえていた。すぐ近くに顔だ
「悲しい顔？」

「さっきは恐怖に引きつった泣き顔だった、でも、今のあなたは悲しくて泣いているように見えるわ」

「……俺は……俺は！」

そう、俺は。

「俺は、理由もなく人殺しになんかいたくないんだ！」

「戦争よ」

「戦争なら、何やったって許されるって言うのか！？俺が撃ったザクのパイロットにも、家に帰れば家族はいただろう。俺が撃ったロケットで燃えた歩兵にも、家に帰れば恋人が待っていただろう。俺は、俺はただの人殺しだ！」

「理由が必要なのね？」

「ああそうさ！俺はマシンなんかじゃない、人間だ！たとえ戦争だろうが、英雄だろうが、理由もなく人殺しが出来るほど俺は腐った人間じゃない！！
すぐれる理由がなければ、今みたいに震えて何も出来なくなる犬畜生以下のクズだ！」

「なら、私を守りなさい！」

「……ああ？」

「私を守って。ホワイトベースにいる私を守る番犬になりなさい！」

赤の世界が終わりを告げた。

「……ま、マサキ……」

「……マサキ、さん。でしょう？」

「ああ、マサキさん。……その」

「なに？」

「言つてで、かなり恥ずかしくない？その台詞」

「ええ、かなり」

プツ

二人して、笑みがこぼれる。俺は顔はグシャグシャ、鼻水ダラダラ。マサキも眼が赤い。格好がつかない二人だ。

「「あははははははは！」「」

「ハア、あーおかしい。ありがとよマサキ、さん。楽になった。今俺がノーマルスーツでヘルメットじゃなきゃ、外してキスするところだ！」

「あら、なんなら今からでもする？」

「「あっははははははは！」「」

本当に、楽になった。

『さて、お二人さんよ！イチャついてるところ悪いんだが、そろそろ通信機つてくれませんか？戦い辛いつたら無いんですがねえ！』
「か、カイ！？」

ま、まさか！！

マサキが乗り込んできたときにスイッチが入ったのだろう、味方全周波に向けて、通信がオンになっていた。

「あー、ええと、アレだ、通信機のテストは良好！以上終わり！」
非常に苦しい、苦しいが言わずにはいられなかった。俺もマサキも顔が真っ赤だ！
言われてみれば、周囲の整備兵の視線も生ぬるい。

「さて、マサキ。降りてくれ」

「駄目よ、レア君。あなた、私が降りたらすぐに出勤する気でしよう？」

バレバレか

「わかったわかった、起動キーを外す。マサキが持つて降りてくれ」

「ずいぶんあっさり退くわね？あと、マサキさん、ね」

「ハイハイマサキさん、降りていただけませんか。それとも、私めがお姫様抱っこで抱えながら降りましょうか？」

「バカ！」

二人とも、満面の笑顔だ。完全にラブコメになっている。周囲の視

線が更に温くなる。

マサキが降りる、甘いなあ、サブ・キーってのがあるんですねえ。緊急用の。

イグニッションをかけようとして、手が止まる。いや、震えだす。

操縦桿に触れる、ダメだ、さっきみたいな恐怖感はないが、体が強張って動かない。

呆然とした顔をする俺に、マサキが声をかける

「どうしたの？まだ、辛い？」

「ハ、ハハ、俺、一人じゃ乗れなくなっただけだ。ハハハハハ……」

乾いた笑いがMSデッキに響いた。

レアのラブコメ（中継）が終わった頃、戦闘も佳境に向かっていた。

「何だったんだ、あの通信は……誰がハイスクールの弁舌大会を全周域軍事回線でしと言った。まったく……」

「うふふふ、あら、いいじゃない。ブライト、貴方だってまだ19でしょう？」

「しかしな、ミライ……」

「ええ、悩み、恋愛。若いんだし、いいんじゃない？それに、聞いている分には面白いわ、あの”テスト放送”、ふふ」

「セイラさんまで……」

「空母が接近してきます！」

若干ピンクだった色が切り替わる

「おかしい、何故主砲の目の前に出る？これじゃあ、まるで的に来るようだ」

「ええ……でも、今撃つべきよ、ブライト」

「ああ、そうだな……主砲、てえーッ！」

ドドドッ

グワアアア

ガウが火達磨になり、眼下の廃墟に墜落していく

「やったぞ！」「すげえ！大型空母が吹っ飛んだ！」

口々にリーダー席に座る少年達が叫ぶ

「アムロを呼び戻せ！」

「了解、アムロ、ホワイトベースに戻って！」

『えっ？でも……』

「ジオンの空母を撃破したんだ、奴らの報復が始まる前にここを離れたい！」

『わかりました！』

「各員にも退却を命じろ、今のうちにここを離れるぞ！」

- - - - -

「ふっふっふ、ガルマ、ザビ公王には立派な最後だったと報告しておくぞ」

不気味に笑いながら、ムサイで戦線を離脱し始めたシャアの部隊である

「そして、君の最後の戦闘を手助けた俺は英雄だ！」

わはははは！あーっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ

笑いながら去るシャアのムサイ。という非常にシニールな光景の中、ホワイトベースのニューヤーク戦は終わりを告げた。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

地球から一番遠いコロニー、サイド3、ズム・シティ後宮。そこにジオンの中枢を担う人物達が終結していた。

「ガルマが戦死しただと……!?」

杖を落とし、狼狽する人物。ジオン公国公王、デギン・ゾト・ザビである。

「父上！」

「お、おお……ドズル、シャア少佐はどうしたんだ？」

「は、シャア少佐はすぐ近くで敵が開発したMSと戦闘中だったのかで……」

「シャア少佐にはガルマの知らせを聞いてすぐに左遷の処分を与えましたわ……まだ信じられませんか、あの子が死んだなどと……」

「おお、キシリア……来てくれたのか……」

「父上、こうして一族が揃ったのです。いかがです、ガルマの死は悲しいことですが、これをジオン公国の士気を高めるために利用しては……?」

「どういうことだ、ギレン?」

- - - - -

「艦長、連邦軍の通信が!」

セイラが珍しく大声をあげる。ついに来たか!

「まわせ!」

ザザッ ザッ

『……避難民の保護は承諾、そちらに護送機と補給をまわす。ただし、ホワイトベースの安全は保障できない! 詳細は追って連絡する!』

「なんだって!?」

「もしかしてだけど、連邦軍、私達を囷にするつもりなんじゃ……?」

「やめてくれよ、ボウ伍長……仮定としても最悪の話だし、さっきの連絡を聞いた限りじゃあながち間違ってもいなさそうなのもつと最悪だ……」

「あ、ごめんなさい、プラナさん……」

戦闘が終わり、メイン・ブリッジに全員が集合している。

一緒に入ったレアとマサキは周囲からヒューヒューと囁し立てられ、もうゲッソリ、という感じであった。

「コアファイターでヤルたあ凄いプレイだなレア！」と一番最低な煽りをしてきたカイは、オートミールの刑が確定していた。

「えっ、ちよつと待って、ブライト!!」

「どうした!？」

「TV・スクリーンにジオンの電波が!!映像、まわします!」

全員の眼が中央のTV・モニターに移る

うん?ああ、これはアレだ、ギレンの演説だ。何回も聴いたぞ俺。

『われわれは、一人の英雄を失った……しかしこれは終わりではない、始まりなのだ!』

眉毛なしの神経質そうな男が声を上げ、演説を始める。

「敵司令官、おそらくはガルマ・ザビ。その、国葬だ。奴らめ、家族の死ですらショーにするのか!」

ブライトが怒声を上げる

「消しましょうか？」

セイラが応える

「いや、我々の敵がどんなものか、各員よく胸に叩き込んでおくんだ！」

『この悲しみを、怒りを、忘れてはならない。全てを結集して連邦軍に叩きつけるのだ……！』

『そして、この戦いを我々の勝利で終わらせることが、戦死者への最大の慰めとなる。勝利をこの手に……！』

あれ？こんな感じだったっけ？

『もうひとつ、諸君はこの戦いが聖戦であることを忘れてはならない！』

『連邦軍の人道主義の美名にかくれたあまい妥協政策は劣悪なものの増長を許し、人類を衰退させる危険性をはらんでいる……！』

『それを未然に防ぐためには優越人類が管理せねばならない！それができるものこそ我らジオン公国であり、ジオン軍の使命なのだ！』

最後に、ザビ家の面々に映像が映る。大きな歓声に手を振って応えているようだ。

「……こいつらが向かってくるのか……」
リュウが呟くように言う、そう、これが、……敵。

アムロが一步前に踏み出し、右腕を振りかぶる。

「うおーーーーっ！」

ガチャッ！

TV・スクリーンを叩き割った

(……ええ……？)

「負けんぞ……！絶対にキサマらなどに負けるものか……！！」
血に染まった右腕を握り締め、強い意志をこめて言う。

うん、お前絶対アムロじゃねえわ。

嘘の無い世界の巻（後書き）

レアとマサキは当人同士は中のいい友達　少し気になる異性、程度
の関係です（えー）。

が、まあ、全周域Ⅱホワイトベースクルー全員からは、あんなこと
やらかしたらラブラブバカップルに見えますわな。というお話。

レア君ですが、MSに一人で乗れなくなっていました。スーパ
ーガンタンクタイム！まあ、未定ですが。

一応、IGL00のあの人が丁度良いタイミングで出てくるので、
WB入り、という感じで。追加戦力になります。

原作改変………なんでしょうが、冒険王世界にむりくり他のシリーズ
突っ込んだらこうなったってだけのお話になる………予定。魔法の言
葉『予定は未定』。

誰なのか？は、まあバレバレだと思うんで言いません。

一応目的があつて二人乗りになるように仕向けました、生きてくる
のは当分先なんで、覚えとかなくていいです。

- 以下追記　割と重要 -

ニューヨークからのルートはTV版では大西洋横断　ベルファスト
となるのですが、冒険王版の展開を正史ルートに合わせた場合、

北米ニューヨーク　アジアゴビ砂漠　欧州ベルファスト

と、無茶苦茶なルートになってしまいます。

ここまで書いてから気付いてしまったのですが、訂正は整合性を考えた場合おそらく大気圏突入から書き直しになってしまいますし、それでも違和感は拭えない展開になってしまいます。

そこで、申し訳ありませんが、ここからの展開が超展開になってしまっても読者の皆様には『冒険王だから仕方ないな』という寛大な心で見守っていただければ、と、思います。

- - - - -

1 1 / 0 4 / 0 5 1 6 : 5 2 誤字修正

1 1 / 0 4 / 0 5 2 3 : 4 3 追記追加、資料として作ったタイムラインの管理が甘かったです。申し訳ありませんでした。

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

あのリア充を撃て！の巻（前書き）

翔べ！ ガンダムまで（巻き戻るのは冒険王版の仕様です）

あのリア充を撃て！の巻

UC0079/10/04

カナダ、サスカチワン山岳森林地帯

ジャブローからの補給物資を受け取ったホワイトベース、そこで新たな指令がブライトに対して下された

『オクル、ヒトマルマルイチ、ジャブロー。』

貴艦は避難民をミディア輸送機編隊に移した後、補給と支援物資を受け取り、海岸線沿いにジャパン、アジアを経由しベルファストに出頭せよ。

また、随時補給部隊としてミディアが送られる。

現在連邦軍は大規模反抗作戦を計画中であり、再編作業が済むまでジャブローへの帰還は許可できない。人類初のMS対MS戦闘に際し、優秀な結果を残した貴艦の健闘を期待するものである

地球連邦軍

大将 第三艦隊提督 ゴツプ・ウィラー』

「どういうことです！」

ブリッジにブライトの声が響く。疑問を含んではいるが、寧ろ怒りの籠った声であった。

「それだけ、貴方達が期待されているということよ、ブライト・ノア”中尉”」。

実際、ルナツー基地で第一次生産が完了した新型MSであるジム6機、そのうちのデータの取り終わった1機に加え、新兵器も多数配備されるわ」

「ハッ！しかし、私は少尉であります！マチルダ・アジャン中尉！」

「中尉になったのよ。はい、これが任命書。前艦長であつたパオロ中佐がサイド7で亡くなられて艦長になった貴方が、少尉では格好がつかないのよ、穴倉の連中は。ね。」

これはオフレコですが、ジャブローに到着次第大尉に昇格する事も内定しているわ」

「は、ハッ！」

（何が大尉だ！それでは二階級特進しろと言っている様なものではないか！！）

「しかし、要は体の良い囫、それも、実践が出来るという理由での実地試験のような物でしょう！？」

黙って俯いていたセイラが声をあげる、こちらはもはや悲鳴に近い。

それはそうだろう、この任務内容はアジア地区を移動してジオンの囷になれ、と、言っているようなものだ。

正気の人間が考えるような任務ではない。

「よしんだ、セイラ軍曹！」

「ブライト！」

「ええ、そういう意図もあるでしょうね……」
ブリッジにいた全員がマチルダ中尉の方を見る

「……マチルダ中尉！」

「……それだけ連邦軍も疲弊しているということよ……」

- - - - -

あの悪夢から数日たった。

人の噂は75日、と言うが、俺とマサキはアツアツでラブラブでベタベタのバカカップル、という評価に数日で落ち着いてしまったらしい。

俺は割と嬉しいのだが、左目の検査をしている時に、俺とマサキが二人でいる救護室には誰も近寄らなくなった。

後でハヤトをとっ捕まえて聞いたところ、カイがオートミールの刑の仕返しとして”愛の巣だから近寄らないほうが良い”という噂を流したらしい。彼はどこまでオートミールが好きなのだろう？

とにかく、マサキとの関係はそう悪くもないようだ。二人きりになると少し照れるが。

思うに、どうやら俺は彼女が好きになってしまったらしい。もちろん、二次元キャラクターへの倒錯した愛情などではなく、一人間マサキ・アンドーとして、だ。

こんな短期間で人を好きになるとは思わなかったが、ここは戦場だ。吊橋効果というものなのだろう。

まあ、好きと言っても何故か姉弟愛に感じてしまうのは不思議だが。

しかしまあ、いつものあの空気が俺は好きだし、あの空気のお陰で今の俺は立っていられる。

このままの関係でいいだろう。一步踏み出す勇気がないとも言っなまあ、俺がいいって言ってるからいいんだよ。

あの後、詳しい診断をされた結果、俺はPTSDと診断された。

おそらく、前後の精神状況が最低だったこともあり、直撃を受けた際にかかってしまったようだ。

シミュレーターでは訓練できるのだが、MSのコクピットに座ると震えて動けなくなる。

まるで家の中でだけキャンキャンと暴れまわる室内犬のようだな、と一人ごちる。

色々とした結果、ガンタンクの上部コクピットならばなんとかこなせる、という事が判明したのが昨日のこと。まあ、実際の戦闘になつたら分らないが、とにかく乗れる。という事は分かった。

この様子なら、何か大きなショックでも起きない限りだんだんと治るでしょう、という診断結果だったが、今自分達が何処にいるのか分かっていないのだろうか？精神科医という奴は。

戦場でショックな事が起きないわけがないじゃないか……

と、グダグダと考えながら今日もMSデッキに行く。ガンタンクの上部コクピットでのアシストに少しでも慣れる為だ。といっても、ガンタンクにはハヤトとリュウが乗るのだろうか。俺はその予備だ。

- - - - -

MSデッキに入ると見たことのあるMSが鎮座していた。

RG M - 79 量産型ジムだ。

(……ええ？なんでこんな所にジムが……
うん？いや、ちょっと違うか？似た形が腐るほどあるから、強い
のしか覚えてないんだよなあ……)

「おう、おはようレア！来たな！」

「リュウさん！これ、何なんです？」

知っているが、いきなり新型MSの名前を大声で話したらスパイだと疑われるだろう、と、我慢した。

彼は知らないが、既にその疑惑にはかけられ、そして取り消されている。

「おう、その事についてまた話すことがある。パイロット全員に召集をかけたんだ。お前は……その、今、乗れないだろう？で、迷ってたんだが自分で来たんなら仕方ない。こっちに来い！」

「あいあい……」

やはり、MSに乗れないということで仲間らに負担をかけてしまっている。

(早いとこ、何とかしたいなあ……)

近寄ると、見たことのない作業員達がせわしなく動いていた。

「全員揃っているな？さて、これが連邦の新兵器”ジム”、その、初期生産型だ」

リユウが説明を開始した、初期生産型？

「初期生産型？」

ハヤトが疑問を声に出す。そうそう、多いんだよなあジムバリエーション。ザクほど見た目で分かりやすくもないから、対処に困った。

「ああ、コレはルナツー基地で生産された”ジム”、データとしては、V作戦初期のデータが反映されているらしい」

「ってことは、他にもあるのか？」

カイも疑問を出す

「形式番号としてはRGM-79E、アーリー、つまり初期型だな」

「そして、今回ホワイトベースからV作戦のMS運用データを回収してジャブローで作られるのがGundam Mass product、量産型ガンダム、”ジム”よ」

後ろから地球連邦軍仕官服を着た女性が現れ、リユウに続いて説明をする。オレンジがかった赤髪に軍帽が映える、えっらい美人さんだなおい……

「貴方達がMSのパイロット？本当に子供が乗っているのね……失礼、マチルダ・アジャン中尉です」

- - - - -

MSデッキでのジム紹介が終わり、解散が告げられた後、あわただしく動き回るミディア輸送機の搭乗員や、移送される避難民、搬入される燃料や食料、新たな武装等を見回っていた。つまりは暇だった。

どうせ、明日には分かれてアジア方面に移動開始だ。今日くらいダラダラしたっていいじゃないか！

アムロ、ハヤト、カイあたりは完全にマチルダ中尉の美貌というか、漂う大人の女性の余裕に骨抜きにされていたが、リユウは意外にも粛々と会話をしていた。

いや、いつもはもっと手を抜いている、アレはカッコつけたな。

その点俺だが、彼女はたしか、結婚直前とかなんとか言ってたはず。そんな女性に手を出すほどアホじゃない。

ただ、あんな美人と結婚できるって同僚に刺されるんじゃないかな？と、少し余計な心配をしていた。

と、前からカイが歩いてくる。ヘラヘラといつも軽薄そうな笑みに今日はブースト補正がかかっているようだ。

「おう、レアじゃねえか！残念だな、ついさっきそこでマチルダ中尉と写真を撮ったんだが、お前いなかったしな」

ハアッ!?

「呼べよバカ!」

「いやあ、お前にはマサキ軍曹がいるじゃん? いらなかなー? 思ってたさ!」

ニヤニヤと笑いながら肩をポンポン、と叩いてくる。
うぜえ……

「なんなら、お前だけでも撮って集合写真の欠席者みたいに右上に入れといてやるよ」

「なんだよそれ……まあいいや、俺、写真写りいいぞ! ほれ!」

「ゲッ、マジで撮るのかよ?」

フハハハハ、馬鹿めが!

「麗しきマチルダさんの写ったお前のカメラのフィルムデータを俺の美しい顔で埋め尽くしてくれるわ!」

「美しいってツラかよ……」

さて、どうポーズするか……まあ、分かりやすくピース……しようとして、やめた。

戦場でピースサインか、バカらしい。

ということ、どうしよう。

と、近くを歩いていたマサキを発見! ガバッとマサキの肩を抱き寄せる。

「キャツ！？ちよつ！こら、レア君！」

「いいじゃん、折角の写真なんだし。ほれ、早く頼むぜ！」

「ええ？な、何？どついうこと？」

「やれやれ、それじゃ撮るぜ、バカッブルのお二人さんよ！」
パシャ！

シャッターが切られ、すぐに写真が出てくる。

「えつ。ええ？何よ？もう！変な顔で写っちゃったじゃない！」

「あつはははは！マサキの顔はかわいいよ！はははは！」

やっばい、開き直ってイチヤイチヤするのすげー楽しい。まあ、マサキの気持ちは分からないけど、嫌われてはいない、だろう。だといいな。

カメラマンのカイがうんざりした顔で「一生やってるバカッブル共……」と、呪詛を吐いていた。

あのリア充を撃て！の巻（後書き）

何が恐ろしいってマチルダ中尉出ないんですよ、冒険王版。

マチルダ中尉が出ないってことは、つまり……？

はい、恐ろしいですねー

ということで、ここら辺は作者のオリジナルです。

追加MS第一弾はジムEでした。レア君が乗らないので長生きする……と、いいね！

次からやつとストーリーが動きます。

前話の3連続投稿は、3日に分けて投稿すると読んではうがダレるかな？と、思い一気に投稿しましたが、アクセスが倍くらいに増えてビックリ。

決められた時間に投下するより、書きあがると即投下の方がいいのかな？

11/0407 01:09 後書き最後を追加

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

連邦の脅威の巻（前書き）

セイラ出撃まで

連邦の脅威の巻

UC0079/10/06

アラスカ西部ナクネク近郊

カナダでの補給の後、ジオンの目をこちらに向けるように海岸線に沿ってベルファストに太平洋経由で進軍中。

ルートとしてはジャパン経由で中央アジアを突破、そこからベルファストへ。ということらしい。

そのことが知らされた直後はアムロ達も驚き、荒れてはいたのだが、もう起こってしまったことは仕方ない、と、生き残るための準備を開始していた。

その間に判明したことといえば、新規搬入されたあの”ジムE”だが、信じられない事実が判明した。

なんと、ビームサーベルがバックパック部分に存在しないのだ。

追加武装として搬入されたガンダム用のバズーカも、ハードポイントが存在しない為に手持ち意外では装備して出撃できない、ということも判明した。

よって、ジムEの武装はブルパップ・マシンガンと頭部ヘッドバルカン、のみだった。

発覚した当初は『こんな欠陥兵器を押し付けるなんて！』という評価を俺含むMSパイロットから下されたが、そこは現地改修ということ、色々と弄っているらしい。

整備班、頑張ってくれ！

昨日にはシミュレーターではガンダムのハイパーバズーカを装備できるようになっていたジムEだったが、そこで一通りMSパイロットが適性検査をしたところ、人員配置変換がリュウから発表された。

ガンダムはそのままアムロ、まあ、これは当然だ。

ガンキャノン、同じくカイ。

次いでガンタンク、これはなんと俺ことレア・プラナとハヤトが乗ることになった。

そして、残ったジムEにはリュウさんが乗るとのことだ。

これは、ジムEは量産機であるためV作戦で作られたMSと違って脱出機構が存在しない為、最悪の場合に供え正規軍人であるリュウが乗った方が好ましい、ということであった。

実際、ジムEに乗れる人員は俺・ハヤト・リュウさんだけであり、適正検査の結果としては、ハヤト・リュウは近接戦闘のセンスがあまりないらしい。

もちろん今はMSに乗れない俺が乗っても仕方が無い、いうことで少しはマシだったリュウが乗った。という裏事情もあったのだ。

でも、正規軍人が乗った方が好ましい、というのは、どうかと思う。

- - - -

『総員、第二種警戒態勢に以降。パイロットはMSに搭乗して待機せよ!』

フラウ・ボウ……そう言えと言われた。フルネームで呼べとは変な子だな。と思う。の声が緊急警報音と共に響く。

急いでMSデッキに向かい、ガンタンク上部に乗り込もうとしたときにリュウさんから声をかけられた。

「レア!無茶するなよ、今回は後ろの方で援護してくれるだけでいい!」

「リュウさん!分かってますよ、それに、操縦はハヤトだ!ハヤトに言っただけ!」

「ハハハ、それもそうだな!」

笑いあつて乗り込む。なんとなくだが、キャリフォルニアでリュウとハヤトを庇った時の恩で俺のことを気にかけてくれるているんだな。と思う。図体に似合わず存外律儀な男だ。

- - - -

『先程、前方数キロ地点から連邦軍のものとされる救難信号が発見された。お前達は、その信号付近の索敵を行ってもらおう』

「救難信号?ここ、一応だけど連邦の支配地域だろ?なんたってこんな所で?」

『俺達っていう釣り針にアホなジオンが引っかかったってことじゃねえの?』

「カイ、お前なあ……」

『いや、案外間違っていないかもしれんぞ。とにかく、各員はホワイトベースからあまり離れずに索敵を開始せよ!』

たしかに、ホワイトベースという釣り針は大きいだろう。

地球方面軍総司令官のガルマを倒した部隊なのだ、その部隊を倒したとなれば疲弊したジオンの士気は大きく上昇するだろう。が、こつちとしちゃあいい迷惑だわな。

『ガンダム、アムロ行きます!』

『カイ、ガンキャノン出るぜえ!』

『リュウ・ホセイ、ジムで出るぞ!』

今回のジムの装備はブル・パップマシンガンとガンダムと同形のシールドのみだ。

数日で改修できる内容ではなかったか、そりゃそうだな、IFFなんかも変えなきゃならん。

「リュウさん、そんな棺桶で無茶するなよ!ハヤト、行けるな!？」

『ええ、レアさん。ハヤト、ガンタンク出ます!』

カタパルトは使えないガンタンク、ゆっくりと低空飛行するホワイトベースから発進、直下に下りる。

……よし、大丈夫だ。震えて泣き出すようなことは無い。まだ、だけど。

『レア、お前に心配されるとはな。明日は雨でも降るんじゃないか？』

通信機にリュウのニヤリ顔が映る、

「ひでえなりユウさん、俺の乗ってるガンタンクとその棺桶だったらどっちが危ないかなんてホワイトベースに残ったあのガキどもでも分かるぜ？」

カツ・レッツ・キツカの三人は、ミディア輸送機に乗って移送されたサイド7の避難民と一緒に移送されず、格納庫に隠れている所を昨日発見された。

どうやら、アムロが心配だったらしい。子供の行動力って怖いね。

『まだMSに一人で乗れない奴が言っても説得力無いぜ、レア！』
カイも通信機に顔を出す。

『カイさん、その言い方は……』

ハヤトも顔を出す。

なんだかんだ言っているが、俺を心配してくれているのだろう。ありがたいが、くすぐりたい。

『前方に戦闘機らしき残骸発見！周囲に敵反応無し！』
アムロが声をあげる、罨ではなかったようだ。

『よし……総員は生存者の搜索を始めろ！』
ブライトからの命令が下る、が、あの残骸の様子、そして時間は経っている。絶望的だろう。

- - - -

残骸の近くに停泊したホワイトベース、積まれていた宙陸対応エレカを下ろしての生存者の搜索が始まってしばらく経った。

MSパイロットである俺達も搜索に参加している。

しかし、生存は変わらず絶望的だろう。そろそろ移動すべきか、という検討が始められたころ、生存者発見の報告が上がった。

「ハヤト、何処だ!？」

「こっちです、レアさん」

「生存者の様子は?」

「ええ、その、もう無理だろうとのことです……」

「そうか……」

ホワイトベースの救護室に向かった搜索に出ていたMSパイロットの面々に沈黙が降りた。

直接顔を会わした事も無い、知り合いですらない人間だが、特に若い面々が揃っている俺達には仲間が死ぬというのは心苦しいことだった。

ガシューッ

急患室の扉が開き、何人が白いエプロンをした兵士が出てくる。マサキもいた。

「マサキ、大丈夫か？」

「レア君……」

首を横に振る。そうか……

黒髪メガネの看護兵がこちらに声をかける。

「どうやら我々に対する追加の任務報告をする為に飛んでいた連絡部隊だったようです。」

ここはジオン支配地域と近いですからね、直に任務を下す方が秘匿性は高いと判断したのでしょう。これを持っていました」
そう言つて小さなディスクを渡してきた。

「ありがとう。彼は？」

「宇宙葬用のポッドに入れて、できることならアジアの連邦軍基地まで護送……かしらね」

マサキが応える。いつもの覇気が無い、看護兵という立場上、心苦しいだろう。

「そうか……リュウさん、このディスク、ブリッジの艦長の所にまで持って行った方がいいよな？」

「ああ、彼の遺留品だったにしても、ミッションディスクだったにしても。確認は必要だ」

ズズウン！

振動！何だ！？

『ジオンだ！ジオンが来るぞ！』
敵襲！クソツタレ！

「長距離探索は何をしていたんだ！！」

『それが、地面に埋まって隠れていたみたい！』

音響・対動複合の長距離センサーだ。ミノフスキー粒子による電波妨害には強いが、待ち伏せには滅法弱いレーダーだった。

「まずいぞ、アムロ！カイ！ハヤト！リュウさん！早くMSに乗る……って、もう誰もいねでやんの……」
慣れていくのね……自分でも分かる……

MSデッキに向かっていて、通信が聞こえてきた。

『よし、アムロ、発進したな？』

『いいえ、まだホワイトベースにいます！』
どうということだ？

『艦長！セイラさんがいません！』

フラウ・ボウの悲痛な叫び声が耳に飛び込む、まさか！？

「アムロ、どうなっている！？」
MSデッキに飛び込みつつ、叫ぶ。

「れ、レアさん！どうやら、セイラさんがガンダムで出てしまったようです！」

なんだって？それが起きるのはアジアの砂漠だろ？ここは、アラスカ、それも平地帯だぞ！

「クソッ！フラウ・ボウ！敵は何だ！？」

『あ、青色のザクです！それが三機！艦の右前方、左前方、後方！
囲まりました！』

報告が入る、後半はもはや悲鳴に近い。

『い、いや、噂で聞いたことがある……あれは、ジオンの新型MS、
グフだ！』

ブライト艦長の通信だ。

グフが三機だと……？

『アムロ！ガンキャノンで出る！カイはセイラが戻るまで待機！』

「艦長！俺達は！？」

『リュウ、ハヤト、プラナも出撃だ！ジムは後方、タンクは右前方
に出撃！とにかくガンダムが戻るまで持ちこたえろ！』

「了解！」『了解！』

ガンキャノンに乗り込んだアムロと、俺達が応える。まずいぞ、こいつは！

（たしか、一機のグフですらホワイトベースの戦力は半壊してたんだ。それが、三機！？

小説版ガンダムめ、とんでもない展開をやらかしやがって！）

レアの中の小説版ガンダムへの評価はマイナスにまで落ち込んでいた。勘違いだったが、それを訂正できる人間はいなかった。

- - - - -

「ガンダムは!？」

『ホワイトベース、左前方!アムロが援護に向かっています!』

フラウ・ボウが応える、マズいな……

『レアさん、こっちのグフもセイラさんの方に行つたみたいだ。援護しに行かなくちゃ!』

「待て、ハヤト!アムロと同時に行くべきだ!」

『レアさん!!』

「焦つたら救えるものも救えなくなるぞ!落ち着け!」

『ガンキャノン発進!』

ズバーッ

ガンキャノンがホワイトベースから発進した。

「来た!アムロ、セイラさんはホワイトベースの左前方だ!行けるな!??」

『了解！』

アムロが通常のガンキャノンとは思えない速度でセイラさんが乗るガンダムの方に近づく。

クソツタレ、遅い！

「ハヤト！なんとかならないのか！？」

『無茶ですよ！ガンダムやガンキャノンと違って、こっちの足はキヤタピラなんです！』

うーむ、もどかしい。俺が動かせば……いや、今は戦場に出られただけで良しとするか……

『ああ……っ！！』

セイラさんの悲鳴が響く、見えた！ガンダムの右腕にグフの右腕から伸びたヒート・ロッドが絡まり、電撃を放つのが見えた。

『ぐわははははっ！白い奴の力はこんなものか！』
混線だ、グフのパイロットだろう。

「アムロッ！」

『ああっ！』

キュン！

肩部のキャノンが咆哮する。

ドワッ

グフに直撃、爆炎！

『アムロッ!』

『どいてろセイラ!!』

あの至近距離からの爆炎ですら無傷だとは……

他のV作戦機いらねえんじゃないの? って思えるくらい硬いなガンダム……

『アムロ、すまん、そっちにもう一機向かったぞ!』

「リュウさん! そっちは大丈夫か!?」

『ああ、レア。盾がぶつ壊れちまったが、無事だ。サーベルが無いのがこんなに辛いなんてな……』

『アムロ、後ろだぞ!』

ハヤトが叫ぶ、クソッ、観測手の俺が見てなかったなんて!

「2・1・1、いけるな、ハヤト!」

『発射!』

アムロの背後に迫るグフにガンタンクの両肩キャノン砲を発砲。一発外れた、が、アムロなら!

『しまった!』

「アムロ、左だ!」

『レアさん!? おおおっ!!!』

大きく左にステップ、崩れた体制でビームライフルを発射。

ドグアッ

崩れ落ちるグフ、やった！

『こ、このくらいの敵、私だつて……！』

ビームサーベルを手に近づく、が、そんな分かりやすい太刀筋じゃあ無理だ。

グフは右に軽々とステップ、少し体を伏せ、スクラムを組むように突進。

『あああつ！』

『くそっガンダムが邪魔になって撃てない！』

『落ち着けアムロ！敵は壊滅寸前だ！今に撤退するぞ！』

『くそっ！』

一対四、逃げるチャンスを探っているハズだ。俺ならそうする。どうするか……少し危ないが……

『ハヤト、ガンダムに当たらないように右側に外して撃てるか！？』

『当たらないように？』

『キャノンの爆炎で逃げるチャンスやるんだ！そうすれば、撤退を始める！ハヤト、俺がカウントする！アムロ、いけるな？』

『ああ、ガンダムから離れてくれればあんな敵！』

「リュウさん！あと何秒でこっちに来れる？」

『あと20秒ってことだ！』

「了解、ハヤト！」

『分かりました！』

10、9、8……ええい、もどかしい！

グフのモノアイが不気味に左右に蠢く。まだか！？2、1……

「撃てえ！」

ドゴォン！

肩のキャノンが火を噴き、着弾！

爆炎！グフがガンダムから離れた！

「今だ！アムロ、リュウさん！」

『墜ちろっ！』『いけえ！』

ガンキャノンのビームライフルが朱く煌き、ジムEからブルパップマシンガンの銃弾の雨がグフに降り注ぐ。爆発！

『ハアッ、ハアッ、ハアッ………』

セイラさんの声が通信機から響く、なんとかなったな……

『全員、周囲を警戒しつつ帰還しろ。セイラ、わかっているな?』
ブライトの声が通信機から響く。

『……ええ……』

それにしても、なんたつて出撃なんか……

- - - - -

セイラが帰還して、全員がブリッジに集合した時だった。

「……わかつてはいると思いますが、無断出撃、命令違反。営倉に3日間入ってもらいます。これは、他のクルーに対するケジメでもある」

「……ええ……」

俯きながらセイラが応える。

「ねえ、ブライト。どうにかならないの……?」

「いや、ミライ。今回は仕方が無い。それに、一歩間違えればガンダムが破壊されていた……」

直後、爆発音!遅れて振動!

「な、何だ!?!」

「敵、ザンジバル級戦艦による超長距離砲撃！待ち伏せです！ホワイトベース、落着きます！」

長距離探索レーダーに座る少年が叫ぶ、二重の伏兵！？やられた！！

「MSデッキ、誰か出られる者はいるか！？」

ブライトが叫ぶ、たしか、今残ってるのは……アムロだ！

「アムロがさっきのダメージを確認するためにガンダムを点検中だ！」

「ならばアムロを出せ！他のパイロットも急いでMSデッキに向かえ！」

「了解、レア！ハヤト！カイもだ！急げ！」

リュウが叫ぶ！クソッ、今日は厄日だな！

MSデッキに走りこみ、息をつく間も無くガンタンク上部に乗り込む、と、通信が入ってきた。

『続いてグフの反応が4つ！』

「4つだア！？おいおい、ジオンに兵なしなんて言ったバカは何処のどいつだ！！」

（さっきはなんとかあったが、今度こそ……死ぬかもな……）

『アムロが出ます！』

「頼んだぞ、アムロ！！」

クソッタレ、MSに乗れないのがこんなに辛いなんて……

「ハヤト！ガンタンク、出られるか！？」

『レアさん！無理です！さっきの砲撃で右舷MSデッキの開閉部が死んでます！出られません』

「なんだと！？それじゃあ、左舷に残ってるアムロが一人で出たってのか！？死んじゃうぞ！！」

左舷MSデッキ！アムロの援護になるようなものは無いのか！？」

「こちら左舷整備班！前の補給で追加されたハンマーがある！射出するぞ！」

- - - - -

『貴様らの思い通りにはさせんぞっ！ガンダムが相手だ！！』
「いったい外はどうなっているんだ…？」

『うおおおっ！！』

先程からアムロの雄叫びが通信機から聞こえる……

「もう出られるんだな！？」

『ああ、無理やりにだが開閉部をこじ開けたぞ！暴れてこい！』
整備班から通信が入る。

カタパルト前部が開いていくと、とんでもない光景が広がっていた。

片腕ずつ、グフのヒートロッドに縛られているガンダムだ。

「アムロ！」

ガンダムが両腕を掲げる！

ガッ！

ドバーツ！

ガンダムの両腕を縛っていた二機のグフが、空中でぶつかり合い、大爆発を起こした。

バラバラ……

(oh...)

「えーと、アムロ、さっき左舷からハンマーが射出されてはずだ。使えばいいんじゃない？」

『ありがとうよー！』

大きな黒い鉄球の左右に大きな実体剣を取り付けたような物体を拾い上げたガンダムが、グフを相手に無双をし始めた。

ドガッ！

ハンマーを振るい、

ズバツ！

左右の剣で胴体を両断する。

数分後には、壊れたグフ4機の破片がホワイトベースの前方に散らばっていた。

『ザンジバル級、撤退していきます……』

……うん、まあ、グフ7機も潰されたら撤退するよね……

『……かなわんな、まったく……アムロは最近まるで人間が代わっちまった……』

ブライトから通信が入ったってきた。

「エエ、ソウデスネ……サイキンデスネ……」

その時のレアは、まるで壊れた人形のようなだったという……

連邦の脅威の巻（後書き）

順当に行けば、次は日本で水着回。甘ちゃんが降りてくるのもこのタイミングなので、絡めたらいいな。

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

ヤマゲチ、鉄の嵐！の巻（前書き）

再会、母よ…まで

ヤマグチ、鉄の嵐！の巻

UC0079/10/09

ジャパン、E・F・A・F・ヤマグチ・イワクニ基地

サイド7から大気圏突入、カリフォルニア、ニューヨーク、そしてナクネク。

短期間で連戦に次ぐ連戦へと晒されたホワイトベース。日本に辿り着いた彼らに補給、そして3日間の休暇命令が下された。

それから2日、ついにホワイトベースに新たな兵器、つまりは生き残るための矛が届いたのだった。

- - -

「で、『ついに』なんて言っちゃあいるけど、たった一人なんだった？補給要員つてのは」

「ヨーロッパでの反抗作戦が計画されているらしいからな、兵が足らんのだろつ。連邦は」

「あー、昨日だけにシミュレーターで模擬戦した上（宇宙）から降りてきた奴が言っていましたね。たしかに」

「お前、そんなことやってたのか？レア。アホだな……」

「アホって……酷いなリウさん、たまたま軍港のPXでダラダラしてたらアジアに移送待ちだったMSパイロットに捕まったんです

よ。アマダ……えーと、少尉だったかな？」

日本名なのに宇宙から降りてきたってのは、ものすごく違和感があるな、と思ったレアだった。

「なんか、MSに乗って戦うのが初めてらしくて、で、すっかりホワイトベースでMSに乗ってるって言ったら

……まあ、テンション上がったんでしょね、シミュレーターに直行ですよ」

彼は気付いていなかったが、アジア方面攻撃軍第08MS小隊に配属される補給兵だった。

「そいつは運が悪かったな、レア。あの時ホワイトベースで真面目に補給装備の点検作業をやったアムロ達はお前がシミュレーターに入ってた頃は海水浴してたぞ」

ハア！？

「ハアアアアア！？呼べよー!!」

ワツハツハツハ、笑い声が響く。面白くないよ馬鹿！

「ああ、ちなみに俺も海水浴してたからな。セイラさんやフラウ・ボウ、ミライも出てたっけな」

ニヤニヤとリュウが笑いながら肩に手を置く

「俺がやたらとテンションの高い兄ちゃんとシミュレーターでかきたくもない汗を流してる間に……何羨ましいことやってんだよオ！」

「レエーア、安心しな、マサキは出てこなかったからお前以外の誰も水着姿は見てないぜ。おっと、下着姿だったな！」

「カイ、お前って本当にオートミール好きだよな」

「え、ちよ、なんで急に素になってんのレア……やめ……ギャー！」などと、ダラダラと補給装備の点検作業を行っていると、スピーカーからブライトの声が響いた。

『MSパイロット各員は作業をやめ、第三港に集合せよ。繰り返す……』

お、ついに荷が届いたかな？

「よっしゃ、行こうぜカイ、リュウさん」

「ああ、カイ、何やってんだ。早く行くぞ」

「……最近思うんだが、俺、体の中が7割くらいオートミールになってんじゃないかな……」

そりゃあ自業自得だ。

- - - - -

第三軍港ドックに入ると、一機のガンタンク……か？いや、ちよつと違うな。それと、ブライト、セイラ、他作業員が数人。そして金髪の女性が立っていた。

「揃ったな、では、これより補給要員の紹介を始める」

ブライトが声をあげた、ってことは、あの金髪ショートの女の人

補給要員か。

にしても、マジで一人かよ……

「アリーヌ・ネイズン技術中尉、ガンタンク一機と共に、独立混成第44旅団より出頭しました」

金髪の女性が、一步前に出て話し始めた。さすがは正規兵だけはある、キツチリとした敬礼だ。

「技術中尉？整備兵なんですか？戦闘要員ではなく……」

アムロが疑問を口に出した、ちらりと、ネイズン中尉がアムロを見て眉をしかめる。

まあ、ガキが当然のように口を出してきたら気にはなるわな。

「いえ、私は後ろのガンタンク、RTX-440、陸戦強襲型ガンタンクの操縦パイロットでもあります」

「陸戦強襲型？」

今度はハヤトが疑問を口にする、ネイズン中尉の眉が険しくなる。

「……ええ、重装備の爆装と、長距離砲撃、そして可変する上半身を”伏せる”ようにスライドさせ、高速移動形態に変形。近・中・遠・超遠対応のマルチロール機であります」

そりやすげえな、っていうか、一年戦争なのに可変機ってあるのか。8年くらい未来に生きてんな連邦……

『……ンがあ、どこかのスパイのお陰で開発中止となった不遇の機体だ、なア？アリーヌ・ネイズン技術中尉？』

モニタにヒゲ面のオッサンが映っていた。

「総員、コレマッタ少佐に敬礼!!」

ブライトが叫ぶ、あわてて、モニター横のカメラに対し敬礼を返す。なんとなくシユールな絵だなあ……

『ハン、本当にガキばかりだなア、ブライト少尉?』

「中尉であります、独立混成第44旅団、”大隊指揮官” ミケール・コレマッタ少佐殿」

大隊指揮官を強調してブライトが言う。内心ではムカついているのだろうが、相手を持ち上げていい気にさせた方がこういう相手なら早く終わる。

と、いうことをブライトは知っていた。

『おつとオ……失礼?、中尉殿』

いやらしい笑みを浮かべる。あ、コイツ、なんか……

『ヨーロッパでの総力戦に備え戦線構築のためにもMSが一機でも必要な時に、我が部隊に配属される予定であった”優秀な新型MS”を増援として送るのは”非常に心苦しい”のだがア?』

ジャブローからの打診であつては断り切れなかったのだな』

「はあ……」

ブライトも心なしかうんざりしているようだ。

『ガンタンクを一機送る。加えて、操縦者兼整備兵として技術中尉

も”送らせて頂く”』

ネイズン中尉を見て、とんでもないことをヒゲのおっさんが言い始める。

『ホワイトベースは敵への派手に目立って敵部隊への錯乱を主任務としていると聞く……』

目を細める、ああ、コイツ、人間のクズだな。なんとなくわかる。

『そのような目標を主目的としている部隊ならばア、”軍機情報漏洩幫助罪”により終身刑とされるも、温情により仮釈放された彼女の存在もあれば”十二分にこなせる”だろう……なア？』

ギリッ

ネイズン中尉の歯軋りの音が、聞こえた。

- - - - -

ホワイトベースのMSデッキに移動した俺達は先程起きた事を話し合っていた。

ちなみに、ネイズン中尉も作業をしているのでヒソヒソと小声で、だ。

「情報漏えい……えーと、とにかく、さっきのアレ、どういうことなんだ？」

「アホだなレア、漏洩幫助罪だ。つまり……」

「ナンだよカイ、もったいぶるなよ」

と、カイが俺の肩を引き寄せた。

「スパイの手助けしたって事だよ……」

ガン！

ネイズン中尉の方から大きな物音。

急いで離れて作業を再開、ちら、とネイズン中尉の方を見ると、ガンタンク……えーと、区別がつかないな。RTX-440の方は強襲型と呼ぼう。装甲を展開された強襲型の上半身に、整備兵と共に話し合っていた。

「ああそつだ、強襲型は、複座式に改良されるらしいぜ。ついでに脱出装置も取り付けるんだと」

「へえ、そりゃあまた……」

「……あア？なんだよ。……それと、自爆装置が機密保持の為に取り付けられてるらしいんだが、それはそのままらしい」

「いよいよもつて、だな……」

「ナンだよカイ、はつきり言えよアホ」

「お前にだけは言われたくないぜ……あの強襲型、オデッサに配備される予定だったらいい、が、ホワイトベースに急遽出向だ。分かるだろ？」

もったいぶるなあ……カイにあごを向ける、早く言えよという催促

だ。

「……つまりだ、複座に改造するのは、お目付け役を乗せるってことだよ。自爆装置を外さないってのも、そういうことだろ？」

「ああ、なるほど。ってことはやっぱり、スパイなのかねあの美人さん。もったいねえ……」

ガンー！！

更に大きな音。急いで離れる。

「複座ねえ……誰が座るんだ？」

「ハア？お前に決まってるだろレア」

……ハア？

「なんでだよ？」

「バカ、ジャパンに着いてすぐ、ガンタンクが一人乗りに改良されただろ？」

そうだった、ガンタンクは一人乗りに改造されたのだ。上の丸見えコクピットはダミーとして残すらしい。……ってことは！？

「俺かよー！！」

いまだに俺は一人でMSに乗れない。ジャパンの医者によれば、もうすぐにでも乗れるようになる……とのことだった。なんとなく、嫌な予感がするのは気のせいだろうか。

「ああ、そうだよバカ。タンクはハヤトだろうから、お前は強襲型だろうな。よかったじゃねえか、美人スパイと相乗りだぜ？」

「おお、そう考えれば悪くは」

ガンー！！

スパナが強襲型から飛んできた。危なッ！？

「な、何すんだアホ！ちゃんと整備も出来ねえのか！」

『お前らが作業できてねえんだろ？がキ共！！通信機のスイッチ入れっぱなしなんだよ！！』

ネイズン中尉の声が通信機……作業着を着ているから、ノーマルスーツのインカムではなく、耳につける普通のハンズフリーフォンのようなものだ。から、聞こえた。

つて、じゃあ、今までの会話は……？

『ああそうだよ、丸聞こえだ馬鹿共！お前ら、あとでちょっと私の部屋に來い！』

「……えーと、まだそういう関係になるのは早いんじゃないかなー？つて」

「あ、バカ、レア！」

ブチン！

何かが切れる音が聞こえた。

『……オーケイわかった、今すぐ行くぞ！整備班、残りの作業を続けるよ！分かったな！？』

ハイ……！！

戦後、ホワイトベースの整備兵が語ったところによると、戦争中最も一致団結した瞬間だったという。

- - - - -

半舷が潰れるほどの説教の後、ネイズン中尉……アリーヌさんと呼ばれた。

アリーヌさんとの会話は、ほとんどスパイ疑惑とは関係ない事にまで落ち着いていた。

「死神旅団？」

「ああ、死神旅団、さ。入る兵入る兵がどんどん死んでるのに、コレマツタとかいうあのヒゲ、あいつだけは死んでも生き残ってるんだ。で、ついたあだ名が死神旅団」

「へえー、死神、ねえ。この宇宙世紀に死神。アホらしい……」
カイが呟く、が、アリーヌを見ると、なんとなくだが俯いているようだった。

「もしかしてだけど、信じてるんすか？死神」

「……ああ、いや、檻の中に入れられてた時、夢に見たんだよ。黒髪の女の死神……」

「へえ、美人？」

一瞬、ポカンとした後、大笑いしながら応えた。

「あっはっはっはっ……ハア、アホだねアンタ。いや、ファーストネーム呼ぶのもアレだな、レアでいいか」

「別にいいけど……それ、俺の許可関係ないじゃないっすか。まあいいや、で、死神は？」

「ああ、ま、夢に見る程度には気になってたんだがね、死神。2日前にジャパンのこの基地に着いた時、同じ”死神”って呼ばれてる男に会ってね。アジアに行くらしいんだが。たしか、テリーだったかな？」

「死神のバーゲンセールだなあ……」

「ああ、でも、ソイツはなんだか死神って呼ばれるのが怖いらしくてね。ビクビクビクビクしてさ……で、ソイツ見てたらアホらしくなっちゃって。もう夢には見てないね」

「案外、その死神つてのに移ったのかもな！」

笑いながらカイが言う、たしかに、ご大層な仇名な割にしょっぱい男もいたもんだなあ……

ひとしきり三人で笑った後、話がMSの話に移った。

「で、レア。アンタが後ろに座るんだろ？腕はどうなんだい？」

「ああ、悪くはないと思うぜ？」

「まあでも、コイツは一人じゃMS動かせないんだけどな」
カイお前、余計なことを……

「へええ……？」

うつ、アリーヌさんがものすごくニヤニヤしている！嫌な予感がする……！

「それじゃ、模擬戦といこうか」

当たったアーツ……！

………

MSシミュレータールームに移動、ただし、ホワイトベースの小型タイプではなく、連邦軍基地に備え付けられた大型のものだ。対戦も出来る。

『しかし、本当にガキばつかりだね、ホワイトベースってのは。ジヤブローも耄碌しちまってんのかねえ？』

アリーヌさんの声がインカム、今度はノーマルスーツ……ではなく、先程と同じような作業用インカムだ。から、聴こえた。ただし、地上軍用のヘルメット備え付けのタイプ。

作業着なので楽だが、五点シートベルトで固定されているので非常

に動きにくい。

「まあ、元はサイド7の避難民ですからね、俺ら」

「ハア……いよいよダメだね、軍のお偉いさんは……」

俺もそう思う。まあ、非常時だ、仕方ないと割り切ってるんだろう。

「レア！お前に賭けてるんだからな！勝てよ！」

まーたいらんことしやがつて、カイ……お前はどこまでオートミールに染まってしまうんだい？

「へえ、私には賭けないのかい？後悔するよ？」

「大丈夫つすよ、勝ちますんで」

相手は強襲型と銘打ってはいるが、所詮はタンクだ、シミュレータなら十全の動きが出来る俺だ、ハヤトの乗るタンクにも勝率は8割はある。

ジムE……いや、だいぶ弄ってあるし、ジャパンでの改修でビームサーベルも使えるようになった。もうジム改って感じだな。ジム改に乗った俺が負けるとは思わない。

カウントダウンが始まる、戦場は荒野とビルの複合。開始時距離間は3000m。近づくまでが勝負だな……

3・・・2・・・1・・・スタート、戦闘が、始まった。

- - -

右腕のビームガンを構え、ステップ移動をしつつビル街に移動を開

始する。

相手はガンタンクだ、遮蔽物が無い場所を移動するのは避けたい。

最速で移動、あと少しでビル街に入る、って、何だア！？

前方のビル街にMLRSの雨マルチプルランチロケットシステムが降り注ぐ、爆破！

「ちょ、アリー又さん！アンタ適当にぶち込みやがったな！！」

『ハンツ！相手の動きを読んで、予測射撃！タンク乗りの常識だろうが！』

「それにしたってやりようがあるでしょうが！無茶苦茶だ！！」

『シミュレーターだからいいんだよ！ホレ、逃げる逃げる！』

急速バックステップ、強いGがかかる、が、下がる！

直後、再び前方に爆炎！案の定、今の通信を聞いて俺の位置を予想して撃ちこんできやがった！

なんとかしてタンクを見つけないと、このままじゃあ一方的に弄られるだけだ。どうする……？

上を見る、ロケット弾の雨はやまないが、そろそろ弾切れだろう。なんとなくの方向に検討をつけて進軍を開始する。

瓦礫になったビル街を突破中、左から警告！なっ、今さっきまでビルを挟んだ反対側にいたはずだったのに！！

56連装ロケットランチャーから発射された小型のロケットの雨が、こちらに向かって降り注ぐ。
シールド！

小さな衝撃が連続する、弾が多い分一発の威力は小さいのだろう。
が、シールドには何発も当たってしまっている。コンディショントド、まだ始まって2分も経っていないのに！

左に進路変更、ステップしながらビル街を突破、どこだ！？
前、無し。左、無し。右、いた！なんだ、あの形は！？

「ええい、速い！墜ちろ！」

ビームガンを連射。ガンダムのビームライフルの威力も無く、ガンキャノンのビームライフルの精密な照準能力も無い陸戦型ガンダム専用のビームライフル。

そのビームライフルを更に銃身を短くカットして、取り回しを良くしたのがこのビームガンだ、つまり、レアのあまりよろしくない照準能力では、当たるはずもなかった。

強襲型は大きくスリップ、いや、違う！大きく左にステップして回避！

こちらを向いて止まった強襲型は、腕部ポップガンを連射してきた。セーフ！あつぶねえ……

「聞いてないっすよ、アリーヌさん、あんなハデに変形するなんっ……て！！」

こちらに突進しながらポップガンをばら撒いてくる。シールドを構えつつ大きくジャンプ！

『言っていないからねえ！！……喰らいな！』

足元を通り抜けた強襲型、着地して後ろを向き、ビームガンを撃とうとして足元の四角い物体に気付く。嫌な予感がする……！

咄嗟にシールドを構える、同時に爆炎！大きな衝撃。クソツタレ、地雷か！？

火炎が前に迫る、いや、違う！火炎放射器の攻撃だ！ああ、ビームガンが熱で死んだ！クソツ！

ステータスを確認、シールド……今の地雷で左腕ごと吹っ飛んでいた、他は……かろうじてイエロー、か。武装は頭部バルカンと、増設されたビームサーベルだけ……！

ヘッドバルカンをばら撒きつつ、大きくジャンプ。爆炎で見えないはず！サーベルで！

黒煙を突破、強襲型を目視、すると、伏せ状態から立ち状態に戻った強襲型が、220mm滑空砲を構えてこちらを見上げていた。ヒイ！やっばい！！

バックパック上部の補助スラスターを吹かす。ジムEだった名残のこのスラスターが、レアを救った。

急速に下降したジム改の中心を狙っていた滑空砲が発射、ジム改の頭を吹き飛ばす！

満身創痍。だが、獲った！

ビームサーベルを突き刺す！

「うおおおお……！」

脚部に致命的なダメージを与えた！勝ったも同然だ！

と、アリー又さんの強襲型が俺のジムを腕部ポップガンで抱え込む。

何だ？何をする気だ！？

「え、ちよつ、アリー又さん！何を！？」

『地雷には、こういう使い方もあるんだよ！！』

アリー又さんの声が響く、おい、まさか！？

次の瞬間、大きな振動、そして爆炎。

メインモニターには、勝者、レア・プラナの名前が映し出されていた。

ヤマゲチ、鉄の嵐！の巻（後書き）

風邪には気をつけましょう。ということで、お待たせしました。復帰です。

幕間、かつ、完全にオリジナル展開、そしてクロスオーバーです。

ここからの展開は、大きく原作とかけ離れ…は、しないはずですが、冒険王は既にTV版から大きくかけ離れていますので、TV版基準で言えば超展開になります。ご注意ください。

追加キャラはアリーヌ・ネイズンさんでしたー
分かったかなー？（棒）

死神は別の死神に引っ付いていきました。バイバイ、死亡フラグ！
未永くお幸せに！

ひょっとして弱いんじゃないかと評判のオリ主君、そんなことはありません。そこそ強いです。ジェリドくらいにはなります。

風邪の時にタイムラインを見直したんですが、ちょっと無理が見えてきたんで更新頻度が落ちると思います。エターナったりはしないので、お待ちいただければ幸いです。

11/04/011 00:11前後の意味がちょっと変になって
たんで追加。

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

レア・プラナ特攻！の巻（前書き）

激闘は憎しみ深くまで

レア・プラナ特攻！の巻

あれから一ヶ月ほど経ち、アジア各地でたつぷりと後方錯乱をして、ジャパンに戻る日々を繰り返していたホワイトベース隊に新たな命令、オデッサへの威力偵察命令が下された。

ついに地上でのジオンに対する最大の反抗作戦『オデッサ攻略作戦』が開始しようとしていた。

レアとアリーヌのシミュレーターによる衝撃の引き分けは、分断されている連邦軍を繋ぐハブであるジャパンに集まっていたMSパイロット・パイロット候補生達を大いに刺激し、賭けの胴元であったカイは

「アレはプラナの勝ちだ」「いや、地雷の位置関係でネイズンが先にアウトだっただけで、引き分けだ」

という声を捌ききれず、最終的にはレアの手により一ヶ月オートミールの刑に落ち着き泣いて喜んだりしていた。

そして、ホワイトベース隊のMSパイロット、というか主にレアは、補給に帰るたびにシミュレーターに借り出されていた。

それは、戦闘経験の少ない彼らにとって非常によい経験になっていた。なんせレア、そこらのMSパイロットよりも5歳は若いのに、誰よりも強かったのだ。

といっても、アリーヌのようなぶっ飛んだ戦法には対処できないし、

アムロには単純に腕で勝てない、が、彼は誰よりも強かった。まあ、日頃比べる相手がアレなので彼は天狗にはなっていなかったが。

そしてシミュレーターでの連日の訓練という名の模擬戦（と言う名の賭け試合）は、レアにも良い経験になっていた。

アリーの後部座席に座って索敵・武器管制をこなしていたレアは、他のホワイトベース隊のパイロット達と比べても、圧倒的に経験が足りなかったのだ。

一ヶ月経ち、もうMSに一人で乗っても大丈夫……程度には落ち着いていたのだが、そんな微妙な人間を乗せるような機体はホワイトベースには余っていなかったし、レアもせつかく二人乗りに改造された強襲型ガンタンクがもったいないので後部座席で甘んじて受け入れていた。

しかし、レアの射撃の腕はやはり残念なもので、アリーヌから任せられた武装は対歩兵用のスプレッドと、正確な照準精度を要求されない56連装ロケットランチャーだけだったが。

ちなみにスプレッドとは、上空にアルミ缶のような筒を射出し、数千の針のようなものを炸裂の衝撃で地面に向けて射出する対歩兵用兵器だ、もちろん、タンクの装甲が傷つく程の威力は無い。

そんな兵器、使う事あるのか？と、最初は思ったレアだったが、意外や意外、ホワイトベースが後方錯乱として暴れていたアジアはゲリラ兵の動きが活発である。

足元に対MS用ロケットランチャーを持ったジオンの歩兵や、ジオンに協力する現地反連邦ゲリラが動いていた事も一度や二度ではなかった。

そんな時、大活躍するのがこのスプレッドだった。

ちなみに、最初に使った時は地面の元敵兵のあまりの惨状に吐き、前方斜め下に座っていたアリーヌさんに直撃、ぶち切れ。

マサキに慰められつつ二日ダウン、という感じだったが、そんな事態も片手の回数を超えればなれた物であった。

52連装ロケットランチャーは、やはりレアの射撃精度では当たらなかったが、ばら撒くのが基本的な戦法であったので彼の気質にあった。

アリーヌの確認戦果数は車両14、MS8にまで増えていた。これは、搭乗して一ヶ月の間では異常とはいかないまでもかなりの戦果であり、間違いなくアリーヌはエースである。

何故、彼女は技術中尉だったのだろうか？と常々思いつつランチャーをばら撒くレアであった。

といっても、彼も副座でありながらランチャーによりMS2破壊に至っているので、キャノンの時をあわせればエースと言わないまでもかなり優秀なパイロットであるのは間違いない。

話はシミュレーターに戻る、とにかく、レアはシミュレーターでの模擬戦に狩り出される事が多かった。

最初にアリーヌと激戦を繰り広げたこともあるが、彼の、その、なんとというかチャライ感じは気軽に誘いやすかったのだろう。

レア自身も、なんでMSパイロットって美人多いんだろうなー、とか思いつつ、女性のMSパイロット候補生などに誘われればホイホイと付いていった。

結果、黒人のガチムチが相手だったりして、なにこの美人局やだー！とか叫びつつもボコボコと倒してはPXで奢ってもらったり、エロ本貰ったり、ご褒美のキスを貰ったりしていた。

最近では、ニューヤーク攻略に向けて召集された部隊が持ち込んだ陸戦型ガンダムのデータに勝手に乗って営巣にぶち込まれたり、そのニューヤーク攻撃部隊と模擬戦をしたりしていた。

「ジェシカ軍曹とか言ってたっけ、あの人、恐ろしい勢いで陸戦型で突進しながらビームサーベル振り回してくるからジム改じゃあパワ―負けして辛かった……」とは、レアの談。

「というか、陸戦型ガンダム三機小隊ってなんだよ、僕達にも一機くれよ……」とは、ホワイトベースクルーの談。誰とは言わないが、まあ、180mmキャノンで砲撃も出来る、と聞いた時の顔は愕然としていたとだけ言っておこう。

……強襲型と違って後ろで撃ってるだけだもんな、ガンタンク。

と、レアがシミュレーターで遊んでいた頃、アムロは部屋に引き籠もっていた。レアがこの時アムロの異変に気付いていたならば、後の悲劇は避けられたのかもしれないかった。

- - - - -

UC0079/11/02 深夜

ロシア、ヴォルゴドンスク西

ドバーッ！

轟音、衝撃、続いて警報！なんだ、敵襲か！？

連日馬車馬のように働かされたレアだったが（休息時間は通常のパイロットには十分にあつたのだが、彼はたまの休日も連日のようにシミュレーターで激戦を行っていた）、オデッサ作戦の準備が整った今、威力偵察部隊として東部の先陣を切って狩り出されているホワイトベースで、久々の安眠を貪っていた。

そんな久々の快眠を妨げられ、彼は今機嫌が悪い。

「ジオンめ、ぶっ殺してやる……」
眼が据わっている。

壁に備え付けの通信機のスイッチを押し、当直のオペレーターに通信を繋げる。今の当番は、えーと、ハチジョーさんだったかな？ そげぶ！ 違うか。ちなみに、彼女もアリーヌさんと同じ技術畑だ。日本基地からの追加人員。

っていうか、アレだけの後方錯乱任務に出しといて、追加人員がアリーヌさんとハチジョーさん含んで4人って頭おかしいよなあ、連邦軍。戦闘要員アリーヌさんだけだし。

「ハチジョーさん、どこのクソジオンが俺を起こしたのか教えてくれる？」

『ハチジョウ、ですよプラナさん。シマ・ハチジョウ。まあいいです、と、そうでした。アムロ・レイがガンダムに乗ってホワイトベースから脱走したようです』

そうか、クソアムロが起こしやがったのか。ぶっ殺してやるクソア

ムロ……アムロ!?

「ああん!?……つと、失礼。ゴホン!ゴッホン!さて、なんとつてアムロが脱走なんだ?」

『わかりません、が、現在艦長らが対策会議を開いています。結果が出次第、なんらかの指令が下るはずです、お待ちください』

「はあ、対応待ち。ねえ……ありがとうよハチジョーさん」

『ハチジョー』

通信を切る。そうか、そういやそんなイベントあったな、アムロ脱走。

しかし、やはりというか俺の知ってるガンダムとは全く違う展開をするんだな小説版。まあ、もう、そういう未来知識もクソも関係ないか。俺は俺で頑張って生き残るだけだ。

思いつつ、寝る体制に入る。アムロのことよりも、今は自分の睡眠欲の方が大事だった。

アムロが脱走ねえ……まあ、アムロとガンダムだし死にはすまい。うん……

- - -

二日後、再びスクランブル。現在地はウクライナ、ハルキウ。

なんか、どんどんオデッサに近付いてないか?まさか、アムロが一人でオデッサ破壊なんてしないよな?

……ありうる……

と、恐ろしいがあり得そうな未来を思考から外し、前方にいるアリーヌさんに話しかける。

「前方2700、ジオンの前哨基地……の、辺りにガンダムの反応があった……らしいんですけどねえ」

黒煙、爆発音、爆炎。

「私が言うのもナンだけどさ、アムロってガキの方がよっぽどスパイなんじゃないかい？ガンダム持って脱走なんてさ。普通、銃殺刑だよ」

大きな黒煙、信号弾、地響き。

「まあ、一人で基地ぶっ潰してるみたいだし、あの戦果なら営巢入りって感じじゃないですかね？」

あきれた顔のアリーヌさんに話しかけ、一旦打ち切る。

数十分前、ガンダムを追跡していたホワイトベースが信号を発見、スクランブル発信で駆けつけた結果がアレだ。呆れもする。

「ハア……で、どうすんのさ？アレ……」

アリーヌさんがため息を吐きつつ言う。まあ、俺も吐きたくはなる。

「えーと、リユウさんがジム改で基地に向かって進行・アムロを説得、カイが援護。ハヤトはホワイトベースで周囲警戒って感じですね」

「そんなことは分かってんだよ……って、何だア!？」
「うおわ!？」

大きな振動!地鳴り……地震?いや、違う!

次の瞬間、グワジン級大型戦艦が地面から直角に上昇、宇宙へと飛び去って行った。

(……ええ?)

「チッ、ジオンめ!単艦で大気圏離脱できる戦艦だと!？」

キラッ!と、レアの眼が光った。やった、アリー又さんはまともだ!
「そ、そうですよね!あんな形状で大気圏離脱なんてしたら、あの丸いタンク爆発しますよね!」

「ああ!?何言ってるんだい!艦後部にブースターを付けてなかっただろうが!」

(ああ、ダメだった!クソッタレ!)

アラート!

「アリー又さん!左!」

「なっ、チィッ!」

ギユアアア!

脚部の四つの無限軌道が唸りをあげ、左方向にスリップするように緊急回避!

次の瞬間、先程まで強襲型がいた地面に、黄色い閃光が突き刺さっていた。それも、上空から。

「な、なんだい！アレは！？」

ジオン軍飛行MA、四脚に8つの砲門、アッザムの登場だった。

「ま、まっずい！リュウさん！カイ！上だ！」

『な、何イ！？うおおっ！！』
ブッ！

通信が途切れる。どうした、まさか！？

「リュウさん！リュウさん！？」

「落ち着きな、レア！……カイ！今すぐホワイトベースまで下がりな！」

「アリー又さん！リュウさんが！！」

まさか、死んじまったのか？あんなにあっけなく！？

「落ち着きな、レア！メインモニタを見る、ジムはまだ無事だ！ど
うやら、あの小さいUFOが何かやらかしたらしい。アレをまず潰
すぞ！」

「UFO……！？あ、アレか！」

（アレは……アッザムリーダー！そうか、電撃でジムのOSか冷却
機がイッチまったな？それで、通信が出来ないんだ）

言って、強襲型が大きく右に旋回してアッザムからの砲撃を避ける。

右、左、大きく蛇行運転。強襲型のスピードはかなりのものだし、アッザムの砲撃ペースは遅いようだ。当たらない。

ジム改に近付く。アッザムリーダーに腕部ボップガンを連射！撃破！
どうやら、簡易的なドローンのようなものだったらしい、遠隔操縦か自動操縦かは知らないが、脆い。行ける！

急減速！大きなG、我慢！

ジム改に取り付く、今だ！

「アリーヌさん、スモークディスチャージャー！」

瞬間、普段はスプレッドが入っている発射口に装填されていたスモーク・ポッドが広域射出、一瞬で数百mほどの白煙の塊が生まれた。

「いい子だ！」

両腕部のボップガンを操り抱き掲げるように持ち上げる、ホワイトベースまで下がるぞ！

アッザムはしばらく白煙に対して乱暴に下部キャノンを撃ち込んでいたが、どうやら基地を襲っているガンダムに目標を定めたのか、そちらの方に向かっていった。

「クソッ、アムロ！聴こえてるんだろ！？敵の新型飛行MAがそっちに行っちゃった！倒してくれ、リュウさんがヤバイ！」

こう言えば、意外に情に熱いアムロは奮闘してくれるだろう。嘘は言っていない。嘘は。

とにかく、今はホワイトベースに帰還する事が最重要だった。

- - - - -

ホワイトベースに帰還、ジム改を下ろし、再び基地に向かい、アムロの援護。

数分後、基地に辿り着くと、そこには先程苦戦させられたアッザムらしき破片と、無傷のガンダムが立っていた。

「ホント……化け物だね、あの子……」

「それ、アムロの前では言わないでくださいよ？」

意外と繊細だからな、アムロ。モニタ殴ったりしてたし、たぶん家の壁とか殴っちまって出来た穴で一杯なんだぜ？

『レア、聴こえて！？』

「うおっと、何だセイラさん？」

『現在ホワイトベースは、敵の奇襲を受けて落着、行動が不可能になっているわ。おそらく、敵は前のグフの生き残りね』

「チッ、まずいね……セイラ、カイやハヤトは？」

アリーヌさんが吐き捨てるように言う。

『カイのガンキャノンは中破、防衛で手一杯のようね、ハヤトは敵のホバー戦闘車両に苦戦しているわ。急いで！』

「アムロ！」

機首ワイヤーポッドを射出、お手手のふれあい通信ワイヤー版だ、これなら間違いなく聴こえているだろう。

『ああ、レアさん。アリーヌ中尉も……』

なんというか、ニヤケ面だ。

「ホワイトベースが敵の襲撃を受けてる！援護に行くぞ！」

『僕の力が必要だと分かったんですね！』

笑顔で言った、コイツ……

「来なくていい、レイ曹長」

アリーヌさんが、冷たい、とても冷たい声で言った。

「あ、アリーヌさん！今は少しでも！」

「来なくていいと言っているんだ、プラナ軍曹！」

あちゃー、こりゃ、マジ切れだな……

『そ、そんな事言って！僕が行かなきゃホワイトベースは！』

「上官命令だ、レイ曹長。行くぞ、レア」

「あ、ああ……」

『レアさん！』

「まー、アレだ、ちょっと今回は調子乗りすぎだわな。アムロ。少し頭冷やしたほうが良いぜ？」

ま、これくらいしか俺には言えないわな。後は、アムロが自分で考えることだ。

- - - - -

「ホワイトベース、そっちはどうだ!？」

『レア!今。カイとハヤトでグフを押し込んでる、もう少しよ!でも、リュウが!』

「リュウさんが!?!どうしたってんだ!?!」

『リュウがジムから出てきて、コアファイターで敵のホバー車両を攻撃しているの!無茶よ!』

「あんのバカ!ジムが使えないからって!」

「アリーヌさん、言ってる場合じゃない!!援護に行かないと!」

「援護ってたって、どっちにさ!?!」

「リュウさんのだよ!」

マズいぞ、たしか、こちらでリュウが怪我だか死ぬだかするんだつた。

クソツタレ!役に立たない割に、嫌なところだけは当たり前やがるなクソ原作知識が!!
チート

ドグアーン!大きな爆発音、ホワイトベースの方からだ。カイがハヤトがやったか!

と、ホバー戦闘車両、ギャロップの方を見る。リュウが上空を旋回し、攻撃をしようとしているようだ。

って、マズい、あの進路じゃあ攻撃した後は背部の機銃に丸見えだ、

旋回した時はアウトだ！

距離は……コアファイターの速度から見て、ギリギリか！？

一か八か、やるしかない……か？

「アリー又さん、リユウさんがヤバイ。ゴメン！」

「何だア？つて、レア、まさかお前！！」

言い終わる前に、アリー又さんを緊急脱出装置で後方に射出、パラシュートが開いたのが見えた。

『ツウ……てつめえ、ふざけるな！自爆する気だな！？アタシのRTX-440を何だと思ってるんだ！！？』

アリー又さんの罵声が通信機から響き渡る。あ、やつぱり素だとアタシって言うんだ。と、場違いだが納得してしまった。

「悪いなアー！アリー又さんよオ！！これしか手が無かったんだア……」

言いながら、脱出により操作権が後部座席に移った強襲型の進行方向をギャロップの移動予想方向にあわせて進路修正、相手も気付いてコアファイターの向いている方ではない左側面の対空機銃をこちらに撃ってきたが、もう手遅れだ、馬鹿が！！

「よオツ！！！」

自爆コマンドを入力、ついでに右無限軌道外部に備え付けられている地雷もイグニッション。

ビーンッ！！

メインモニターオールレッド、カウントダウン開始。

「「13秒後、本機は機密保持の為、消滅します」」
システムが無感動に読み上げる、確実な死へのカウントダウン。

13秒ねえ、悪趣味だな。コレつけた奴。

が、俺が巻き込まれる謂れは無い。

「脱出!!」

一回言ってみたかったんだよねえ!

急激な押しつぶされるようなG、フリーフォールなんてメじゃ無い。
次の瞬間、景色が一変した。

眼下に広がるのは荒涼とした大地、ギャロップ、攻撃するコアファイター。

そして、水平発射された対空機銃を全身に浴び満身創痍になりながらも特攻するRTX-440強襲型ガンタンク。

「グウツ、ハツ、ハアツ、はぁ……」

リュウのコアファイターが蜂の巣に……撃たれ始めた次の瞬間、信じられない程の巨大な爆炎!

もはや火の玉になったギャロップに向けて、右手の中指を立て、ニヤリと笑う

「ざまあ、みやがれ!」

瞬間、シヨックウェーブ！

ぎゃあああああ！吹き飛ばされる！！

パラシュートが破損！やっばい、さすがに落下死は嫌だ！！

千切れたパラシュートをパージ、地面が……ち、か……いつ！！
予備ノパラシュートを開く、ドスンッ！と、着地、ケツいつてえ！！

おおおおおおおうえ！吹き飛ばされた時の風圧で回転した時の酔
いが俺に襲い掛かる！

おおおおおおおうえ！！

オロオロオオロオロオロオロオロオロオロ……ビチャビチャビ
チャビチャ……

ハリウッドもビックリの超脱出を繰り広げたレアだったが、残念な
がら格好はつかなかったのだった。

レア・プラナ特攻！の巻（後書き）

ハチジョーさんは木星でイデと大暴れする方ではなく、没キャラの方です。つっても口調すらわからないんで、夜の場面でしか出ないかも。

容姿とかはまあ、レアがちょっと丁寧言葉使おうとしてる辺りでお察しください。

覚えているかいースピリットオブジオンを

冒険王アムロさんは脱走を一切反省せずに終戦を迎えたので、こちらでは反省してもらったために最後のギャロップ退治はレア君の手でやってもらいました。

また機体が…そしてアリーヌさんとばっちりカワイソス…

ちなみに、冒険王ではアムロさんが両手を振り上げグシャーツつと殴ったり（マジ）、持ち上げてからブン投げて（これもマジ）討伐します。

11/04/13 11:11 全体的に小さく加筆修正、ブツ切り感減ったはず。

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

恋愛最前線の巻（前書き）

幕間、もしくはミッション6

恋愛最前線の巻

「リュウさん、大丈夫ですか？」

破壊任務を終え、ホワイトベースに帰還したレアは、救護室に向かいリュウの見舞いに来ていた。

「おお、レアか……俺は見てのとおり、元気……とはいかないが、ベッドの上で普通に動ける程度には落ち着いたぞ。それより、どうだ？ ジム改は」

あれから三日たち、営巣に入れられたアムロの拘留期間はあと四日。オデッサを大回りするように威力偵察任務を受けていたホワイトベースだった。が、前回の基地攻略による戦果と、予定外の損害により早期撤退、ベルファストへの移動兼特別破壊任務が下されていた。

北部を大回りしてベルファストに行くルートは変わらないが、大きな戦闘に巻き込まれるルートではなく、途中に補給を挟んで敵の前線への補給路を分断する破壊工作任務に移行したのだ。

つまり、ご大層に破壊任務とは言われているが、傷ついたホワイトベースを一応は目立たせつつ、ジオンの前線基地に補給可能である通路・橋を破壊するという簡単な後方任務に落ち着いていた。

これには、前線基地破壊という多大な戦果に加え、撤退した戦艦に

はキシリアとマ・クベが乗っていたという事実と、新型M Aであるアッザムの破壊・戦闘データ、そしてなにより、アムロが破壊した基地にはオデッサに移送される直前の水爆が置かれていたということが調査で判明したのだった。

それを聞いた時のブライトは、なんというご都合主義だ、アムロは神の加護で儲けているのか？ もしやコレは、噂のNTというものののだろうか？ という想像に囚われ一日ほど寝込んでしまっていた。

とにかく、これほどの戦果ではアムロはあまり重度に罰することは出来ず、一週間の営巢入りという事になったのだった。

現在は、負傷したりユウの後方移送と落着いたホワイトベースの簡易修理、補給の為に森林地帯にてミディアの補給を受けるために移動している現状だ。

あのあと、アリーヌさんにはボッコボコにされ、やはり危険な戦法だし、機体を一つ潰されたとしてブライトには修正を受けたレアだった。

ボッコボコにされた顔を治療しに救護室に向かい、マサキに治療してもらった時に理由を聞かれたので馬鹿正直に

『リュウさんが危なかったんで、他に手も無かったし強襲型の自爆装置を作動して特攻させた。アリーヌさんが般若のような顔をしてスパナを振って来た時は死ぬかと思った』

と、言ったところ、少し泣かれて戸惑っていたレアがいた。

後でその話を又聞きし、カイから般若の意味を知った時のアリーヌの顔も同じく般若だった、という追記もしておく。

が、ジムE……

今はジム改だが、とにかくジム改の被害はアッザムリーダーの電撃によるラジエータ部のオーバーヒートと、OS補助回路の損傷のみだった。これならば、半日と経たず復旧可能だ。

とにかく、リュウが負傷退場した今、機体に乗れる人間で余っているのはレアとアリス、そして、シミュレータの適性検査の結果では、もちろん一ヶ月の間ジム改で未来のエース達と日本で模擬戦に明け暮れていたレアが負けるはずもなく、レアがジム改に乗るという事になっていた。

先程のリュウの質問はそういう事だった。

「シミュレーターとは違って、少し違和感がありますけど慣れましたね。キャノンの時より俺にはあってるようです」

「そうか……すまん、俺が無茶したばかりに」

「いいんですよ、リュウさん。あの時リュウさんが囿になってないや、カイとハヤトだけだったホワイトベースはやられてました」

「フ……ま、ホワイトベースにはマサキ軍曹もいるからな、お前がどうにかしてくれるとは思ってたさ」

ニヤリと笑う。救護室でボッコボコにされ自己犠牲パンのヒーローのような顔に膨らんでいた顔をマサキに治療してもらっていた時の顛末……まあ、泣かれたのを見られていたようだ。

「ハア、よく言っぜ。アムロがいたからでしょうが……」

「ワッハツハ、まあな。ま、それもあつたが、なににせよ無事だったからいいんだよ!」

「やれやれ、まア、俺もリュウさんが生きててよかったつすよ……」
今はこうやって冗談を言い合っているが、一步間違えればリュウはギャロップの攻撃で死んでいただろう。

ビーツ! ビーツ!

アラート! 敵襲か!?

「どうした!？」

リュウがベッドで上半身を上げる、辛そうだ。

「わからねえ……当直! どうした、何が起こった!？」

『プラナさん! ホワイトベース前方に不明な反応、どうやら、待ち伏せのようですが……仕掛けてこないんです』

「仕掛けてこない……?」

どういうことだ? 伏兵なら、こんな発見されるような状況ではもはや策は崩れている……攻撃が任務じゃない……? つまり、偵察か!?

「どうした、レア!」

「あ、ええ、リュウさん、どうやら偵察されてるみたいです。とにかく、MSデッキに行きます」

言いつつ、リュウのベッド横の椅子から立ち上がり、救護室から出ようと体を外へと向ける。

と、リュウが声をかけてきた。

「レア……無茶するなよ」

ひらひらと手を振って応えた。

救護室を出た瞬間、マサキと鉢合わせた。

色々忙しい破壊工作の為、あの救護室で泣かれた時以来、こんなに近くにいる二人だった。

こちらを見て驚いた顔をしたマサキだったが、俯き、一瞬の間の後口を開いた。

「あの、レア君……さ、もう、特攻なんて無茶、しないでよね？」

キヤアアアー！カーワイーイー！

ええいつ！上目遣いでそれは反則だぞ！マサキ！！

レアの脳内は有頂天である、カカツとマサキの上目遣いにやられていた。

次の瞬間には、マサキのあごを指であげ、キスをしているレアだった。

（……あぁっ、やつちゃった俺エ！！？……体が勝手に動いていた。な、何を言ってるのか分からないと思うが俺もわからない……）

「……れ、レア君!？」
うるたえ、目を点にするマサキ。

(あばばばやってもうた!! な、なんとかしなければ! こう、何かかつこい事言つてこの場を切り抜けなければ!!)
だいぶテンパツているレアである、次の瞬間、彼はとんでもないことを口走っていた。

「……この戦争が、終わったら、さ……。俺と、付き合ってくれないか。マサキ?」

「……えっ?」

「……おおっとオ! 招集がかかってんだ。じゃあな!」
走り出し、顔を真っ赤にしながらマサキにひらひらと手を振って消えるレアだった。

- - - - -

「この戦争が終わったらさ、俺と付き合ってくれないか。マサキ?」

アラートの後、緊急招集がかかった俺は、着替えてMSデッキに向かおうと自室を出たあと、救護室の前で話し合う二人を見つけた。

レアとマサキ。

俺が冗談を言う度にあのゲロみてえなオートミールを喰わせにくるアホと、その彼女だ。

そのレアが、とんでもない事を言っていた。

俺と付き合ってくれないか……？

オイオイ、まさか、アレだけやらかしといて、まだ付き合ってすらなかったのかあの二人は。雰囲気もクソうざってえアベックが垂れ流す雰囲気まんまだったつてのに。嘘だろ……？

ってイヤイヤ、そうじゃない！今アイツ、とんでもない事言いやがったな……

思い出す、少年の日に、お爺さんから聞いた話を。

『カイよ……戦場で「この戦争が終わったら結婚するんだ」とか言う奴には近付くな……』

「どうしてなんだい、爺ちゃん？いい話じゃないか……？」

『死亡フラグ……と言つてな……ジャパンの生まれにはそういう言い伝えがあるのじゃ……』

「死亡フラグ？」

『……ああ……戦場でそういう事を言う奴は、十中八九死ぬんじや……カイよ、巻き込まれるから近寄ってはダメじゃぞ……？』

「わかったよ爺ちゃん！」

『おお……カイよ、この話が終わったら、二人でおやつを食べよう……グッ！？』

「じ、爺ちゃん！爺ちゃん！！」

幸い、爺さんは一命を取りとめ最終的には天命を全うしたが、死亡フラグには敏感になったカイだった。

「レアには、近付かないようにするか……巻き込まれちゃたまらねえしな。ナンマイダブナンマイダブ……」

彼は知らない、ハリウッドでは、あまりに濃い死亡フラグは逆に生存フラグになるという事を。

- - - - -

ホワイトベースは山岳の合間に停泊、ハヤトのガンタンク、カイのガンキャノンと、順番に出撃、続いてレアの番になった。

「レア！この私が整備してやってんだ！壊すなよオ！」

「了解！アリー又さん、ありがとよオ！」

レアが特攻でブチ壊した強襲型に乗っていたアリー又は、搭乗可能なMSが無い今、整備兵になっていた。曲がりなりにも技術中尉、整備の腕は満点以上である。

「レア、雨に加えて非常に濃いミノフスキー粒子で、至近距離レーダーか、目視でしか敵を発見できない状況よ。それも、敵は偵察が目的のようね。無茶はしないで！」

「あいあい、セイラさん！レア・プラナ！ジム改で出るぞ！」
カタパルトで射出され、艦右前方に着地する。

どうやら、データ収集目的の偵察が相手だ。敵が多いようならお帰りいただくのを待つのもアリなんじゃないかと思う。

と、次の瞬間、ハヤトから通信が入った。左翼の小高い山に陣取ったハヤトだから、発見は早かったのだろう。

『れ、レアさん！敵はザクが9機だ！多すぎる！！』

な、なんだと！？守備戦だが、相手は三倍の戦力……こっぴりやあやバい！

「艦長！アムロを出してくれ！ガンダムを余らせて勝てる相手じゃない！！」

『なっ！？しかし、今アムロは謹慎中だ！』

「馬鹿！！敵の大編隊が来てるんだぞ！アムロを檻に入れてたから全滅しました、なんざ話を通るか！！」

暴言だが、コレ位言わなければアムロは出せまい。

逆に、俺が修正されることでアムロが出せるのなら、安いものだ。

『クツ！アムロをガンダムで出す！それまで持ちこたえろ！！』

『りょ……了解！』『無茶言つなよ！』『了解だぜ！』

クソツタレ、相手はザクと言えど九機、楽に勝てるとは思えねえな

……

「ハヤト、敵はどんな感じだ？」

『すぐに見えなくなつたんですが、三機編成の三分隊で動いていたようです。再編成してなければ、ですけど……』

一機あたり三機潰せばいいのか……厳しいな……

「カイ！お前はハヤトの援護に行ってくれ！このミノフスキー濃度で、しかも今は雨だ、視界は最悪！タンクに近寄らせないようにするんだ！」

『あいよ！レア、死ぬなよ！』

ハッ、カイに心配されるとはな……

ゴロゴロと、雷雲が轟いていた。

- - - - -

ビーツ！

アラート、って、右後方から！？

緑色のザク三機が、バズーカを放ってくる。後方に緊急回避！

ジム改の右手に持つビームガンで乱射しつつ、機体が隠れるほどの大きな岩に身を隠す。

今の感じじゃ、当たってないな……

ガシャン、ガシャン、ガシャン

ザクの足音が近付く。

心音が高まり、呼吸も荒くなる。

ハッ、ハッ……

どうする、一か八か、裏から回り込むか？ そうだな、そうするか……

ガシャン、ガシャン……

足音が止まった。どうということだ？

と、次の瞬間、球状の物体が転がってきた。クソッ、トラップ！？
咄嗟にシールドを構え、後方にバックステップ。

キュドーン！

小型の物体から発せられたとは思えない爆風が迫る。
シールドコンディションイエロー。グレネードか！？

「カイ、ハヤト！グレネードを持ってるぞ！注意しろ！！」

『了解！！』『分かってんだよ！！』

近くに岩は……無いか、クソッ。バズーカを放ってくる一番右のザクに向けてビームガンを連射。上手く当たったようだ、ザクが倒れる。が、まだ二機いるんだ！

飛んでくるバズーカ、ステップ直後のためエネルギーが足りない、シールドでガード。

衝撃！コンディションレッド！

相手のザク、防御は脆いようだ、武器の性能はそこのザクより上だ！

こいつら……特殊部隊か何か！？

ヘッドバルカンをばら撒きつつ高速後退。レーダーから離れるが、相手も見えないだろう。

クソッ、こんなに早くシールドが終わるとは……
手近な崖に隠れ、襲撃に備える。

『レア、アムロの発進準備が整ったわ、もう少しよ！』

「了解、アムロ！聴こえるか！？」

『あ、ハイ！レアさん！』

「アムロ、色々思うところはあるだろうが、俺達にはお前の力が必要だ！ブライトに使われるのが嫌なら、俺達……ハッ、愛しのセイラさんを守る為に戦いな！」

『れ、レアさん！！？』

『……レア、貴様、帰ってきたら修正だぞ！』

ブライト艦長がにやりと笑いながら言う。

どうやら、いい感じに落ち着いたみたいだな……っ！

再びグレネードが転がってくる。再び右からだ。左にステップ。さて、どうする……左から回り込むか。

左から回り込むように進む、前方にザクの反応。
よっしゃ、貰った！

前方にステップして飛び出す！

が、ザクはいない。どうということだ!?

次の瞬間、先程とは違う色のグレネードが転がってきた……何イ!?

キュゴツ!

衝撃……は無く、巨大な電撃が発生、EMP……か!?

機体が動かない、駆動部にエラーが発生したようだ。

再起動まで待つしかない。時間は……20秒!

やっばい、クソツ……あーあ、俺、ここで死ぬのか……

通信機から敵の声が聴こえる、混線だ。

『……へっへえゝやっただぜ! 白い奴つてのも存外間抜けだな、デコイに引っかかりやがった!』

『……ニツキ、喜んでるんじゃない、早くその白い奴を倒せ』

デコイ……あの、棒みたいな奴が。クソツタレ、あんなもんで……

二機のザクが迫り、バズーカをこちらに向ける。再起動まであと10秒……だったんだが……

ズキユウウン!

次の瞬間、敵のザクが一機爆発した。

『一つ!』

キュイイイン……

システムグリーン、再起動機動完了……！

あの声は……

「アムロ！」

『お待たせしました、レアさん！』

やれやれ、ヒーローじゃねえか！アムロさんよ！

『し、白い奴が二機！？どうなつてんだ！！』

混線だ……哀れだが、見つかった時点でお前らの負け、だ。

ズキュウウン！

『二つ！！』

敵のザクが倒れた、鮮やか！

「カイ、ハヤト！アムロが来たぞ！そっちはどうだ！？」

『た、助かったあゝ』『遅えぞアムロ！待たせやがって！』

『カイさん、ハヤト！今、援護に行く！』

ガンダムが跳ねるように奔り、朱のビームを連続して煌かせる。

ズキュウウウン！ズキュウウウン！

『三つ！四つ！』

次々と倒れる敵のザク、凄い……これがNT！

ズキュウウウン！

『五つ！！』

「残りは何機だ！？」

『こつちには後三機です、レアさん！』

「聞いたな？アムロ！徹底的に叩くぞ！」

アムロに続くように、ジム改を跳ねるように移動。

恐慌状態のザクに、左側面から増設されたビームサーベルで切りかかる。

ギュイイイイイン！

装甲が焼ききれる音、よしッ！後退！！

大きくバックステップ、直後に爆発！

シールドが無い今、あんな爆発に巻き込まれたらおしまいだ。

ズキュウウウン！

『六つ！！』

『オオッ、レア！一機やったぞ！』

「やるな、カイ！」

アムロの方に注意の向いている最後のザクに同じくビームサーベルで切りかかる。

「お前でエ……最後だー！」

こちらに気付いたザクは、庇うように左手を掲げる、が、こちらはビームサーベルだ！そんなものでは止められない！

ギューイイイインー！！

装甲が焼ききれ、ザクが崩れ落ちた。

『MSは全機ホワイトベースに帰還せよ！』

「ああ？脱出した敵兵もいるようだし、捕まえて尋問でもすればいいんじゃないか？セイラさんよ」

今も、コクピットの前面装甲がパージされ、スタコラサッサと逃げ出す敵MSパイロットが見える。

『ここは一応ジオンの支配地域だからな。先程のように伏兵がいてもかなわん。オデッサ攻略は連邦の他の部隊に任せ、我々は即刻ベルファストに向かうべきだ』

ブライトが通信を繋いできた。なるほど、まあ、俺ら正直アホほど働いてるからねえ、多少は楽してもいいだろ。

『それと、プラナ……』

げ、まさか……

「は、はい……？」

『艦長室に出頭すること。分かったな？』

「り、了解……」

oh...安易に煽り過ぎたようだ……これが、若さゆえの過ちと言っものか……

恋愛最前線の巻（後書き）

無茶な展開？作者もわかってやってます、勘弁してください。やめて石投げないで！作者泣いてる！

やった人は一度はコントローラー投げると評判の、恐怖のガンダムステージでした。

他の、たとえばスパロボなんかで威力1800のビームライフルのガンダムとか見慣れてると、恐怖以外の何者でもないですよ、あのビーム。

ガンダムゲーの中では、軌跡と同じかそれ以上に好きです、ジオフロ。

ちなみに作者のベスト3は戦記、軌跡、ジオフロ。戦記はもちろんPS2版で。

一人称は苦手なので、ブルーとかはあんまりです。ガングリは好きなんですけどね、なんでだろう。

作者はGジェネにジオフロ勢がエイガー以外出なくて毎回憤慨しています。

いいかげん出して下さい。PS3戦記のキャラとかいららないんで。

ということで、割とどうでもいい後書きでした。

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

あの美しく澄んだ海をもう一度大作戦の巻（前書き）

女スパイ潜入！まで

あの美しく澄んだ海をもう一度大作戦の巻

UC 0079 / 11 / 12

アムステルダム近郊、森林地帯。

負傷したリュウは、補給にまわってきた第13独立電撃部隊によって後方に移送されて行った。

その独立電撃部隊ナイトホークスによって運用されている、ウェルデアというミディア輸送機の中央コンテナを二つ横に並べたような外見からわかるように、アホみたいな輸送能力（ペイロード300t超、ミディアの約二倍）によって運ばれてきた修理ブロック・パーツにより、オデッサ前線基地での損傷をほぼ完全に修復したホワイトベース。

補給を終え、そのウェルデアにリュウを乗せて離脱するのを見届けた後、ホワイトベースはベルファスト連邦海軍基地に向かっていた。

遠目から見た限りではえらい美人さんが集まっていた部隊だったが、何故だかあの部隊の人たちからは嫌な感じがしたので近寄らなかった。

どう見てもガキ……少年、な技術仕官がホワイトベースでエンジンブロックの修理を終えてMSデッキに来た時にガンダムを見て驚いていたが、そんな驚くようなものだろうか？

まさか、もう伝説みたいな扱いになってんの？と、戸惑うレアであった。

「オデッサ、もう決着ついたらしいっすね。ずっと後方で錯乱任務をこなしてたんだから、ベルファストに着いたら何か褒美が欲しいですねえ……」

「安心しろ、プラナ。そんな風に恩着せがましく言わなくとも、お前達MSパイロットの昇進は既に決定している」

今、レア達MSパイロットはブリーフィング・ルームに集まっていた。

「昇進ったって、死んで軍事恩賞が貰える量が増えるっただけだろ？ええ？ブライトさんよオ」

「カイさん、そんな言い方は……」
アムロがカイを鎮める。

リュウの離脱に顔を会わせる様に営巣入りが解けたアムロは、リュウに対して自分の勝手を謝り、そしてリュウに一発殴られ……修正を加えられた後、笑って別れていた。

リュウの決死の特攻に何か感じるところがあつたのだろう。あれから、あの時通信機のモニタ越しに見た、人を見下すようなどこか馬鹿にした眼は見なかった。

「で、どういう了見で集められたんです？俺ら」

「ああ、プラナ。知つての通り、今回リュウが離脱し、MSが減りと、戦力低下が著しかったホワイトベースだが、先日の補給で新たにコア・ブースターを受領した。そのパイロットを発表する為だ」

「えー、アリー又さんが乗るんじゃないんすか？」

「いや、ネイズン中尉にはジャブローで新兵器が受領される予定だ。どうやら、オデッサで何か重要な案件があったらしい。

これも、補給の際受領した命令書に記入されていた。今回は、別のパイロットだ。入れ！」

「ハア……？」

アリー又さんが疑問の声をあげたと同時に

カシューツ

ブリーフィングルームの扉が開き、黄色いパイロットスーツを着た女性……セイラさんが入ってきた。

「せ、セイラさん！？」

アムロが驚愕の声をあげ、席から立ち上がる。

たしかに皆驚いているが、アムロの驚きようが大きすぎて動けないようだ。

アムロの方をちらり、と見て、キンと通る声で言った。

「セイラ・マス伍長、オペレーターからコア・ブースターパイロットに転化となりました。以後、よろしく」

ピツと敬礼をして、ヘルメットを外す。

金髪がふわりとゆれ、広がった。美人は何やつても絵になるなあ……

「……あ、ああ。ということで、今回受領したコア・ブースターのパイロットはセイラ・マス伍長が操縦する。では、解散！」

- - - - -

「君達の働きには、感謝の言葉も無い……」

整列したホワイトベース・クルーの前で、地球連邦軍総大将レビルが演説をしていた。

一戦艦クルーに対する、異例とも言える総大将の演説である。

レビル將軍のホワイトベース……NT部隊に対する期待がどれほど大きいのが分かる。といっても、当の本人……まあ、カイやレアだが。は、知ったことではなかった。

UC 0079/11/19

前日、ベルファスト海軍基地に到着したホワイトベースは修理・補給を受けると共に、一時の休息を味わっていた。

ホワイトベースという軍艦から一時的にでも開放されたレア達は、観光がてら、基地前で物売りをしていた少女の家に遊びに来ていた。

最初、娼婦か何かかなーこんな若い子がやってるなんて世も末だなー、と、思っていたレアだったが、どうやら違う……ということが分かり、罪滅ぼしがてら（別にレアは口に出していたわけではなかったが）、少女の案内に付き合い、カイと共に邪魔していたのだった。

「あんたら、えらく気楽についてきたけど、その様子じゃ、軍艦を追いつかれたのかい？」

少女の名は、ミハルと言った。

「ま、そんなところだ」

「……泊まるって、ないんだろ？ウチへ泊まりなよ」

カイが少女、えーと、ミハルでいいや。と、止まる算段をつけている。

レアが絡まないのは、何か引っかけているからだった。

「いいのかい？へへッ、訳ありだな」

「まさか。あんたら軍人だろう？なら、金払いが良いだろうからね。宿代払うなら二、三日ならいいってことさ。弟と妹がいるけど、いいだろ？」

（ミハル……ミハル、うーむ、何かあった……ような？）

「どうしたんだよレア、黙っちまって」

考え事をしていると、カイが話しかけてきた。

「……ン、あ、ああ。泊まるのは俺はかまわねえけど、いいのか？その、野郎二人だぜ。こっち」

「一人も二人も変わらないよ、それに、襲うつもりなら家に入った時点で襲ってるだろ？」

「はー、こっちの女は強いねえ。やれやれ。カイ、俺はいいぜ」

「決まりだな、へへ……」

「決まりだね？それじゃあ、晩御飯の準備をするから、ミリーとジ

ルの相手をしてあげてよ」
言うと、ミハルは奥に引っ込んで行った。

（ミハル、ミハル……うーむ。なんだっけ？海で何かあったような……）

「それにしても、意外だな。レア、お前さんもホワイトベースから抜け出してくるとはね」
考え事を続行していると、カイが話しかけてきた。

ミリーとジルという子供に愛想よく話しかけようとしていたが、無視されていたカイだった。
諦めてこっちに話を振ってきたようだ。

「いや、ホワイトベースを抜けたわけじゃないぜ？一応の目的としては、この街の観光だな」

「一応？」

「艦長は放っておけと言ってたけど、一応ってことで、俺にお前の監視命令だとき。つっても、ホワイトベースがこのベルファストを出るまでだけだな」

「監視、ねえ。ホワイトベースの奴らは、俺がスパイにでも情報を売ると思ってるのかね？」

子供の視線が一瞬鋭くなった気がした。

……へえ……

「あー、ま、艦長の独断だと思うぜ？っていうか、ここ連邦の支配

地域だろ？スパイなんかいないだろ」

「そりゃそうだな！ハハハハッ」

目でカイに合図を送ると、こちらに目で合図を送ってきた。あの籠か？

「ホラ、ご飯できたよ！」

ミハルが入ってきた。小さいパンにスープ、水。あとは果物。そんな感じだ。

「お、メシだメシ！ミハル、コイツはオートミール好きだから、明日の朝食にでもやってくれよ」
カイを指しながら言う。

「勘弁してくれよ……うんざりだ……」
露骨に嫌そうな顔をしながらカイが反論した、

- - -

少し残念な晚餐を終え、俺達五人……といっても、ミリーとジルは黙ってこちらを見ているだけだったが。は、食後の会話を楽しんでいた。

「あんた達の乗ってた軍艦だけどさあ」

「ああ？」

「凄いんだろ？」

カイを見る、少し目を細めた。

「まあなア、新造艦だし。でも、俺としてはあんな形状で空中に浮いてるサラミスやマゼランの方が凄いと思うが……」

サラミス級・マゼラン級共に、大気圏内でも運用可能だった事はレアにとつて衝撃の映像であつた。

実際、サラミスが敵のギャロップを砲撃で破壊している情景をここに来るまでのオデッサ近郊ではよく見たし、逆もよく見た。マゼランも同じだ。

ちなみに、今もベルファストのドックで整備を受けているマゼラン級が何隻かいる。

相変わらずぶっ飛んでいるな、小説版。と、思うレアであつた。

「そうかい？あの細長いのはよく見るんだけどね、脚つきははじめて見たよ」

「船、好きなのか？」

「うん。浜育ちだからね」

「ホワイトベースは船っても、宇宙船艦だからな」
カイが応える。うーむ、こいつは……

「さて、長旅であんたらも疲れてんだろ？毛布持ってくるから、休みなよ」

「いや、まだいいぜ？」

「遠慮することはないよ！」
言つと、ミリーとジルが扉を開き、毛布を取ってこようとしていた。

ミハルも向かう。

「ヘッ、よく仕込んであるよ……」
その隙を窺い、カイがバスケットの中を覗き見ていた。眼が鋭くなる。

目で合図。すると、背中では指鉄砲の形を作った。あーあ。

「ホント、厭だねえ……」

ソファに戻り、そう口から溢す。

全くだなあ、やれやれ。寒い時代だって言ったのは誰だったかな？
ま、とにかくアンタに同意するわ。

と、ミハル達が毛布を持って帰ってきた。

「手間かけるねえ」

「気にしないで」

「ホワイトベースな、夜にはここを出るぜ」
「つてオイ、カイ!？」

驚いてカイを見ると、軽く頷いた。……何か考えがあるのか？

「チツ、カイ。お前……ハッ、正確には2200だ。俺はもう少ししたらここを出るから、朝食の準備はいらねえよ」

カイがニヤリと笑った。ええい、ここで降りるんだし、最後の手向けみたいなもんだ。

俺はアムロと違って、工具箱をプレゼント、なんて出来なかったしな。

やはりというか、ミハルが驚いた顔をして固まっていた。

「ああ？安心しな、一泊分の宿泊費は払うぜ。ところで、毛布くれないのか？」

硬直が解け、俺に毛布を手渡しながら言う。

「……アンタ、なんで、そんな事を？」

「ハア、ミハル、お前、一般人なんだろ？なら、お前が黙つといてくれればいいんだよ。時間を言ったのは、最後の顔合わせになるかもしれないカイに最後の見送りを命令つてところだ。な、カイ？」

「ヘッ……右のエンジンの修理が手間取ってるらしいからな、あそこを狙われたら、ま、明日までは足止めだろうな」

「カイさん……」

戸惑った表情をカイに向けた。

「いいじゃねえか。弟や妹の面倒を見ているあんたの気持ちはよく分かるぜ」

「……カイさん……」

なんかもう泣きそうじゃない、ミハル。あーやだやだ……

- - -

ミハルが出て行って30分ほど、時刻は夜7時を越える。そろそろ、俺もホワイトベースに帰らないとな……
つと、最後にカイに聞いとかないとな。

「で、カイ。お前、本当にホワイトベースを降りるのか？」

寝転がっていたカイがごろりとこちらを向き、片目を開ける。

「じゃあねえやな。軍人なんてお堅いのは性に合わねえんだから…」

…」

「……そうか、ま、本当ならこういう役目はリュウさんなんだろうが、一応、年長ってことで俺のお役目だ。アリー又さんも薄情なこつて」

「ネイズンの姐さんだと問答無用で俺の顔がボコボコだわな」

ワツハツハ、と笑い声があふれる。

「で。ホワイトベースを降りて、何するんだ？それに、えらくミハルを気にかけるじゃねえかよ。一目惚れって奴か？」

カイをおちよくって見たが、意外にも真面目な顔で返答が来た。

「まあ、な。お前とマサキに当てられたのかもな。ま、冗談は置いて、そうだな……アムロから貰った工具もあることだし、電気屋でも開くかねえ……」

「……カイ、お前……」

「レアよ、すまねえな。俺には無理だわ。ホント。悪い」

どうやら、本当にやめてしまう気のようにだ。俺が何を言っても無駄だろう。

カイ自身が考えを変えない限りは。

ウーーーーー！ウーーーーー！

突如、サイレンが鳴り響き、続いて轟音が聴こえてきた。何だ！？

「空襲か!？」

カイが驚き、声をあげる。やはり、気にはなっているようだ。

「クソツタレ、カイ、俺はホワイトベースに戻る。ガキ二人!聞いているか!？」

ビクツ、とミリーとジルの二人が扉の影から出てくる。

「カイ、お前はこの二人を守れ。ミハルが来るまでな。最悪、ホワイトベースにでも逃げ込め!」

「あ、ああ……おい、レア!」

家を飛び出し、ベルファストのホワイトベースの元に走り出そうとして、カイが後ろから声をかけてきた。

「何だ!？」

「……ありがとうよ!」

ヒラヒラと、右手を振って別れた。

- - -

(やれやれ、カッコつけが……)

レアが走って行く。さて、どうするか……

「お姉ちゃん、どこに行った？」

ジルとミリィ……だったか、に、話しかける。

「……す、すぐに帰ってくるよ」「……買い物に行ったの……」
眼が泳いでいる。やれやれ、ジオンに連絡しにでも行ったな？

「ふーん……ホントか？」

「……ほ、本当だよ」

嘘だな。

「ま、信じてやるよ、お前らの言う事はな……」

ズゴォォン！

港の方が一瞬光り、そして、振動。

「海から攻撃してやがるのか……」

家……とはミハルは言ってたが、外はボロボロだ。空き家か何かを
勝手に使っているのだろう。

で、妹と弟を喰わせる為にスパイの真似事、か。泣けるねえ……

「おい、ミリィ、ジル」

「……………」

で、二人は監視。か。全くもって、泣けるねえ……

「パン、旨かったって姉ちゃんに言つといてくれ。これ、御代な」

言って、財布から札を全て渡す。

自己満足だが、何故だか渡さずにはいられなかった。

「それとな、『頑張れよ』って、伝えてくれ」

俯いていたミリイがゆっくりと顔を上げ、話した。

「……………ミリイ……………」

「へ？」

「……………名前……………」

「へッ、ソイツは悪かったな、ミリイ。じゃあな！」

言って、アムロから貰った工具箱と、少ない手荷物を持ち、ミハルの家からホワイトベースに向かって走り出す。

レアにはカッコつけだっと思ったが、俺もなかなかどうして、カッコツケだな、と思った。

-
-
-

軍港の方が、光り、続いて爆発音。そして、黒煙。

「俺にはもう関係ねえんだよな、ドンパチなんざ」

走る、走る。

荷物が重い。

ドッカーン！

赤い炎。燃料か？

「関係ねえよ。ああ。……し、しかしよう。チクシヨウ。なんで今更、ホワイトベースが気になるんだ！？」

『軟弱者！』

金髪の美人さんの罵声と、頬の痛みが蘇る。

……ヘッ。

「ホント、軟弱者かもね」

大きな振動と、黒煙。ビルが崩れたようだ。

「とにかく連中ときたら、手が遅くて見てられねえんだよね……」

流れる汗が服を湿らせ、不快にさせる。

前方から自転車に乗った帽子の男が走ってくる、なんたってこんな所、こんな時間に……？

まあいいか。

「止まれ！！軍の者だ、止まれえ！！」

キキーツと金切り音を鳴らし、自転車が止まる。えらく前時代的な自転車だ。アンテイクか？電動補助すらついていない。
が、走りよりマシなハズだ。

「後で基地にまで取りに来いよ？いいな！？」

自転車を奪うように借りて籠に荷物を入れ、ホワイトベースがある第6ドックへと向かう。

ズギヤツ！ゴウツ！

ミサイルが降り注ぐなか、やっとのことで軍基地まで辿り着く。ホワイトベースまでは目と鼻の先だ。

それにしても、ガンダムとガンタンクの姿が見えない。先程から見えているのは、茶色いジオンの新型と、接近戦を仕掛けているレアのジム改、ヘツタクソなガンキャノン、あーあ、直撃受けちまってやがる。

白い戦闘機……コアブースターだったか？が、ビームを海中に放っている。馬鹿が、そんなことしても水蒸気爆発が海面で起きるだけだ！

と、ホワイトベースのMSデッキに到着した。やれやれ、こんなに汗だくで、必死になって。全く俺のキャラじゃねえ……

「……あるじゃねえか、ガンタンク……」

「あ、カイさん。タンクのメインシャフトの修理がようやく終わっ
たんです。ハヤトさんはキャノンで」

「……しゃあねえな」

ジョブが声をかけてきた。どうやら、今の口ぶりでは俺が出て行った事は知らなかったようだ。
やれやれ、俺が出るしかない……な。

- - - - -

「うわぁーっ！！」

『ハッハハハ！引きちぎってやるぜ！！』

「ハヤト！クソツ、コイツら！海に逃げてんじゃねえよ！クソツタレのチキンどもが！」

戦況は良くない。

海面に対するビーム攻撃は、低精度、低威力になった陸戦型ガンダム転用ビームガンでも、水分子の抵抗を押し切ってしまう程の威力を持つ。

このような高威力のビーム兵器は、ジオンでも研究はされているが、M A や戦艦の主砲、もしくは砲台タイプのS F Sでしか実戦配備はされていない。

また、ジムが装備するビームスプレーガンのように、低威力ながらも連射できるほどの効率を持ったビーム兵器もまた、ジオンには存在しなかった。こういったビーム兵装がジオンに実戦配備されるようになるのは一ヶ月ほど先の事だった。

つまり、水中で発射しても水蒸気爆発を起こさない程度の速度まで減速したビームを放つ兵器は未だ開発されていなかったし、そもそも出来たとしてもそれは少し早い魚雷、しかも低威力のもの。それと同じような価値しか無い。

として、連邦では開発プランすらまともに上がってはいなかったのだった。

その点、ジオンは違い、水中でも使用可能なビーム兵器を試作したりはしていたのだが、それはまた別の話。

とにかく、水中に潜ってはビームをかわし、陸に上がってはミサイ

ルと腹部の拡散ビームを発射してくるゴックは非常にうざったい敵だったのだ。

「しかもツ、かつ……たい！」

海面から飛び上がったゴックに対し、ガンダム用のハイパーバズー力を当てにかかる。

直撃……は、しなかったようだが、それでも近距離で爆発した衝撃は受けたはずだ。それなのに、まるで平気と言わんばかりの余裕の動きで拡散ビームを放ってくる。

後方にバックステップ。幸い、シールドを構えれば殆どダメージが無い程度に威力は衰退する拡散ビームだったが、こうも浴び続ければダメージは蓄積する。

現状、コンディションはイエロー、シールドも同じくイエロー。

「ハヤトツ！クソツ！」

マズい、ハヤトがゴックに組み付かれている。ガンキャノンには近接兵装は無い。というか、ハヤトでは近接戦闘は無理だ。

『これ以上好きにはさせねえぞ！』

「カイ！来たか！」

『カイさん！！レアさん、ハヤト！今行くぞっ！』

カイがポップミサイルでガンキャノンに組み付いたゴックを攻撃する。

破壊はされなかったようだが、ガンキャノンから離れたゴックにバ

ズーカをお見舞いする。

「今だッ！墜ちやがれ！」

腹部拡散ビームを放とうとして硬直、腹部のガードが解かれたゴックにバズーカが直撃した。

ドウッ

一瞬遅れて、爆発！腹部にビーム発射口なんて付けてるからだ、馬鹿が！

バリッバリッ

ヘッドバルカンを放つガンダム、右手にはハンマーを装備し、左手にはシールド。

ハンマーにはあの時の左右の刃だけではなく、登頂にももう一つ大きな刃を追加していた。

「アムロ！敵の新型はえらく硬い、バズーカも殆ど効かない！ハンマーじゃあm」

『ガンダムハンマー！！』

アムロの叫び声が通信機から流れる。

次の瞬間には、ゴックを腹部から粉砕、巨大な爆発が発生した。

(oh...)

『動きの鈍さがお前の命取りだ！！』

（その鈍さは硬さの証拠なんじゃねえの……）

『……フウッ……どうしました、レアさん？』

「ナンデモナイデース！H A H A H A！」

『ど、どうしちゃったんだレア！？』
カイも心配そうな顔をする。珍しい。

「ダイジョーブデース！H A H A H A！」

ヒュゴッ

海からミサイルが飛んできて、ガンダムに直撃した。
ゴックが海面から現れ、着地。

爆炎と共に、吹き飛ぶガンダム。

「……ッ！ど、どうしたッ！？」

持ち直したレア、だんだんと順応してきた。

「アムロ！大丈夫か！？」

『くそっ、もう一機いたのか！？』

「チイツー！！」

バズーカで援護……クソッ、弾切れ！？

『よける、アムロッ！』

通信機から艦長の声……援護砲撃か？

次の瞬間、辺りが暗くなる……どういうことだ？

『うわ~~~~~!!』『おっ、おおっ!』

アムロの声と、誰だ……？混線？

釣られて、上を見る。

ホワイトベースが上空から、ゴックを踏み潰そうと特攻してきた。

(oh...)

ズシーン!!!

ホワイトベースがアムロの横に……正しくは、ゴックに、えーと、何て言うんだ？着陸？もう着陸でいいや。

うん。着陸した。

「YEAR！ナイスランディング！H A H A H A H A H A！」

『ど、どうしちゃったんだ、レアの奴……』

カイの声が聴こえたような気がするが、もうなんかどうでもよくなつたレアであつた。

あの美しく澄んだ海をもう一度大作戦の巻（後書き）

この小説をお読みの皆様はもうお気づきだと思いますが、できるだけシリーズとクロスオーバーさせるように登場人物を動かしています。まあ、ジオン側はさすがにレア（ホワイトベース）が絡まない無理ですが。

加えて、史実・外伝で死んだ人も出来るだけ生き残らせるように調節します。

何故そんな事をするのかって言われると、作者の趣味でもあるのですが、『冒険王ガンダム』の破天荒さならばどんな超展開でも内包できるのではないか？』という実験でもあります。

だって冒険王版ミハルどころかガダムもマチルダもククルス・ドアンも出ないんですし！！ストーリーの水増しに使ってもいいよね！ね！？

元は250ページくらいしかないのにジャブロー過ぎまで冒険王続くんね！？オリジン一冊分以下だしね！？

まあ冗談はさておき、どうかお付き合いいただければ幸いです。

11/04/24 15:26 タイトル誤字修正

作者はこれが始めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです。

大西洋、ピンクに染めての巻（前書き）

大西洋、血に染めてまで

大西洋、ピンクに染めての巻

UC 0079 / 11 / 22

ベルファストを発ったホワイトベースは、一路連邦軍本部であるジヤブローにと進路を執っていた。

ゴツグを踏み潰した際の損傷はほぼ無く、結局ホワイトベースの修理は後部エンジン調整に戸惑っただけで、一日発進が遅れただけ。どんな装甲だよ、と、思わないでもないレアだった。

とにかく、一日伸びた結果手に入った臨時休暇で、御土産を買ったり、買い食いをしたりと全力でつかの間の平穏を楽しんだ後、ある場所である人物を保護して、ベルファストを発ったのだった、

ちなみに今のホワイトベースの戦力は、ガンダム、ガンキャノン、ガンタンク、ジム改、そしてセイラが乗るコア・ブースターである。

ベルファストでのコア・ブースター受領時に『Gファイターって無いの?』と、うっかりポロツとこぼしたレアだったが、その時セイラさんに機能説明をしていた技術者の話によると、コア・ファイターが良好な結果を残した為、ガンダムを含むことにより（運用によってはガンダムのA・上半身パーツは不要だが）超高コスト爆撃機のような物ではないGファイターは計画案のみで消えてしまったとの事。

連邦軍の物量作戦ならば、MSに戦場の主役がシフトしつつある今、そのような超高コスト爆撃機は不要なのだろう。

サブフライトシステム

ジオンのSFSのように、機体の上に乗せて部隊を高速展開する必要は守戦が主な連邦軍には必要無かつたし、逆に攻める場合もオデッサ作戦の時のように包囲・進行作戦の方が確実なのだから。

聴き終わったときは、「ヘー」とボケーっとしていたレアだったが、技術者に「何故そんな立ち消えした兵器の名前を知っているんだ？」と、聞かれ、やべーやべーと思いつつも「オデッサくんだりで補給を受けた時にチラッと聞いたんですよ！」と言って逃げたレアだった。

その話がベルファストにホワイトベース隊への演説に残っていたレビルの耳に届き、巡り巡って最終的に連邦軍高官のスパイ逮捕の契機となり、ホワイトベース隊という事もありニュータイプ関連で戦後色々と目を付けられたりもするのだが、それはまた別の話。

また、これも余談ではあるが、オデッサで新たに確認されたというジオンの新型『スカート付き』三機編成は、数日後に中国江蘇省の連邦軍基地にて起動した連邦軍の新型MSにより破壊された、とだけ言っておこう。

- - -

通路を進んでマサキにでも会いに行こうかな、と、シミュレーター

での訓練を終えたレアは、第二通信室（兼・サブブリーフィングルーム）で蹲っている少女と、カイの後頭部を発見した。

って、あの女の子は……ミハルか……。

まあ、とにかく話しかけるか。

「デデデーン、デデデデーン、シューッ！」

「うおわっ！？な、何だ？レアかよ……」

カイは おどろき とまどっている！

「いやな、なんとなくピンクで甘酸っぱい雰囲気かしたんで来てみれば……なんで此処にミハルがいるんだ？」

現在地は大西洋上空、どうあってもベルファストで空き家を盗み借りていた姉弟の長女がいていい場所ではない。

「あつ、あんた、レアじゃないか！？」

ミハルも おどろき とまどっている！

「よう、ミハル。で、カイよ？なんで此処にミハルがいるんだ？」

問うと、カイは顔を背け俯いた。ふむ……

「わ、私、カイについて行きたかったんだよ！それで……この船に乗ったんだけど」

慌てて俺に言うミハルを手で制し、もう一度カイに問いかける。

「なるほど、いい設定だな。感動的だな。だが無意味だ。……カイ？」

「れ、レアよ……南米で……ジャブローで降ろす。だからよ……！」
カイが顔を上げる……いつもの軽薄そうな目ではなく、小さいが確かに意思が籠っている目だ。

「れ、レア……」

「ミハル、お前も妹と弟を喰わせる為に大変なのも分かる、が、だ。俺はまだ死にたくない。

それにだ、好きな女が乗ってるんだよ、ホワイトベースは」

ミハルの目を見て

「スパイを乗せてたから船が沈んだ……なんてのは、嫌なんだよ俺は」

はつきりと言った。

「レア……」「……」

その空間が、重く、重く沈んでいく。

と、そこにアムロが通りかかった。

「あつ、カイさん、レアさん！……誰です？」

チツ、まずいな。ここは通路だ、人の目もあるか。

「ああ、カイの彼女なんだが、ジャブローで降ろすってんで乗せち

まっただとよ。とにかくだ、乗せちまったもんは仕方ないからブリッジで紹介と行くか。な？」

「こ、恋人さんですか？」「ブーツ！」「え、ええっ！？」

一瞬後、沈黙が降りる。先程とは違い、なんというか、ピンクだ。うーむ、我ながらカオスな状況にしまった……

――――

「ねーねー！なんでまたガキンちよ増えてんの？ねーねー！」

「プラナさんが、ベルファストで敵の攻撃で家が壊れて路頭に迷ってた子達をたまたま見つけて拾ってきたのよ、ね？ミリーちゃん？ジルくん？」

「ホントかよ！じゃあ、おれたちと同じだな！おれ、レッツ！よろしくな！」

「カツだ！よろしく！」「あたいはキツカよ！」

「……ミリー」「ジル。よろしく」

ブリッジに入ると、こちらも更にカオスな状況になっていた。

「な！？じ、ジル！？ミリー！？あんたたち、なんでこんな所に！？」

ミハルがうつたえている。おーおー、端から見るとガチで錯乱する人間って面白いな。

「来たか、プラナ。で、この状況、どう説明する？」

「どうって、どの状況です？託児所？ガキ二人追加？カイの彼女？」

ピシッ！

空気が一瞬凍る。

「……プラナ、歯を喰いしばれ……」

ブライト艦長が静かにマジ切れしている。

今なら鋼鉄の折ですら引きちぎりそうだ、青筋も額に見える。

「あー、じよ、冗談ですよ！やだなあ！ハハハっうごおッ！？」

腹パンである。ああ、膝からクるって本当だったのね……

ぐしゃり、と、レアが潰れた時、後ろは大変なことになっていた。

「あ、あんた達、どうしてここに！？」

ミハルが駆け寄ってきた二人を抱きかかえて、問いかける。

「あの兄ちゃんが、ここにいれば姉ちゃんにあえるって言ってた」

「……家、こわれたから」

言い、ミハルにすがりつきながら泣く二人である。三人組も釣られて泣きだし、ブリッジはさながら保育園でよく起きる幼児の号泣合唱のようだ。

そもそもの原因はレアにある。

先日の戦闘が終わった後、帰ってきたカイに事情を聞いた際に知っ

た、『自転車ですれ違った男』の話を聞いて、ピーン！と思い出したのだ。

『大西洋、血に染めて』を。

思い出すのが遅いと思うかもしれないが、彼の原作知識は知つての通りあやふやだし、加えてこの話は主人公たるアムロ・レイが絡まない。

しかも、転生から17年、もうすぐ18年経ち、最近は戦闘による忙しさ、加えて冒険王に転生したと言うことを知らないレアは、もう既に自身の転生知識をよっぽど衝撃的な内容や有名な機体意外殆ど全て信用しない事にしてしまっていた。

その結果がコレである。

思い出した時点で既に深夜、幸い、明日は半舷だが休暇になる。

ということ、ミハルの家に向かうも、その家は戦闘の余波で瓦礫になってしまっていたし、ミハルの姿も既に無かった。

残っていたのは、呆然として家の基礎部分に座り込むミリーとジルだけであつた。

話を聞くと、姉さん（ミハル）は、仕事に行つてしまつて長い間歸つてこれない。加えて、家に隠してあつた生活費も瓦礫に埋まつてしまつたか、燃えたかで無くなつて途方にくれていたのだつた。

これは、ミハルがスパイとしてホワイトベースに潜入したな？と、当たりをつけ、ミリーとジルを黙つてホワイトベースの自室に保護、その後食事を配りに来たカツレツキツカの三人組に見つかり、ブリッジに連れ出されたのであつた。

やっつてゐることはほぼ誘拐であるが、レア的には姉を救う布石であったので勘弁して欲しいという所だった。

- - -

「……つてことで、二人を拾つて来たつてわけです」

「……それは分かった、緊急時だし、仕方なかったのだろう。まあ、ベルファストに任せればよかったのではないかと思わないでもないが。もう遅い。」

次だ、カイの横の彼女の件について教えてもらおうか」

ブリーフィングルームに移動し、正座をさせられたレアを中心にぐるりと主要メンバーとミハル、ガキ二人が並んでいる。

あまり目に付く場所で言うのもダメだ、と、レアが言い出したためこうなった。

ちなみに、正座は自主的である。

さて、ミハルだ。

今回の俺の暴挙とも言える行動は、後の悲劇を回避する為だ。

何もしなければこの後ミハルによってジオンの追撃部隊に情報が伝わり、攻撃を受けて、最終的にミハルは死ぬ。

これを回避する為に、数日前から頑張つてシナリオを組んだのだ。名付けて『ミハルとカイのらぶちゅっちゅ大作戦』、嫌がらせである。

何もたかが顔見知り程度の相手の為にこんなにしなくても、と思わ

なくも無いが、一宿一飯の礼というか、一番仲が良い（とレアは思っている）カイが悲しみ荒む姿を見るのは嫌だなあ、と思ったからだった。

たまに見る熱血アムロにあてられたのかな？と、少しおかしくなる。

「あー、その少女、ま、カイの彼女なんだが、ジオンのスパイ”だった”んだ」

「……！」

空気が凍る。各員は一斉にミハルを見ていた。対するミハルの顔は硬直し、怯えてしまっている。

カイが庇うように動き、俺に対して文句を言った。

「レア、その、彼女ってのは置いといてだ。スパイってのはどういう事だ？」

知っていて、知らないフリをしている。やれやれ、いつものカイらしからぬ……ってか？

まあ、俺も今回はシリ阿斯……風にやってるが。

「ああ、”元スパイ”だ」

「どういう事だ？」

艦長がこちらを睨む、アリーヌさんも睨んでいる。こえーよ！やめてよ！

「あー、えっとだ、ベルファストを出る前の日、カイが出て行った

日だな。その時、ミハルに言われたんだよ」

ミハルを見る。頼むから、こっちに都合あわせてくれよ……

「『ジオンの奴らにスパイ行為を強要されているんだ、助けてください！』ってな……」

ミハルは……ダメか、何が何だか分からないって顔だ。

「……一体どういうことなんだ、レア!?」

カイが大げさに反応を返した。見ると、軽く頷いた。ナイス判断力イ!

「あー、ミハルは親を戦争で亡くして、その歳で妹と弟を養わないといけなくなっただ、で、最初は身売りすら考えていた。そうだな、ミハル?」

「……う、うん……そうなんだよ……!」

頷く。よしよし。

「で、身売りする事無く運良く……いや、運悪くジオン密偵の手先になっただ。そして、ホワイトベースに乗り込まなければ妹弟を殺す……と言われ、スパイを強要された。そうだったな?」

「あ、ああ……そうさ! ミリーに銃を突きつけられた時はこの世の終わりかと思っただよ……」

「ミハル! なんてこった、そんな事が……! すまない、気付いてやれなくて……」

言って、目元を押さえるカイ。お前、さっきから目を開けっ放しだ

つたる。ナイス演技！

「それで、どうしたんだ……？」

ブライトが鎮痛な面持ちでこちらに問いかける。

「それで、昨日の戦闘さ。結果、ミハルは運良く恋人のカイの所に潜り込めた、が、ジオンの奴らは口封じの為に……ミハルの家を攻撃しやがった……！結果が、あの二人さ……生き残ったのは運が良かったんだ……」

ギリギリと奥歯を噛み締めつつ言う。

「ゆ、許せん……ジオンの悪魔どもめ……！！」

右腕を振り上げ、ジオンに怒りの闘志をぶつけるアムロ。だから誰だよお前……

「運良くベルファストを発つ前に二人を発見できたのは良かった。もう少し遅かったら、二人は殺されてたか、運が良くてもジオンの研究所行きだったろう……」

沈痛な表情で俯き、首を横に振る。

マサキ辺りはもうなんかちよつと泣きそうになってるじゃねえか、ごめんよ……

「よ、良かった……良かったよ、ミリー、ジル……」

二人に抱きつくミハル。ナイス演技！

「……そんな事態になっていたとはな……ジオンめ……三人とも、すまなかったな……」

艦長も暗い表情で三人を見る。他の皆も……いや、アリーヌさんだけ違うな。まあ、黙っててくれるんならいいや。

「でだ、それを知ったミハルは、ジオンのスパイをやめて、連邦に協力することにしたそうだ。今連邦軍の制服を着ているのは、その証拠だそうだ。な？」

「ああ、そうだよ……ジオンに嫌々強要されるなんてもうゴメンだ！」

「その証拠に、ほら、ミハル、通信機を出せ」

ミハルを見ると、俯き、少し後顔を上げた。覚悟を決めたらしい。

「ああ、コレさ」

言って、手首の小型通信機を外した。

セイラが受け取り、艦長に手渡す。

「……なるほど、たしかに通信機だ。大変だったな。もう大丈夫だ

……」

「……ありがとうございます……」

泣きながら、ミハルが言った。

皆、目が赤い。でもアリーヌさんは腕組んでる。

目が合った、ロパクで『チ ョ ッ ト ツ ラ カ セ』

……ハイ……

「でだ、艦長、一つ提案」

「……ン。何だ？ プラナ」

「ジオンはまだ、ミハルをスパイだと思ってる、つまり、今なら……」

「逆にジオンを罠にかけられる……と、いうことが……」

- - -

「ずいぶん上手くやったようじゃないか、ええ？」

アリーヌさんが座って言う。当然、正座である。今後は強制。

「あー、まあ、殆ど事実なんつすよねえ……」

「そうだろうさ、あの三姉弟見てりや分かる。汚いね、レア。真実の混ざった嘘は、傍目じゃ区別つかない」

「まあ。勘弁してやってくださいよ。若さゆえの過ちって奴だ」

「生きるためには仕方なかったんだろうさ……でもね、アタシはスパイってのが大嫌いなんだ。それだけは、覚えておいてくれよ……」

デスクの上の写真を見ながら言う。何かあったようだが、俺が踏み込むべきことじゃないな。

「ま、もう仲間だってんならいい、さ。行きな」

「了解です！」

敬礼をして、アリーヌさんの自室を出る。

「ハッ……アンタ、敬礼似合わないねえ……」

後ろからそんな声をかけられた。知ってるわそんなもん。

- - -

「暗号通信で中国に戻ったって送ったんですって？」

「ああ。我々の進路はジャブローだからな、奴らとわざわざ戦う必要も無いだろう。アムロは不完全燃焼のようだが」

「ま、そうでしょうねえ。アムロ意外と熱いところあるから。しかしまあ、中国とは……あっちはN.Yとアジア制圧に精鋭が集まっているでしょうし、ま、いいザマかな」

「ああ……ところで、ミハル・ラトキエの件だが……」

「昨日はMSシミュレータ、一昨日はオペレーター、今日はメカニックとやってましたが、どうも全部イマイチどころかイマサンって感じです。」

オペレーターは鍛えりやなんとかなるけど、他はどうも……明日は医務の手伝いに回るみたいです。そっちの方が良いかもって感じですよ」

「ああ、いや、そうじゃない。ラトキエの件で思い出したんだが、最初はプラナ、貴様をスパイだと疑っていたんだ。すまなかった」

言っ、頭を下げられた。なるほど、艦長室に呼ばれたのはそういうことか。……って、スパイ！？

「ハアアアア！？なんで俺がスパイなんです！？」

「いや、もう過去の話だ。すまなかった。お前、ジオンの兵器の名称とか妙に詳しかっただろう？それで、補給の際に一応ということ で身元証明取ったんだが、ベルファストで返ってきた回答は完全に白だった」

「あー、なるほど。両親の関係でそういう疑い出てたんですか……まあ、別にいいですよ」

「……そうか。見つかるといいな、両親」

両親、ねえ……こっちに来てから、ちやほやされたのは生まれてすぐだけだったような気がするし、三歳にもなったら道具か空気がみな感じだったしなあ。今でも両親って言ったら前の両親を思い浮かべてしまう。

「……………」

などと思いつつ、返事をしないでいると

「……すまない」

ブライト艦長が、暗い表情で俯いてしまった。

「あー、別にいいですよ。で、終わりです？」

「ああ。ではな、プラナ……いや、レア」

「……了解です、ブライト艦長」

敬礼をして、部屋を出た。

――

「その、未成年なんだから、あの、性行為はダメよ。ああいや、えーと、ダメじゃなくて、避妊しないとダメよ」

「え、あ、は、はい、その、はい……」

「おいレア、説明しろ」

「ああ？なんだよカイ、夫婦用の二人部屋しか空いてなかったから仕方なくカイの自室をそっちに移して、ついでに結婚を前提とした付き合いであるミハルとの相部屋にしてやってくれって進言しただけだろうが」

夫婦用のちよつと広い部屋、俺・カイ・ミハル・ついでにマサキとミリー・ジルが揃っている。

ちなみに、カイがシミュレーターで訓練中にカイの自室にあったものは全部運んであげた。

「ベッド狭いけど、子供二人なら楽に眠れるだろ？」

「ああ。子供ならな、俺はミハルと寝ろってか？いや、そうじゃなくてだな」

「子供が増えたらちよつと狭いかもな。H A H A H A H A !」

「馬鹿野郎!!」

腹パンである、流行ってんのか腹パン？

「グフウ……」

と、カイの耳に口を近付け、小さく内緒話。マサキもいるからだ。

（一応、恋人って事になってんだから我慢しろ……もうすぐでジャブローなんだ、場合によっちゃ、スパイ容疑で投獄ってことになるかもしれないぞ……そうならないように、動いてはいるが……）

（……チツ、お前がそんな設定にしたからだろうが……）

実際、あの時ブリーフィングルームにいた連中には、口外しないようにと口封じをしておいた。

というか、何故かホワイトベースメンバーは割と熱血なので、事情が事情だし黙っておいてくれるだろう。

……アリー又さんは微妙だが。

チラと見ると、ミハルは顔を真っ赤にして俯いているし、さっきから壊れているマサキも顔が赤い。
小学生かお前ら……

「ハア……開いた部屋はどうするんだ？」

「なんか知らんが、追加で補充パイロットが入るらしい。ジャブローか、宇宙に上がってからって話だが」

たぶん、スレッガーだろう。彼に関しては、どうしよう……ビグザムだよなあ……

と、迷い中ではある。

「と、とにかく以上です。困ったことがあったら、声をかけてくださいね」

「はあ、ありがとうございます……？」

二人の話が終わったようだ。

「さて、マサキ。俺らは愛の巣から退散としますか」

「レア、てめえ！」「……！」

マサキの肩を抱いて、ヒラヒラと右手を振りながら部屋から出た。

「そんでマサキ、俺との看護室・愛の巣はどうですかね？」

「マサキさん、ね。……オヤジっばいわよ、レア君……」
呆れた顔で、左手を抓られた。いつてえ！っていうか……

「オヤジ……だと……？」

「そんなにショック受けるんなら、言わないでよレア君……」

マサキの呆れた声が、人気の無い通路に響いたのだった。

大西洋、ピンクに染めての巻（後書き）

作者の都合で投稿が遅れました、申し訳ない。
全て第二次でZなアレが悪いのです。

次はジャブロー、ですが、冒険王版はジャブローの次、宇宙に上がった時点で終了し、その後は冒険王版にあった破天荒さの消えたガンダム？めぐりあい宇宙をそのままぞったコミカライズ作品になっています。

なので、宇宙に上がった時点で一旦作品を区切り、その後は一年戦争終了まで『as』が書く冒険王版ガンダムを原作とためぐりあい宇宙』に移行します。

冒険王版ファンの皆様には誠に申し訳ありませんが、とりあえずそのようにストーリーを続けたいと思います。
といっても、一年戦争末期に突入なので、そう長くはありませんが。

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです

ジャブローの邂逅 読めないの巻（前書き）

幕間、もしくはLEGACY。

ジャブローの邂逅 読めないの巻

UC0079/11/28

「やれやれ、それにしても慣れないな。コロニーとはまた違う閉塞感がある。暑いし……」

「仕方ないさ。この上は熱帯のジャングル、着いて一日で慣れる奴なんてそういないさ」

アリーヌさんとダラダラとホワイトベースのMSデッキにてダベっているレア。横でぐったりしているハヤト。

昨日ジャブローに到着、ジャングルと蝶の群れに目を奪われはしたが、地下ドックに入ってから是一切そういった景色は見えず、延々と暗い超巨大な空洞と、機械音、鋼鉄の建築物、人工光源があるだけだった。

最初はものめずらしいが、そんな景色一日も見れば飽きる。

入港時、アムロとレアが若干健康調査で手間取った以外はスムーズに入り、今日は各人員の昇格と新機体の配属が行われる日だった。

だった、というのは、あっさりと各人員の昇格は行われ、変わった物は制服に付く階級証の星の数だけ。

ここで簡単にホワイトベーススクールの昇格具合を見ると

アムロ曹長 少尉
レア軍曹 小尉
カイ伍長 准尉
ハヤト伍長 曹長
セイラ軍曹 准尉
フラウ二等兵 上等兵
マサキ軍曹 准尉

となる、加えて、ブライトが大尉となる。ミライは変わらず少尉のまま。

二ヶ月弱で信じられないほどの大出世である、戦死したわけでもないのに。
ハヤトに覇気が無い理由が透けて見える気がするが、気にしてはいけない。

今は、新機体が送られて来るのを待っているのである。

ちなみに、新機体が必要なのはレアとアリーヌとハヤトであり、これによってマチルダ・アジャンとウッディ・マルデンの結婚式……もう時間的には結婚式始まっているから、マチルダ・マルデンなのか？……には、行けなかった。

そのせいでハヤトは沈んでしまっている。たぶん。

レアにはジム改があるじゃないかと、思うかもしれないが、アレは所詮ジムEの現地改修機体でしかなく、ホワイトベースがドックに入港してからすぐに運ばれて行ってしまっていた。

アリーヌは言わずもがな、である。

ハヤトの場合は状況が違い、宇宙空間に対応できない（設置面があれば活動できるが、月面や基地防衛でしか動けない）ガンタンクからガンキャノンへの転換待ちである。

「まあ、元気出せよハヤト。ほら、アリーヌさんっていう美人と一緒だぞ」

「……ハア……」

「ほう、アタシが美人じゃないって言いたいんだね？ハヤト」

「……ハア……」

「あー、こりゃ、重症だな……」

と、大型のサムスン・トレーラーが二台こちらに向かってくる。ん？二台？

「あの赤いのは、ガンキャノンだね。白いのは……どっちだ？」

「さあ？」

俺かな？アリーヌさんが足つきに乗るのはだいぶ違和感あるし。いや、シミュレーターではジム改に乗ったりもしてたけど……

ゴゴゴゴ……ギイッ

と、その巨大なトレーラーが足を止める。中から青い作業服の褐色の美人姉さんが出てきて、こちらに駆け寄ってきた。

「サラブレッド隊所属メカニック、アニー・ブレッジ上等兵であります！アリーヌ・ネイズン技術中尉はおられますでしょうか？」

「ああ、私だ」

「ハッ！A-4情報基地にて召集がかかっております。後部デッキにエレカを積んでおりますので、そちらでお向かいください」

「ハア？お偉いさんが私になんの用があるってんだ？……あいよ。ご苦労」

「アリーヌさんがまともな敬礼してんのひっさびさに見ましたよ、俺」

ドガッ

また腹部だ、しかも蹴り。流行ってんだな？

そのまま立ち上がり、さっさとエレカの方に行ってしまった。

「は、はあ……たしかに、取り次ぎました。ええと、あなたがレア・プラナ少尉ですね？」

「あー、ええと、俺っすね、素の喋りでいいっすよ、たぶん俺の方が年下だし」

「はあ……」

「そんで、何の用ですかね？」

「ああ、えーと、横の方はハヤト・コバヤシ曹長ですね？」

「……ハア……」

「コイツ今はこんな感じなんで、放っておいてやってください」

「え、ええ。コバヤシ曹長にはRX-77-2C、ガンキャノンが受領されます。で、次にあなたなんだけど、RX-78-6、ガンダムマドロック」

「おおっ！ついに俺もガンダムに乗るのか！」

よっしゃあ！よく考えたら、ガンタンク・ガンキャノン・強襲ガンタンク・ジムEと乗り換えて、5機目だな。

こんな短期間でポンポン乗り換えてる奴って、そーいじゃないかないか？

「いや、続きがあつて、マドロックタイプが配属される予定だったんだけど、あなたの戦闘データを見た上が、変えたのよ。あなたが乗るのは、ジムになるわ」

What?

「じ、ジム……？またかよ……？」

「え、ええ。……と言っても、RGM-79GS ジム・コマンドタイプの宇宙戦仕様機。その先行生産型、よ。文字にすると『後期生産型ジム宇宙戦仕様先行生産型』、ね。

私も以前MS特殊部隊第3小隊にいた時散々無茶な戦闘データは見たつもりだけど、まさかガンタンクで特攻をかます人なんて見たこと無いわ」

「ま、まさか……アレやったから、マドロックは渡せないって事か……？」

「それはちよつと分からないけど、そうね、私なら貴重なガンダムタイプを特攻趣味に渡す勇氣は無い……かな……」

oh...なんてこつたい。

というか、機体は吹っ飛んでるから、ホワイトベースの映像データからバレたのかな……

「……マジかよ……」

頂垂れる若者二人の完成である。

「ええと、いい？続けるよ？ガンキャノンなんだけど、Cタイプつてあるように、脚部にハンドグレネイド・ポケットが追加されたわ。まあ、それ以外は2タイプとほぼ同じ」

「……ハア……」

「つ、次にRGM-79GS、長いからジム・コマンドでいいね？コイツは、宇宙戦仕様だから地上での動作はあまりよろしくないから注意ね。といっても、もうすぐ宇宙に上がるみたいだけど」

なんとか立ち直りプレビッグ上等兵を見ると、キラキラとした目で説明している。

生粋のメカニックマンって感じかな？

「装備としては、そうね、貴方が使っていたジムE改修タイプ、ア

レと殆ど同じね。あのジムE、凄く評判良かったみたいよ？なんでも、サーベルも付いてないこんな突貫品で、よく生き残ってきたなとか何とか」

「褒めてんのかソレ……」

「違うのは、ビームサーベルがバックパックに最初から付属している所かな？RX-78-2 ガンダムタイプのハイパー・バズーカを運用していたみたいだけど、そちらは今オミットされているわ。まあ、コレはちょいっと弄ればすぐ解決ね。あとは、そうね……シールドの形状が若干変わるってるから注意が必要ね」

「……あいよ。まあ、シミュレーターでおいおい慣れるさ。で、話が変わるが、サラブレット隊ってのは？」

「貴方達が乗ってるペガサス級、その、系列艦であるサラブレッド級強襲揚陸艦、SCVA-72 サラブレッドに乗るんだよ！で、丁度この機体を送りに行くってんで私が来たって事」

バチコーン と、擬音が出そうなウィンクをして、そんな事を言った。

この人、マジモンや……！

ん？サラブレッド……？サラブレッド、サラブレッド。うーん、どこかで聞いたような……？

「……もしかして、そっちの艦にもあるの？ガンダム」

「あるよ、4号機と5号機！」

良くぞ聞いてくれました、と言わんばかりの満面の笑みである。

へー、ほー、ふーん。アレだね、閃光なんちゃらだね。
うつすらと記憶にあるぞ。正直言っただけ内容は全く覚えてないが。

「今そのサラブレッドに行ったら、シミュレーターで乗れる？」

「普通だったなら軍事機密が云々で無理だと思うけど、ホワイトベースはガンダム扱ってるから大丈夫だと思うよ、シミュレーターで乗ったことあるんでしょう？2タイプに」

「ああ。じゃ、行きますか」

「……へっ？」

「だから、サラブレッドのシミュレーターに」

- - - - -

ドンッ

シミュレーションルームに入ろうとして、男とぶつかった。

「チッ！……すまねえな」

「おい、フォルド！クソッ、すまん。エイガー少尉、邪魔してすまなかった。俺達は艦に戻るよ」

「いえ、こちらこそ口がすぎました……」

言って、二人とも去って行ってしまった。

「……えーと、今のは？」

「ああ、彼らはサラブレット隊のMSパイロットだよ。ええと？」

「あー、ホワイトベース隊のレア・プラナ少尉であります」
ピッ　と敬礼をする。

「君があホワイトベースの……ブランリヴァル隊のエイガー少尉だ」

敬礼を返される。

ホワイトベースではあまりというかまず滅多に見ない光景なので、少し物珍しい目で見てしまった。

「……『あの』ってのは？」

「ん？ああ、アジアで後方錯乱作戦をやっていた時、ジャパンで随分暴れていたらしいじゃないか。それに……
君達は、あの狼の部隊を退けたらしいな……」

狼？……そんなのいたっけ？

………うーむ、わからん。まあいいか。

「あー、そうっすね。ところで、ガンダム4号機と5号機のシミュレータはどこですかね？」

若干迷子になっているレアである。

連れてきてもらったブレビッグ上等兵は作業があるらしく何処かに行ってしまった。

ということ、仕方なくうろつろとしている所で『シミュレータールーム』の文字を見つけ、ホイホイとやってきたのだ。

「4号機と5号機は残念ながらここではないよ、が、6号機なら乗れる。乗ってみるか？」

「えっ！？マジでいいの？ヒヤッホー！」

「ラッキー！と喜んでいるレアだったが、彼が乗る予定だったMSである事を後日思い出し、また、その時にエドガーの素性も思い出して、一言文句言っておけばよかったと後悔するのだった。」

「ああ、先程の設定のままで悪いが、1G下での市街地戦だ」

「OK OK、乗ります乗らせていただきます！」

「あ、ああ……」

顔が若干引きつっている、なんでだ？まあいいや。ヒヤッホー！

- - - - -

「システム、通常モードに移行します」

『先程のマニュアルを見ても分かると思うが、この機体は未完成だ。通常なら、脚部は敵のドム・タイプのようにホバー稼動になる。』

『加えて、重火力ではあるが肩部ビームキャノンはいまだに冷却システムに問題があり性能も不十分だ。』

『あとは……そうだな、ビームサーベルはビームキャノンの横に横向きに設置されている。』

『これによりサーベル取り出し速度が短縮されているが、ジムに慣れていたんなら勝手の違いに戸惑うかもな』

正面モニターが起動、ビルが立ち並ぶ市街地が映し出される。

通常、このような地形で戦うことは滅多にないのだが、アジア地方でのジオンによるゲリラ的戦法に悩まされた連邦軍はこういった市街地戦でのシミュレーターを多く行うようになっていた。

ステータス・スペックを見るに、現在のマドロックは80t超、ビームサーベルのみのガンダム約二倍の重量だ。

出力推力共にこちらのマドロックの方が上だが、こつも重くては宇宙空間はともかく地上ではその推力は生かせないだろう。

（あー、でも、そうか、脚部がホバータイプになるのか。なら、だいぶ勝手は変わるか？）

起動完了、システム・オールグリーン。

装備はフル状態、ヘッドバルカンにビームライフル、両腕部には四連装グレネードランチャー。

左腕部にはシールドを装備。加えて、両肩部にはビームキャノン。横にはサーベルをマウント。

一体何が始まるんです？と聞きたくなるような超重装備だ。

「なるほどね……ウチのガンダムとは完全に別物だな、どちらかというとガンキャノンに近い……かな？パワーはダンチだけど」

『マドロックは元々ジムタイプのテストヘッドだったからな、コイツから今のジムシリーズのバリエーションが生まれているんだ』
少し誇らしげに言うエイガーだった。

「さて、そんじゃちょっと動かしてみますかね……」

言って、いつものように前進開始……

って、なんだコレ？妙な感覚だな……ジムよりは明らかに早いが、ガンダム感覚で乗ると遅すぎる。

「……ひどいな、コレ……」

『……どういうことだ？』

やっばい、口に出していたようだ。エイガーが睨みながら言う。
なんなんだジャブローは？メカニック教信者の集まりなのか？

「あーいや、なんというか、動きが遅いんですよ。遅い……うーん、粘りついているというか、ワンテンポ遅れるというか」

『それは、君達のガンダムの方がマドロックより勝っている、という事か？』

「いや、それは違いますね。マドロックは中遠距離での砲戦MSでしょう？この感じだと。キャノンに乗ってたから分かりますけど。その砲戦装備がガンダムの持ち味を殺してるっつか、うーん……」

『……そうか、一旦止める。そのまま待機してくれ』

「了解です」

ありやー、ちよつと言い過ぎたかな？怒らせ……うん？この顔はちよつと違うか？

モニターがブルー・アウトし、システム待機状態に移行、しばらくして、再起動……ッ！？

脚部にフロート・パーツが追加され、ホバー機動が可能になってい

た。

「オイオイオイ！？良いんつか、コレ。完成系っていつか、おもいつきり機密でしょ？」

ホバーになる予定である、と、言うのと、実際にホバー稼動状態の機体に乗るのでは全く違う。

ニヤリ、とエイガーが笑う。ああつ、ハメられたな！？

『いやいや、”たまたま”操作ミスで”たまたま”マドロックの脚部がフロートタイプのもののデータを”たまたま”読み込んでしまっただけだ』

「ねえよ！！あー、クソツタレ。知りませんからね、俺！」

既に起動シークエンスは始まっている、メインモニター、システム・オールグリーン。脚部フロートパーツ出力安定。マドロック、起動。

「システム、通常モードに移行します」

未だ実機は未完成のまま、ペガサス級5番艦で眠るマドロック。その完成形が、シミュレーターに降り立ったのだった。

「ハアア……行きますよ？」

『ああ、頼む。もう良いと思ったら言ってくれ、戦闘シミュレーションに移行する』

やれやれ、乗って数時間なのにそんな簡単に乗りこなせるわけないだろ……

レアは悪態をついているが、ジム・シリーズからなる操縦システムの統一はMSパイロットの転換作業における利便性の高さを十二分に発揮していた。

だから、レアもこんなに短時間でマドロックに乗れているのだ。

ジオンなら、機体ごとに操作シークエンスどころか操縦桿ですら全くの別物なので、旧式の機体に慣れた兵士が新型を乗りこなせない、ということがよく起きている。

ジオンも統合計画で操作性の統一が図られ、段々と機種転換も楽になっではいるが焼け石に水であった。

キュイイイン

独特な、掃除機の吸い込むような音がしてマドロックが前進を始める。

無論、先程のように徒歩移動ではなく、脚部のスリットが開き、ホバーでの移動である。

「うおおっ……」

感嘆を漏らす、全く揺れを感じないのだ。

『どうだ？マドロックの調子は』

「なるほど、こりゃいい！移動時の上下の揺れが全く無いってのは慣れるまで大変だろうが……そうだなあ、MS適正の無かった奴でも、コイツなら乗れるかもな」

ギユイイツ！と唸りをあげて、背部スラスタを吹かし、地面を蹴って加速。ジム改に乗っていた時とは全く別物だ。

ホバーで浮き、背部のスラスタで加速といっても、ようは氷の上で扇風機を回しているようなもので、加速は遅い。が、その氷を蹴

ってやればッ！

「イイイイヤッホッ！！」

ありえないほどの急加速！しかも、スラスターを吹かせば吹かした
だけ加速は止まらない！

「オオオツ、ラアッ！」

そのままビームサーベルを取り出し、擬似的に空中に浮かんでいる
丸い玉を右に擦り抜けざまに切る。

「イヨオツシ、次イ！」

右に回転しつつ、そのまま次のターゲットに接近。
その遠心力を利用し、タイミングをあわせ……

「……突き刺すツッ！」

シールドを正面のデコイに突き刺した。そのままデコイは砕け、奥
のビルにシールドごと左腕が突き刺さる。

「ごっきげんだねえ！マドロック！！エイガー少尉、戦闘モード、
いいぜ！」

『……は？あ、ああ。えーと、ゴホン。戦闘モードに移行するぞ』
一発も撃ってないけど、良いのか？と、思うエイガーであった。

「おつよー！」

（やっぱーい楽しいー！）

彼の頭の中には両肩部のビームキャノンなど消え去っていた。

- - -

「システム、戦闘モードに移行」

舞台は先程と同じ、市街地戦。敵はザク・グフ混成部隊、数は不明。スコアによりドム（この時点でドムの詳細なデータは出揃っていないので、擬似的にホバー移動する硬いザクにドムの映像を重ねたモノ）が追加される、とのこと。ゲーセンかよ。

『タイムリミットは00:20:00、補給は無し。コクピット破壊までシミュレーターは続行、ま、設定はさっきと同じだ』

「あいあい」

言いつつ、姿勢を落として加速する。現在地は作戦マップ南西、一応こういったシミュレーションのパターンでは、三機編成の分隊がある程度離れた箇所 PON、PON といえるだけ。実際の戦闘ではまず無い状況なのだが。

そんな教本通りの戦法なんてやってるのは連邦か、ジオンの新兵隊か、あるいは逆に超ベテランのジオンエース隊だけだ。前者なら良いカモだが、後者ならガン逃げして仲間と挟撃をかけるしかない。彼は既に連邦軍内部での扱いはエースパイロットではあるが（でなければこんな短期間で少尉まで登りつめたりは出来ない、レアはどうとも思っていないが）、それも仲間がいてこそだった。

（北進、次いで高地である東部に進軍…… ってのが定石かな？）

キューイインツ！と甲高いスラスター音を響かせて進むマドロック。
アラート！右前方約2000から反応。ザクタイプのようだ。

いつものジム改ならジャンプして上空から奇襲なんだけど、今回は
マドロックを有効活用させてもらうぜえッ！

そのまま加速、右を向き、右肩部のスラスターで高速平行移動を
ける。

マドロックの独特なスラスター音と脚部のホバー音でバレバレであ
ったようで、敵ザク三機編隊が陣形を組んでマシンガンやバズーカ
を放つ。

が、平行移動しつつシールドを構えて近付いているので、途中のビ
ルや家に当たり、運悪くマドロックに当たる弾もシールドで無効化
されていた。

近付く…… 4、3、2……

「オラアッ！」

シールドの構えを解き、すれ違いさまに両肩ビームキャノンを放つ。
カキウウン！と、若干間抜けな音と共に朱色のビームが放たれ、ザ
ク一機に直撃、もう一機も右腕が吹き飛んでいた。 って！？

「オイイ！？エイガー少尉！一発撃っただけで反応炉の出力低下と
冷却システムがエラー起こしてんですけど……！」

『ああ、マドロックは未だ未完成だからな。宇宙での決戦にはあわ
せるさ』

キッ！

いや、カッコつけられても困る。

「チツ、クソツタレが。撃てねえんじやただのデッドウェイトじゃねえか……」

『何か言ったか？』

「イエエ、ナニモ」

右方向にザク二機、一機は死に体だが。が、残っているのに言い争いをしている場合ではない。

一旦停止し、再度突撃、ビルを挟んでジャンプ！

「おっちろー！おっちろー！」

両腕部のグレネードランチャーを連射。ドウツ！と音を上げ二機とも吹き飛んだ。

「次イツ！」

左方向距離3400、センサーもマドロックの方が若干性能は上のようだ。

グフ・ザク混合編隊。テンプレだなあ……

キュイイッ！と姿勢を下げ、進行。

しかしこうなると困ったのはレアだった、彼の戦闘スタイルは弾幕

によるゴリ押しと、高速接近による奇襲格闘が主であり、マドロツクは中長距離戦用の支援攻撃機である。真逆だ。

いや、中距離攻撃支援機であるガンキャノンのB装備は相性が悪くなかったのだが、マドロツクにはそういった面制圧火気は無い。どちらかという狙撃戦の装備だった。

コレは俺じゃなくてカイ向きの機体だな、と、思うレアだった。

（つてことはだ、肩のキャノンはパワーダウンするから封印だろ？両腕のグレネードもさっきので使っちゃった。ビームライフルは、うーむ、マニュアル読んだ限りだと、ビームライフルのパワーダウンを補助する為に両肩のビームキャノンが付いてるみたいなんだよなあ……）

思いつつも、既に敵は近い。牽制としてシールドを構えつつ、ビームライフルを放つ。

ドオウツ！ドオウツ！と、大仰な発射音で朱のビームが飛んで行くが、当たらないし、たかが二発で熱量が限界値に迫っている。

見たところ威力はとんでもないようで、ビルを貫通して地面を焼いているが、当たらなければどうと言うことも無い。しかも、とてもじゃないが連射なんて無理だ。

（やっぱりな……クソツタレが。仕方ない、さっきの回転アタック行くか！）

ビームライフルを腰部にマウント、サーベルを右手に持ちビルを挟んで突っ込む！

大きく地面を蹴りジャンプ！50平方m程の空き地に二機まとまっ

ているようだ。

胸部スラスターを吹かし、空中でバックステップするように後退。前方向に大きなG、が、耐える。

一瞬遅れて前方に迎撃の弾幕。危なかった！

そのままビルの向こう側、ビルを背にして前に二機がいるような位置に着地、ホバー出力と両肩部スラスターを右回転方向に最大で吹かしつつ、ビルをツ……蹴る！！

「オオオオオッラア！！」

ゴシャアッ！と音を立て、ビルの壁面が吹き飛ぶ。

ギユアアアッ！と異音をあげながら、回転する独楽のように一機目のザクに対して右に腹を薙ぎ、続けて二機目のザクを回転の勢いで逆手で突き刺すように切りツ……抜ける！あと一機！

「ッすわっ！？」

残りのグフがこちらに向けて肩に担いだバズーカを撃ち込んでくるのを間一髪しゃがみこむようにして避ける！

「グフならアッ！！」

回転をやめ、左足を大きく踏み込む。

右回転ひッねッリイイイ！

一瞬完全にグフに背を向けるような形になるが、シミュレーターのAIでは対応不可能な動きだ。

そのまま回転、機体が前になると同時に下方に向かって背部スラスターを全開、胴体部分を横薙ぎに切り抜ける。

「バズーカなんぞ使ってんじゃねエッ!!」

一瞬後、三機が同時に爆発。

どこの時代劇だよ、という映像がエイガーのモニターには映し出されていったのだった。

「ハアツ、ハアツ……や、やったか……？」

機体各部が悲鳴を上げている。脚部のホバーユニットは左脚が死んでいるし、その軸足となった左脚の間接部のステータスもレッドだ。一発も直撃受けてないのに。

ドウツ!

振動、次の瞬間、モニターがブラックアウト。

「搭乗者死亡。システム、通常モードに移行します」

「……ええ……？」

『やれやれ……スコアが一定以上ならドムタイプが出るって言うただろう?』

心底あきれた、というような表情でエイガー少尉が首を振り、モニターを操作する。

ブラックアウトしていたメインモニターが先程の戦闘を三人称で捉えた映像に切り替わる。

ジャンプ、回転、撃破、ジャンプ、回転、撃破。

「うーむ、我ながら美しい」

爆発。直立状態に移行。

数十秒後ドムが現れ、後方からバズーカを打ち込む。

哀れ、マドロックの腹部に直撃。ついでに腰部にマウントしていた
ビームライフルのE C A Pにも誘引爆発、ピンクの光りと共に吹き
飛ぶマドロック。

「……ああ、俺が『やったか』って言ったからだな……恐ろしいな
フラグって……」

『フラグ……？』

「あー、いや、なんでもありません。はい……」

ジャブローの邂逅 読めないの巻（後書き）

さすがはたかが旧ザク一機に破壊されるガンダムですね（棒

マドロックかつこいいよマドロック、ホバー移動ですぜ兄さん！？

ジャブローは外伝作品が多く絡み過ぎで、どことどのタイミングで絡ませるかが大変です。

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです

ジャブローでレアの常識がまた散る！の巻（前書き）

ジャブローに散る！まで

ジャブローでレアの常識がまた散る！の巻

開けて次の日、早朝。といっても時差の関係でレアの中体内時計では深夜。

MSパイロットの詰め所の扉が開く。

「おー、お帰りアリーヌさん、朝帰りじゃーん！どこ行ってたの？」

シミュレーターでのマドロックの試乗を終え、エイガー少尉に帰りを教えてもらって帰った、というか、帰りにエレカで送ってもらった。

やはり、その時もホワイトベースを興味深そうにエイガーが見ていたが、メカ好きには何か思う所があるのだろうか？

WBに帰還後、結婚式から同じく帰ってきていたカイらに代わりにジム・コマンド受領をもらっていた事をわび、一通りの装備確認・機体の動作テストを行った後シミュレーターでならし運転。

数時間前にはコクピットに座つての実機コクピットでのシミュレーター。

それも終わった今は、軍規で決まっている摘め所待機をしているレアだった。

と言っても、彼は未だに正規軍人であるという意識は低く、椅子に腰掛けテーブルにブーツのまま足を引っ掛ける、という、どう見ても緊急発進できるような状態ではなかったが。

そのお陰でアリーヌの帰宅をいち早く察知出来たという事である。

「私は大尉だよ」

「はあ？」

顔を上げると、様子がおかしい。目元が赤いし、なんというか、憑き物が落ちたというか。

「私のホワイトベースへの出向理由、『軍機情報漏洩幫助罪により終身刑』ってのは、聞いてたね？それ、無くなっただってさ？ふふふ……」

うーむ、コレはちょっとシリアスな感じだな？
真面目なプラナ君モードで行くぞ、うん。

「アリーヌさん、その、どうして大尉なんです？あーいや、悪い意味じゃなくて、その……」

フ、と笑って

「クライド・ベタニー特務大尉」

「は？」

「二重スパイ、だったんだって、さ。ふふ、あはは。ああ、おかしい……」

「……………冤罪、証明されたんですか？」

目元をぐしぐしと手の甲で拭い、顔を上げた。うつ、いつものキツさが無い分、素の美人の顔が出てきている。

危険だ！俺のハートが！

「………… RTX-440、陸戦強襲型ガンタンク。アンタがブツ壊した機体、アレ、なんで RTX、トライアルのまま、戦場に出たか知

っているかい？」

「ふむ、なんだろ。一番ありそうなのは……足付きにMS開発がシフトしてるとか？」

実際、無限軌道を持つ戦車タイプの機体は一年戦争以降殆ど開発されていない。

完全に戦車タイプの機体ではなく、MS形態に変形できる機体だったり、タンクだと言っても戦車としてではなく単にローコストで高速展開できるから無限軌道を採用している機体だったりする程度だが、まあコレは今関係無い。

「『クライド・ベタニー技術大尉がRTX-440の技術流出を行った上にジオンへ逃亡したため、以降の開発は中止された』、さ。アレは、その廃棄処分みたいなモンさ」

……息が、詰まる。

「当時彼と付き合っていた私は、その煽りを喰らって投獄。そりゃ、恨みの一つも持つだろう？」

「……」

……何と言えはいいのだろうか？お疲れ様？……違うか。

「オデッサの情報を流してた、らしい。ハッ。お陰で、連邦軍は無事にオデッサを制圧できたってワケさ」

「……ええ、と」

何か言おうとして、手で制された。

「で、私には口封じの昇格と、刑の抹消。そもそも『スパイなんていなかった』から、スネに傷もつかないってさ……。以上、終わり。終了!」

笑顔で言う。

「……あー、その、特務大尉さんには、その……会ったんです?」

「彼の口から言われたよ。」今まですまなかった”ってね」

「……それで?」

「ぶん殴ってやった」

フ、は、はっはっはっ

「ハッハハハハハ! そりゃあ、効いたでしょうね! アリー又さんの蹴りですらあの威力だ!」

「アッハッハッハ! 言うねえ、レア? もう一回喰らいたいかい?」

やれやれ、やっといつもの空気になった。かな?

「嫌ですよ、マジで痛いし。……で、アリー又さん……えーと、技術大尉?」

「うえっ、アンタに言われると鳥肌が立つよ! アリー又さんでいい何だい?」

ひらひらと手を振る。うむ、いつもの様子に戻ったな。

「ああ、で、アリーヌさん。割とマジメな話なんだけど、ホワイトベースへの出向理由無くなったじゃん？……で、さ」

「アタシはホワイトベースの技術大尉兼整備主任兼MSパイロット、だろ？」

ニヤリ、と笑いながら言う。

「……ハッ、やれやれ。やっとアリーヌさんの鬼整備地獄から解放されると思ったんだけどなあ」

「言うねエレア？ええ？」

うりうり、と、頭をグリグリとやられる。oh胸が。じゃねえよ、俺にはマサキが！

カシューツ！と、音を立て、扉が開く。

カイと目が合った。

「……………」

沈黙が場を支配した。

と、カイが再起動。とんでもない事を言い放った。

「……………マサキと二股かよ、さすがに歳が10も上を狙うとは思わなかったゲボオツ！？」

アリーヌさんの蹴りが、カイの鳩尾を正確に貫いていた。

「ちょっとお話な？カイ。27は言いすぎだろ？な？」

カイの頭を掴み、引き摺りながら待機ルームを出て行くアリーヌだった。

「ゲエツ、い、いや、二十はとぐえあ！」「目だ！耳だ！鼻！」

数時間後、光の灯らない目で『ネイズン技術大尉ハジユウナナサイダヨ』と繰り返すカイが朝食を誘いに来たミハルにより自室にて発見されたという。

- - -

UC 0079/11/30

「……それで、これが噂の新兵器なんです？」

眼鏡の連邦軍技術仕官、エーと、名前なんだったつけ？オッサンの名前覚えるの苦手なんだよなあ……に、話しかける。

「ええ、新兵器というより、貴方の戦闘データから判断して、貴方も見たことがあるとは思いますが、ジオン軍のアジア方面軍が主に使用しているショットガン。あれのビーム版です」

「見たことあるっていうか、実際に相對してますがな……」

「それは結構、ならば、運用法も分かりますね？」

「そりゃ、分かりますけどねえ……」

なんだ？『お前は機体を粗末に扱い過ぎだからショットガン持つて近接特攻KAMIKAZEしてこい』ってか？はやかぜ的なアレか？

「何かご不満が？」

「……いや、不満っていうか……」

どう見ても、ビームガンの砲身部分に四角い箱つけたただけだよなあ

……

ここでビームライフルについて非常に簡単に、ミノフスキー博士にぶん殴られる覚悟で説明すると、

メガ粒子という重金属雲を超高熱で圧縮して放出する水鉄砲のようなものである。

ガンダムのビームライフルはこのメガ粒子をECAPに集めて暖め、内部の筒が電気を纏った砲身で形を整えて射出しているモノ、と、覚えてもらえればいい。

ガンダム専用と俗に言われるXBR-Mタイプのビームライフルが戦艦級の超威力を誇るのは、この圧縮率が異様に高いからだし（だから弾もすぐ無くなる）、ガンキャノンのXBR-Lタイプのビームライフルが省電力化の遅れでガンキャノンしか装備できなかったのは、電気を纏う筒部分に無駄に強大な電力を消費していたからだ（だからガンダムタイプよりも射程が長い）。

変わって、ビームガン……つまりは砲身をカットした陸戦型ガンダム用ビームライフル。

このビームガンの砲身を短く・太くした場合どうなるだろうか？

そう、ビーム・ショットガンの完成だ。

ビーム・ショット・ガンじゃないぞ？ビーム・ショットガンだ。全然ショットガンじゃねえじゃん、とか、ただの集弾性の良くなったドムの腹部拡散ビーム砲じゃん、とか言うなよ？

といっても、もちろん問題がある。それも、非常に重大な。

有効射程だ。

戦艦に搭載されたメガ粒子砲に匹敵すると言われるガンダムのビームライフル、このビームライフルの射程は約2 kmだ。
ガンキャノンの場合は少し伸びて、2.5 km弱。

ジムが装備するビーム・スプレーガンなど、約1 kmだ。もちろん天候状況により射程は更に縮む。

デチューン版等と言われる陸戦型ガンダム用ビームライフルが約1.5 km、ビームガンはかろうじて1 km強。

さて、このビームガンの砲身を更に短く・太くした場合の有効射程距離は如何程のモノだろう？

カタログ・スペックの表記された仕様書をペラリと捲る

正解は、80 mである。

「……特攻しろってか？」

「戦闘データを見るに、肉薄しての近接格闘・射撃戦を好んでおられるようですが？」

「……いや、あれは……」

（何て言えばいいんだ？『当たらないからばら撒いてるんですぅ』……いや、これはダメだ！）
当たる距離まで近付いてるんですぅ」

全く関係ないが、有効射程300km、最大射程に至っては狂気の2,000kmを誇る超大型ビーム兵器をジオンが開戦当初捨て駒にしていたりするのだが、残念ながらレアはヨルムンガンドの存在を忘れていた。

加えてこれもまた全く関係無いのだが、別世界の木星由来の狙い撃つガンダムのビーム・スナイパーライフルは地上から成層圏を超え、つまり有効射程距離80kmという、機動兵器のいち携行武器にあるまじき射程を誇るビームライフルなのである。

この世界の科学者が知ったらその場で拳銃自殺しかねない。

「なんでもないです、はい……」

捨てられた子犬のように小さくなるレアだった。

（あー、でも、アレだね、当たりやすくなったから良いんだろうね。うん……たぶん……きつと……）

有効射程距離が80mというのはこのメガネの技術者の間違いであり、『一撃でザクの正面装甲を突破しうる威力』が発揮できるのが80m以内なのである。

意外と有用な兵器であるということを、彼はこの後知る。

「では、これで少官は帰還します。最後に、これは私個人の質問な

のですが、現場のいちパイロットとして『こういう武器・装備があったらいいな』というモノが有れば言ってみてください」

「シールドください、特攻することになったちゃったんで……」

オッサンのメガネがキラリと光る

「……左腕部で持つのでは？」

「無茶言わないでくださいよ、ただでさえ俺のジム・コマンドはあんたが持ってきたビーム・ショットガンを持って戦うことが確定してんだ……」

「ええ、それは、そういう契約ですので」

上手い事現時点で6機しかないジム・コマンドがレアの手に回ってきたのはそういうことであった。

兵器開発局からの現地実用試験としてモルモットにされたのである。既に連邦軍……どころか、一部民間や企業、敵国であるジオンですら有名になっているホワイトベース隊、その優秀な紈、兼モルモット部隊の機体が一つ開いたのだ、新兵器を使わせない手はない。

「つまり、俺は有効射程80mの特攻兵器で片手を封印せにやならんの。そんな状況でシールドなんざ使えねえよ。左腕には陸戦型ジムのシールドをどうにか分けてもらうしかない。

で、左手が開くからビームガン……は、持てないよなあ、エネルギー不足でパワーダウンしちまう。ってなると、ジム用のマシンガンでも持たせて牽制かなあ……」

「なるほど、ショート・シールドが必要なのですね？それでしたら、そう難しくは無いでしょうからこちらから言っておきます」

「いや、ついでに肩にでもシールド付けたいですね。こう、両肩に……」

レアはかるーくゲームの攻略法でも語るように、他の機体を思い浮かべて改造案を言っているが、これがいけなかった。

「……なるほど、そちらは少し難しいですね。とにかく、シールドの件は上に相談しておきます」

「あ、マジですか。なんか悪いなあ」

「……それでは」

言って、レアのお辞儀を後ろにメガネの男はビーム・ショットガンを運んできたエレカ・トレーラーに乗り込み、その場を去って行った。

「はあー、マジ、どうすっかなあ……コレ……」
その場に残るのは、頂垂れるレア一人であった。

――――

「主任、長かったですね。恒例の改造案聞き取り」

「ああ、今回は大当たりだったな。あの男、戦法はふざけているが、意外と開発側にまわっても化けるかもな」

「は、はあ。主任がそこまで言うんですか。こりゃ、オーガスタに新しくテストパイロットが増えるかな？」

ニヤリと笑い、被っている帽子をサイド・ポケットに突っ込む運転手。

首下にはアナハイム・エレクトエロニクスからの出向社員である証拠の社員証が光っていた。

「しかし……両肩の増強シールド案か。ウチの装甲積層試験機が絡んでるって噂の無人機が、そんな装備を作ってるとか聞いたが。まさかソレじゃないだろうな？」

「まさか。いくらニュータイプ部隊だからって、ウチですら碌に察知できてないライアンの虎の子を知ってるとしたら、それこそ化物ですよ」

「……フン、馬鹿が。固有名を出すな。……まあ、とにかくだ。生き残ったらウチに引きこむのもアリだろう」

この戦争は終わっても、また次がある。その次も、その次もな」

ドゴオン！という爆発音、直後、大きな揺れ。そして、地下の天井で光る証明が点滅し、アラート、そして、赤い警戒ランプが至る所で明滅を始める。

「……ッ、まずは、この戦争だな！近くのシエルターに向かえ！急ぐんだ！」

「は、はい……！」

- - - - -

レッドアラート！クソツタレ、ジオンか！？

「当直！出るぞ！」

『れ、レアさん！？まだメインクルーすら揃ってないですよ！？』

「ワーカー！今俺はコクピットに座っていて、武器も丁度さつき搬入したばかりだ。で、数km先にはA-6ゲートがある。分かるな？」

『わ、分かりませんよオ！！』

「ゲートを守るつってんだよ！レア・プラナ、ジム・コマンドで出るぞ！」

ガシユウウツと機械音を発して、カタパルトがジム・コマンドを射出する。

「うおッ！？クソッ、宇宙用だから、バーニア制御が……！」

減速するようにいつもの減速をすると、胸部と脚部、そして背部から前方と下部へバーニアが駆動する。が、宇宙用のジム・コマンドは宇宙空間での回転を抑制するために肩部や背部上ブースターも駆動してしまう。

新たな機体への初乗りであるということもあるが、地上用の機動に慣れきっていたレアにはこの変化は厳しいものだった。

「フワフワ浮いたと思ったら次の瞬間には急降下、クソッタレ。宇宙用じゃ無理だったか……？」

なんとか無事に着地するも、厳しい現状に冷や汗を流すレア。

えっちらおっちらとA-6ゲート前に辿り着くと、なんとか一息ついた。未だに敵が突入してくる気配は無いし、焦り過ぎか？

『レア、聴こえるな？今からカイとハヤト、アムロも出る。警戒を続ける』

「了解。カイ、ハヤト、無茶するなよ？」

『分かってるって！カイ、ガンキャノン出るぜ！』

『了解。ガンタンク、ハヤト出ます！』

「アムロ、アリーヌさんは？」

『B-4兵工に行つてた思います。無事だと良いんですが……アムロ、ガンダム、行きまーす！』

『レア、ジャブロー基地のジムも出ているわ。連携して対処を！』

「了解、セイラさん！カイ、ハヤト！A-4方面を頼む！アムロはA-1だ！そのジム、聞いているか！？」

『あ、ああ。聞いている！俺はどうすれば良い！？』

おそらく初のMSに乗つての実戦なのだろう、浮つき、興奮している。

ジャブローという連邦軍の本拠地に勤めているという弊害だ。装備は最良だが、肝心の実戦経験が無いのだ。

「おいおい、しっかりしてくれ！アンタにはアンタの指揮系統があるだろう！？」

『い、いや、俺の防衛地区がここだけで、細かな命令は来てない

んだ!』

なッ!? 上は何をやってるんだ!?

「クソッ、アムロ! そっちに一機つける、指示を頼む!」

『なっ、無茶ですよ! レアさんも一機だから、そちらで……』

「一機だからだ! 指示なんてしてたら俺がおっ死^ちぬ!」

ズガン! 200m先のジャブロー、機密ハッチから爆風。ついに地獄の門が開いた。

「来た!」 『こ、こっちも!』 『く、くるぞーッ!』

『クッ、援護に行きます!』

「馬鹿が、アムロ! お前はそっちを守れ! 一機でもホワイトベースに取り付かれたら、未だ修理中のホワイトベースじゃ蜂の巣だ! 一機も向かわせないのが今回の勝利だろうが!」

グフが一機とドムが一機。ビーム・ショットガン、やれるのか……?

『……ッ、こっちにも!』

「各機、気張れよ!!」

ジャブローに投下されたジオン軍MS、52機。うち、降下完了したMSは28機。このうち、ホワイトベースがいるAブロックに進入したMSは潜入部隊をあわせて8機。

明らかに、ホワイトベース隊を狙っている者がいた。

- - - - -

グフがゆっくりとこちらに歩いてくる。入ってきた直後に岩陰に隠れたので、未だ発見されてはいないようだ。といっても、相手は地獄の対空砲火を潜り抜け、敵の本拠地に潜入してきたような玄人だ。油断は出来ない。

ドムの姿が見えないのもクサイ。演技かもしれないな……クソッ、通信に気を取られて相手の装備を確認できなかったのが痛かったか。幸い、グフの装備は見えている。左腕は通常のマニピュレーターに換装されているようで、両手でバズーカを構えている。頭部のモノアイを不気味に左右に振りながらこちらに向かって歩いてくる。

こちらの装備はビーム・ショットガン、そしてヘッドバルカン、シールド、ビームサーベルだ。

あんな短時間で陸戦型ジム用のシールドなど届くわけが無かったし、左腕部にマシンガンを持たせての射撃精度に修正を加える時間も無かった。武器両手持ちもしていない。

もちろん、肩部にシールドを装備するアタッチメントなどついていない。

（いつもの俺のジャンプからの奇襲戦法、宇宙用ジム・コマンドのあの動きじゃあ逆に命取りだ。やれない。クソッタレ……どうする？それに、ドムの姿が入ってすぐに消えた。

隠れて移動してるんだろうが、ここからじゃあ見えない。動かずにいたらホワイトベースが火達磨……行くしかないか）

幸い、前方にダッシュするバーニアの動きはそれほど違和感が無いことは先程壁に急いで隠れた時に確認できた。

シールドを前に構え、横からビーム・ショットガンを出し特攻射撃の構え。

「3、2、1で行くか。スリー、ツー、ワ……なんだ……？」

シューシューシューと甲高い独特のスラスター音。これは……ドム！

「うおおッ！！」

左方向に緊急回避、一瞬着地がもたつく。次の瞬間、隠れていた壁があつた場所が爆発で砕け散つた。

「チイッ！回り込まれた！？」

右側にぐるりと振り向くと、ヒートサーベルを青白く輝かせながら上段に構え、高速で迫り来るドムがいた。

その距離、80m！

「オオオオオッ！！！」

ロックオンもクソも無い、「60m」その為のビーム・”ショットガン”だ。「40m」丸いレティクルをドムにあわせ、「20m」ビーム・ショットガンを構え、「近接距離、振り下ろす！」撃つ！

キュバアッ！と、迸るように朱の稲妻が奔る。次の瞬間、ヒートサーベルを持っていたマニピュレーターは焼け落ち、ドムの前面装甲を深く抉れるように焼け、前に出していた左脚関節部が砕け、突進の勢いのまま倒れた。

転がるようにして減速、壁にぶち当たり、止まる。

次の瞬間、胸部の拡散ビーム砲……があった部分がボンッと小さく爆発し、完全に沈黙した。

「……………う、うわぁーお……………」

ステータスをおもわず確認、すると、ビーム・ショットガンの発熱警告が出ていた。

オイオイ、コレって、マジで一発屋の特攻兵器じゃねえの……？

その威力に呆れていると、射撃警告に一瞬反応が遅れてしまった。

「ッ！シールドオッ！」

大きな振動と共に、左腕のシールドが中ほどで碎け散る。左腕部どころか胴体部までステータスイエロー、どうやら、特攻まがいの作戦だけあって威力の強いタイプの炸薬の弾を惜しみなく使っているようだ。

黒煙で前が見えない。未だ熱警告の出ているビーム・ショットガンのためらい無く捨て、ビームサーベルを右腕に持つ。この判断が彼を救った。

黒煙の左側から、横薙ぎにヒート剣が紅く輝き切り裂かんと迫る。

「うおわ！？」

咄嗟にビームサーベルを振る。鏑迫り合いだ。

「クツ、ソがあ！」

ヘッドバルカンをグフの頭部にばら撒く……が、次の瞬間には姿勢を屈め、タツクルを決められた。

吹き飛ぶシールドの残骸。コンディションレッドを訴える左腕、衝撃でもどす俺。

「うつ、おえ。……んの、野郎がア！」

衝撃で倒れた上体でグフに向かってヘッドバルカンを放つが、余裕で左腕のシールドに弾かれてしまう。クソッ、ヤバいぞ……左腕が死んでるから、立ち上がりには絶対的な隙ができる……

グフがヒート剣を構え、近寄る。クソツタレ、何か手は……！？

ヒート剣を振り下ろさんと、姿勢を屈めて走ってくる。

が、次の瞬間、黄色のビーム光を残して上半身が吹き飛んでいた。

『レア！待たせたね！』

この声は……！

「アリー又さん！助かったぜ、愛してる！」

『やれやれ、マサキに言いつけるよ！？』

アリー又の機体の反応を追う、すると、黒白ツイトンのキャノンに掲げたMSがカメラに映った。

「その機体は？」

『ああ、新型配属予定だったんだが、未だにC-4で組んでる途中

らしくてね、借りてきた……ッと、ダメだね。反応路の出力がダウンしちまった……試作機じゃこんなもんか」

「い、一発ですか……」

「ああ、なんせ肩のデカ物、ビームキャノンらしいからね……って、言ってる場合じゃないよ。アムロ、さっきの敵ってのは？」

「い、一瞬でしたが、赤いMSでした……」
「なっ！？ シャアか！？ ジャブローってことは、ズゴックか！」

「レア、アタシのガンキャノン？ は反応路が落ちかけで戦闘に参加するのは無理だ！」

マシンガン、預けるからアムロの援護をしてやってくれ！」

後退して行くアリーヌさんの後ろ姿を見つつ、マシンガンを拾う。
もちろん残弾はフルだが、左腕部が死んでいてシールドが無いのは痛い。

「了解！ アムロ、ジムは！？」

「レアさん！ さっきの敵を探しに、あっ！ ジ、ジムが！ やめろ、迂闊に近付くんじゃない！」

前方向にステップしながらアムロに近付く。やっと姿が見えてきた。

「あっ、速い！」

次の瞬間、ジムが腹部を貫かれ、そして、爆散した。

「……な、何イ！？」

そして、頭部のモノアイを煌かせ、赤いMSが立ち上がった。

アッガイであつた。

『ま、間違いない！奴だ、奴が来たんだ！！』

信じられない速度でガンダムを翻弄する赤い……アッガイ。

『シ、シャアか！』

ガンダムに肉薄、クローを伸ばし、ガンダムのシールドを吹き飛ばす……アッガイ。

『更にできるようになったな、ガンダム！』

混線だらうシャアの音声を流す……アッガイ。

「……うん、まあ、うん。シャアなんだろうね……」

- - -

「レアさんが動かない……どういうんだ！？」

シャアのMSが迫る。シャアめ、妙に愛嬌のあるMSを使いやがって！ぶっ殺してやる！

横転するようにヘッドバルカンを回避した後、俊足で近寄りパンチを仕掛けてきた

ドゴォッ！ドゴォッ！

ふらつくガンダム、しかし、不屈のガンダムはそんな事では倒れない。

「ぐうつ、やりやがるな！」

左腕にビームサーベルを持ち、二刀流で相對する！

『死ねえ！！』

なっ！？腕部に穴が開いてミサイルが飛んでくると！？製作者は正気か！？

「ガンダム、ゴォッ！！！」

ビームサーベルのサイド・スイッチを押す。伸びるビームサーベル！

『やるっ！！』

シャアには避けられた……が、ついでだ！ザコも切り捨てる！

『ぎゃあああああ！！』

「どうだ！いいざまだ！！」

撤退していくシャアを追いかけようとして、通信が入った。ブライトからだ。

『アムロ、追うな！我々には重大な使命が与えられた、至急ホワイトベースに戻れ！』

「り、了解……」

チエツ、いいところだったのに……あれ？レアさんがまだ動いてない……マシントラブルかな？

「レアさん？おうい」

『わけがわからないよ……』

まったく、こっちがわけがわからないよ。レアさん、たまに”ああなるんだもんな……”

信機の映像には色々な意味で白くなったレアが映っていたという。

ジャブローでレアの常識がまた散る！の巻（後書き）

神を狩ったり、大きい帝國だったりで忙しいGWでしたね^^

大帝国のSS、それも、キングコア編の一万年後くらいのアフターを書いてたんですが、途中で需要無すぎだろ、と正気に戻って封印しました。

この時点でGWが半分以上潰れてました。お察しください。

PVがいつのまにか10万超えてました、ちょいちょいランキングにも載ってたようで。

こんな駄文SSで申し訳ないです、もうちょっと文章というか構成というか、良くなりたいです。

ちなみに、（うまく行けば）次で冒険王はラストです。

作者はこれが始めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです

果てしなき攻防戦：前（前書き）

ザンジバル、追撃！まで。冒険王版最終話。

果てしなき攻防戦：前

UC 0079/12/02

ホワイトベース、ブリーフィング・ルーム。

ホワイトベースの中核を担うMSパイロット、オペレーター、クルー達¹が勢揃いしていた。

ハイスクールの教室のように、壁面に地球圏とコロニーの相関図が映し出されている。

立体ディスプレイはこの時点では採用されていない。こういった超大型スクリーン、それも軍用品に立体ディスプレイが採用されるのはもう10年ほど先だ。

その壁面ディスプレイの前でレアとブライトが言い争っていた。

「1900に出るってのか？ティアンム艦隊の囿にでもなれってのか！犬死にはごめんだぞ！」

「レア君、ダメよ！」

マサキに右肩を掴まれる、が振り払って一歩前に出る。

「ああそうだよ！ゴッブ大将からの直々の命令だ。喜べレア、囿の艦は我々の他にも三隻就くぞ！」

「なっ……！？」

「後続のティアンム艦隊は、2100にジャブローから直にルナ2に向かうそうだ。」

私達の囃部隊はティアンム艦隊に先んじて出撃、静止衛星軌道から回り込んでサイド6にて新兵器の受領、その後コロンプスから補給を受け、ソロモンを叩きに行く……という訳だ」

苦虫を噛み潰したような顔でブライトが言う

「たった四隻でジオンの待ち構える宇宙に出ろっていうのか！？ルナ2の出迎え部隊はティアンム艦隊合流するんだろう？俺達はどうするんだよ！！」

「知ったことか！これは既に決まった作戦だ。各員、とくにMSパイロット、宇宙に上がってすぐにでも敵の出現が予想される。今のうちに覚悟はしておくんだ。いいな？」

言って、ブライトが退出した。ざわざわ、と、他のクルーも各自退出していく。

「落ち着きな、レア。ブライト艦長にあたっても意味は無い」

「そうよ、レア君？貴方も軍人でしょう？」

「マサキ……アリーヌさん……分かってますよ！ええ。でも、言いたくもなるでしょう？皆は何故何も言わないんだ！」

「アンタが騒ぎ過ぎなんだよ。一歩引いて冷静に見れたって感じだね」

アリーヌもさっさと出て行ってしまった

「なん……だと……」

ドンッ！壁に握り込んだ拳を叩きつける。クソッ、壁殴っちゃった……

「ええと、その……元気出して。ね？」

ポンポン、と肩を叩いてマサキも出て行った。フフ、俺は哀れなピエロなのさ……

現在時刻は14時をまわった所だ、出航時準備を入れればあと4時間ほどしかない。

最終チェックを含めば機体をバラして再び組むのに急ぎで3時間とあったところだ。

上（宇宙）に上がった直後に戦闘があるというのなら、しないわけにはいかない。今こうやって遊んでいる暇は無い……というわけだ。それに気付いたレアも、あわててブリーフィング・ルームを出てアリーナの後について行く。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！って、マサキは？」

「ああ？アタシの機体は問題無いけど、宇宙なんて初めてなんだ。慣れないといけないんだよ。アンタとコミックシヨ一の真似事してる余裕は無いんだけど？」

「というか、レア、アンタも宙間戦闘経験無いんだろ？シミュレーターで慣れとかなくていいのかい」

「あー、そうか。AMBAC使った戦闘機動なんて、タンクの時とは全く関係なかったですもんねえ……で、マサキは？」

「（うざったい奴だねえ……）……受け取ったのが足つきだからね、

嫌ならボールとかいう棺桶に乗れとか言われちまったんだよ。そりや、足つきを選ぶだろ？で、マサキは看護室で補給された医療品の点検。方向は逆」

立ち止まって、通路の反対側を指差すアリーヌ。なるほど、そういうやあ看護兵だったなマサキ。

最近は何我をしていないから、マサキと会ったのは自室か食堂がメインであった。

A M B A Cの話に戻るが、一応ボールも両腕部と上部にマウントされたキャノン、もしくは対空機銃転用のマシンガンポッド等を使って姿勢制御を行う。

まあ、他S Sのようにチート転生者による魔改造で強化……なんて事は全く無いので棺桶なのは変わらず、ジオンからは可動式ターゲットポッド等と陰口を叩かれているのだが。

「ジムキャノンかあ……あの時の、えーと、モノクロの……」

「ガンキャノン？のことがい？」

「そうそう、ガンキャノン？。アレ、貰えなかったんすか？」

足を止め、振り返って答えた。気のせいかな？アホを見る目をしていのような気がする。

「貰えるわけ無いだろ？アホ。仮にも開発中の新型機だ。というか、あの後アタシは営業入りになるかもしれないかったんだよ」

遠い目をしているが、特に何も無かったって事は何かあったん……いや、やめとこう。

件の関係だろう。たぶん。きっと。

……脅したって事は無いよね？

「……え、えーと。そうそう、ジムキャノンはどうなんです？一応、俺もシミュレーターで触ってみましたけど、薄いガンキャノンというか、なんというか」

ジムキャノン自体はV作戦の複合産物と言える機体であり、量産型ガンダムと量産型ガンキャノンの両方の特製を併せ持ちつつも、生産性を高めたというイイトコ取りのような機体だ。字面だけは。

実際は、ガンキャノン量産プランが思うように進まず、順調に量産化が進んでいるジムのパーツを使い生産性を高めた結果、約6割ほどジム（ジャブロー製の所謂初代ガンダムに登場するタイプのジム）と同一素材を使った方砲門のジムの砲戦バリエーションに納まっている。

ジムの姿形ではあるが、系列としてはガンキャノンの血統だ。

キャノンと言いつつも肩部はロケット砲であり、出力の関係でビームサーベルは装備できない。

試作機段階では両肩にこのロケット砲を装備していたのだが、バランスや重量の関係で没となっている。

戦争末期に生産された割に各地で有用な結果を残したジムキャノンは、この試作機から出たデータや、戦闘データを利用して後継機が続けて開発され、戦後ではあるがジムキャノン？が開発された。

こういった中長距離用の援護砲撃機というコンセプトは評価され続

け、数十年後にもGキャノン等といった同コンセプトの機体が開発されている。

ちなみにジャブローで生産された48機の内、宇宙に上がる機体はアリーヌ機を含めて14機であり、有名どころでは『不死身の第四小隊』にも配属されている。

余談ではあるが、アリーヌさんの機体はカーキとダークグレーのツートンカラーにカラーリングされている。

遠方ではデブリ等との誤認効果が有ると思われる。

何故か連邦軍の機体は派手派手な原色が多いが、せめて白じゃなくてグレーにすればいいのに、と心の中で思っているレアだった。

「薄いつてアンタ……いや、そうだね、足つきはレアの方が確実に上だ、聞いたほうが良いか。」

やっぱりアタシは無限軌道付きじゃないと安定しないね。一応、地上戦闘なら悪くは無いんだが、そもそも宙域戦闘が肌に合わないんだろうね」

再び歩き出すアリーヌ。

「地上戦闘がこなせるんなら、まあ大丈夫じゃないッすかね？ シールドも持てるんですから死にはしませんって」

レアもついて行く。

「戦艦の向きをx軸として、地面と置き換えて陣形を組んで戦うつてのは分かるんだけどね、普段タンクだったらありえない、290度からの奇襲なんて対応できるわけが無いんだよ……」

「戦闘コンピューターのアップグレードで、戦艦のレーザー探索と光学探索を組み合わせてある程度の進行予測をコクピットにも転送できるようになったらしいですからね、アリー又さんの機体は中長距離用援護機体ですんで、まあ大丈夫ですってば」

実際は長距離戦闘時における出撃直後の進行方向予測がちょっと伸びただけであり、この時点ではやはり目視（と、一応のロックオン補助）がMS戦における戦闘のメインだ。

戦闘機動の予測等が戦闘時のMSコンピューターにも反映されるようになるのはUC 80年代後半からである。

もしくは特殊技能になってしまいが、サイコミュや強化人間、NTによる戦闘だ。こちらの場合は戦闘時予測よりも更に高性能で、

『相手の敵意を読み取り、先の攻撃方向を予測する能力を強化する機械をコ戦闘ンピューター、もしくは操作するパイロット自体に仕込む』

という一般パイロット涙目な戦場風景になってしまっていたりするが、今は関係ない。

と、本筋に全く関係ない小話をしている間にMS整備デッキに着いた二人だった。

既にアムロ、カイ、ハヤトの三人は整備員と共に右舷デッキで機体の整備に掛かっている。

セイラはオペレーター業務の引継ぎ作業の最終確認の為、少し遅れるようだ。まあ、セイラの乗る機体はMSよりも遥かに整備の簡単な航空機……宇宙でも使えるから、航宙機？つまりはコアブースタ

ーなのであまり問題ではない。

「そんじゃ、俺もジムコマンドの整備に行きます」

「あいよ」

最大12機（二番艦のペガサス級以下になるにつれ、15、18と増えている）のMSを運用できるホワイトベースは現在6つの整備デッキまで埋まっている。

アムロが乗るガンダム

カイが乗るガンキャノン

ハヤトが乗るガンキャノンC（後期生産タイプであり、Cの表記は厳密には必要無い）が右舷デッキであり、

レアが乗るジム・コマンド

アリーヌが乗るジムキャノン

そして最後にセイラが乗るコア・ブースターが左舷デッキだ。

ホワイトベースは簡単に言えばスフィンクスのような形をした戦艦であり、中央の艦橋部を覆うように、前部には右舷MSデッキ、左舷MSデッキ、後部には右舷エンジン、左舷エンジンを備えている。

有事には各部の切り離しも可能になっているデザインで、これにより機関の誘爆での艦の撃沈という事態が防げる、まさに（この時代では）次世代の戦艦である。

ただし、この脚部型のエンジンブロックは運用が難しく、それは度々トラブルが発生していた事からも明らかだった。

ジム・コマンドの前に辿り着く。既に作業をしている整備員に挨拶をして、整備に取り掛かるレアだった。

「おつ、ホントに陸戦型ジム用のシールド届いてんじやーん。やるな、あの眼鏡」

「プラナ、言われた通りに左腕部にあの陸戦型用のシールドを取り付けておいた。」

「と言っても突貫作業だからな、問題があつたら言ってくれ」

整備主任のオムル・ハング兵曹長、アフロヘアが特徴のナイスガイだ。

「あざーっす。いやあ、左腕に取り付けられるシールドが無いと、ビーム・ショットガン使えませんからねえ」

「……言っているのか分かんが、コマンドタイプのジムのシールドも、腕部には装備できるぞ？」

えっ

「……マジ？」

「マジだ」

oh……

検証の結果、コマンドタイプのシールドの場合、ビーム・ショットガンがシールドの先端に当たる可能性があつたため、結果的には短い方である陸戦型ジム用のシールドをそのまま装備した、と、記載しておく。

- - - - -

1900、発進時刻。ホワイトベースのメインクルー達は、ブリッジに整列していた。

「大いなる戦いの第一歩は諸君らの勇気ある行動にかかっている！」
ハゲデブのオッサンが以前アムロがパンチで叩き割ったモニターに映り、演説が生中継されている。

「この戦いに我が連邦軍が勝利した暁には、今日という日は偉大な一日として国民に記憶されるであろう。全将兵の健闘を祈る次第である」

「体の大きいとこなんか入院しちゃったリュウさんにそっくりだ」
カツがモニターに映るゴツプ大将を見て言う。そついや、似てなくも無い。かな？

「リュウさん？」

ジルが返す。そついや、この二人はリュウさん知らないのか。

「こら、ジル！騒いじゃダメよ、今は連邦軍の偉い人が演説してるんだから。ほら、3人も」

言って、子供達5人を連れてブリッジを出た。

ジャブローにて、ジャブローの育児センターで引き取り教育をしようとする育児担当のコーリン軍曹をMSパイロット達が粘り強く説得し、最終的にはこの5人の残留許可が下りていたのだった。

といっても、これには少々黒い事情があり、NT部隊という特殊な環境故に許可が下りたと言っても過言ではない。

しかし、ブライト達艦の高官はもちろん事情を知ってはいるが、そのような黒い部分をわざわざ知らせる必要も無かった。

「さて、いよいよ発進だ。各員持ち場につけ」
ブライトの号令と共に、各員が各自の持ち場、つまりは第二次戦闘態勢を取りに散る。

『ドッキングロック解除、ホワイトベース発進よろし』『上空クリアー。ハッチ開け』

次々と通信が入ってくる。

ジャブローへの隠し扉が開き、ホワイトベースが浮かび上がる。

場所は変わって左舷MSデッキ

「おつ、セイラさん、見てくださいよアレ。フラミンゴの群れ」

オスカーがビデオで録った映像が送られてくる。

ジャングルからピンクのフラミンゴの群れが飛び立つ、遠くでは同じように宇宙を目指す凶艦隊であるサラミスが3艦ほど見えた。

『ええ、綺麗ね。でも、貴方はマサキと見たかったんじゃない？』

「そりゃま、そうですがねえ……」

ちなみに、第二種戦闘待機なので、コクピットで座っているだけだ。やはりジャブローからの超長距離探索情報でも、宇宙ではジオンが多数待ち構えているようだ。

遠くで見えたあのサラミスも、何艦が生き残るのだろうか、と思うレアだった。

『というか、アンタ達よく落ち着いていられるねえ？宇宙空間で

の戦闘なんて、初めてなんだろう?」

「っていうか、アリーヌさん宇宙軍用のパイロットスーツ似合わないッすねwww」

『戦場で死んだ奴の死因で一番多いのはフレンドリーファイアなんだってね』

「ヒューヒューヒュー」

『口笛吹けてないわよ、レア……』
呆れた顔でセイラが見ていた。

と、振動が大きくなる。ホワイトベースが大気圏を突破しようとしているようだ。

さて、いよいよ宇宙だ……

果てしなき攻防戦：前（後書き）

もののすごく短い説明だけで終わった話で申し訳ない、アニメだと総集編みたいな感じになっていると思うていただければ幸い。

後半へ続く！

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです

果てしなき攻防戦：後（前書き）

戦場までは何マイル？まで

果てしなき攻防戦：後

アラート
警告音が鳴り響く、既に第二種戦闘配備であるオレンジ・ランプから第一種戦闘態勢であるレッド・ランプへと艦内光は切り替わっている。

『ミノフスキー粒子、戦闘濃度散布終了』 『回避運動は3秒毎、ランプ運動でいくんだ。分かっているな？』
入れ替わり立ち代り、艦内通信が紛れ込む。

『レア、アムロ、聴こえているな？ 敵のムサイ級が四、うち一つはファルメル級だ。大物が紛れ込んでいるから注意するんだ』

「よ、四つだア！？ クソツタレ、了解した！」 『了解しました！』

ジオンはよっぽどホワイトベースが目障りなようだ。
ソロモン要塞、もしくは月面都市グラナダへの直接攻撃を察知していないはずが無いジオン軍。そんな猫の手も借りたいような状況で、たかが一先遣部隊に対して送り出すような戦力ではない。

加えて、ファルメル級。つまりはジオン公国軍のザビ家、もしくはそれに近い者が乗るような戦艦までもが出張ってきている、もしかすると、ソロモン前に防衛線を敷く為に出て来たのかもしれない。

シャアが出てきたのか？とも思ったが、ジャブロー攻防戦に参加していたシャアが、これほどの短時間で”ソロモン方面”から迎撃に向かってくるとは思えない、あまり考えたくはないが、おそらくザンジバル級に乗ってくるのだろう。それも、追撃される形で。

加えて、最悪の可能性ではあるが、ファルメルの元の持ち主、つまりはドズル・ザビが乗艦している可能性があるのだった……

戦闘ブリッジの防護フィルターがせり上がり、格納状態であった主砲が現れる。

『各MS、MAの発進願います、発進直後に敵戦艦からの砲撃が予想されます。注意してください』

フラウ・ボウの顔がサブ・モニターに映り、左下の発進カウントが減少していく。

MSデッキから、カタパルトへと移動。脚部をカタパルトへとセツト。

直前まで最終確認をしてくれていた整備兵が離れ、発艦へのカウントダウンが開始する。

『全機発進後、敵射出予測地点へと援護砲撃をかける。各機は命令と共に散開せよ』

目視で確認できるように設置されているカウントダウンが減少していく。3、2、1……

（宙域戦闘か……シミュレーターでも散々やったんだ、俺だってやる……！）

「……レア、ジム・コマンドで行くぞ！」

シートへと押し付けられ、ホワイトベースから発艦、背部のブースターを吹かし、更に加速。

射出の衝撃で若干ズレた姿勢を、宇宙用ジム・コマンドの全身に設

置されている姿勢制御用のバーニアを使い、ホワイトベースとの天地方向をあわせる。

実際の戦闘ではほぼ関係が無いが、今回の作戦では、折角最初に援護射撃があるのだ、それを最大限生かすためにも、隊列を組んでからの散開攻撃が効果的に繋がる。

『セイラ、００６行きます！』

『レア、アタシは宇宙が初めてなんだ。置いていくなよ？……アリーヌ・ネイズン、ジムキャノン出るぞ！』

後続からジムキャノンとコアブースターが続く、無線通信で混乱しないように、二部隊に分けられたホワイトベースのMS部隊は、各部隊の隊長格であるアムロとアリーヌの通信が繋がり、レアに繋がる音声は、アリーヌ、セイラ、ホワイトベースの通信クルーであるフラウ・ボウと艦長からの直接通信のみだ。

それ以外をやろうとすると、自身の手で通信機の設定を”部隊内域周波数”に切り替える。もしくは所謂”おててのふれあい通信”を行う必要がある。

もちろんこの面倒な設定はジャブローからのお達しであり、最初に出る時だけこの通信機の設定で、今はもう部隊内域通信に切り替えである。文句を言われても、通信機の故障で話は通すと整備兵とも話をつけてある。

いまだにミノフスキー粒子の存在しない状態での戦闘から頭が切り替わっていないのだろう。迷惑な話だ。

「全機聴こえてるな？アムロ、散開すると同時に敵艦の天辺方面に回りこんで攻撃してくれ。」

敵のMSが何機出てくるのか分からんが、俺達より少ないなんて事

は無いだろうが、敵の頭を潰せば楽に倒せるハズだ」

現在は最後に発艦したガンダムを最後尾にして、鶴翼陣形（宇宙空間なので厳密には違うが）で進軍している

『なに隊長みたいなマネしてんだよレア、隊長はアリーヌさんじゃねえのかよ？』

『いや、今回はアタシから言っただ。まあ、キャラ変わりすぎだと思っけどね』

「マジメにやったらこの言われようって酷くね!？」

『各機、無駄口は叩くな。援護射撃、10秒後だ!』

『『『『了解!』』』』

カウントが表示され、0と同時に散開、朱色のビームの奔流が後ろから通り過ぎる。

アムロはさっき言った命令……命令? まあいいや、ちゃんと上方に行っただようた。

つと、メインモニターに一瞬四角い警告が現れると共に通り過ぎた。
熱源警告……ビーム!?

「ブリッジ! 敵のMSは何だ! 新型か!？」

最悪だ! ゲルググタイプだとしたら、ガンダムと同じくらいの性能を持っていたハズだ。

学徒兵が乗っているのならば、まだなんとかなるのだろうが、相手はファルメル級を含んだベテラン部隊だ。それは先程の援護砲撃で

一機も墜ちていない様子を見れば分かる。

「アリーヌさん、セイラさん、相手はビーム持ちだ！下がれ！」
熱源警告とほぼ同時に黄金色のビームが通り過ぎる、あんな物相手で警告なんて何の役にも立たない！

『敵MSのデータ、出ました。敵のMSはズゴックタイプです！』

ハアアアアアアアアア！！！！！！！！！

「ハアアアアアアア！！！！！！！！！」 『うつさいよ！レア！』

思わず声出ちゃったよ！！ハアアアアア！？

回避操作が雑になり、すぐ真横をビームが掠り、シールドが焼けた。
「うおッ！……間違いじゃないんだな！？」

『最近出てきた新型のようです、腕部にビーム砲が設置されています。注意を！』

「ああ、クソツタレ！聞いたな？俺の武装じゃカバーしながらなんてのは無理だ！ホワイトベースの援護に回るぞ！」

減速を始める、と、敵MSが接近してくる。ゲエーッ！マジでズゴックだ！ジオン公国どうしちゃったの！？

「ビーム・ショットガンを使う！」

すれ違う瞬間、左腕を振り上げ敵の進行方向を狙って撃つ。地上と違いほぼ減衰要素の無い宇宙空間では、この”拡散ビームガン”とも言える武器は優秀な殲滅力を持っていた。

キュバアッ！という音と共に朱の閃光が弾ける。この閃光には一種

のかく乱効果が期待でき、直撃したズゴックがレアの後方で爆発、すれ違った数機もフラッシュ光にあてられて動きが一瞬直線的になる。

『上手い！』

反転していたコアブースターのメガ粒子砲がズゴックの腹部を貫いた。

一瞬後、ムサイからのビームが近くで光った。おいおい、味方へ当たるぜ！？

「……やるウ！ホワイトベース、突破された！援護に行く。聴こえてるな！？」

反転完了、ホワイトベースの方向へと加速する。

といっても、宇宙空間という特殊な状況下のため、ホワイトベースも前進していながら、自機も高速で前進（ホワイトベースの速度＋カタパルトの射出速度）しているように地上からは見える。つまり、減速してホワイトベースに向かって相対速度を合わせに行っているのだが、表現上凄く分かり辛いので割愛させてもらう。

『キャア！』

見ると、ジムキャノンが被弾している。左腕が吹き飛んだだけで済んでいるのは幸運だった。

援護に向かおうとするも、前方から更にズゴックが迫る。って、爪か！？

間一髪でネイルでの突進を回避、ザクみたいに分かりやすく剣や斧を持っていないから、対処が難しいぞコイツ！

「チイツ！アリー又さんの援護行ける奴いるか？」

『僕が！迂闊ですよ、アリー又さん！』

ハヤトが肩部キャノンを放つ。頭部に直撃、直後に爆発。あの形状では頭部もクソも無いが。

『ありがとうよ、ハヤト！ホワイトベース、腕をやられた。一旦帰還するからハッチを空けてくれ！』

再度接近してきたズゴックにマシンガン下部に取り付けられたグレネードをお見舞いする。

脚部を吹き飛ばしただけに終わったが、そのまま姿勢を崩して回転するズゴックに、マシンガンをバラバラと撃ち込む。

爆発！破片に混ざって爪部分が高速で飛んでくる、急いでシールドでガードするも、陸戦型ジムタイプのシールドでは全てを防御しきれない。右側の姿勢制御バーニアと背部バーニアの右側部分を吹かし、左に大きくステップして回避。

左側のバーニアを吹かし減速、次いで細かく全身のバーニアを吹かして姿勢制御。

A M B A Cの回避運動にも慣れないとなあ……

『了解！第二ハッチを40秒後に開きます、作業員は退避を！』

「発射準備完了、アリー又さん、下がって！」

敵が三機ほど固まっている方向に向かって、ビーム・ショットガンを撃ち込む。

この距離では当たっても雀の涙ほどの威力しかないだろうが、目晦ましにはなる！

『レア、後ろだ！』

「なにッ！？」

咄嗟に振り向き、マシンガンを撃ち込もうとするも、ビームがマシンガンに突き刺さる！

急いで投げ捨て、ビームサーベルを抜く。危ない、運が良かった！

二機のスゴックが、連動して回り込むように動いている。

「カイ、右の奴を頼む！アリーヌさん、下がる前に左の奴に一発お願い！」

『任されて！』『あいよ！』

右のスゴックにカイがキャノンを撃ち込む、連動してハヤトも動いているようだ。アレなら大丈夫だな。

アリーヌが肩部のロケット砲を撃ち込む。近接信管であるこのロケット弾頭は赤外線による誘導性能を持ち（この時代の主な誘導ミサイルである有線ワイヤーによる主導操作ミサイルではなく、映像認識タイプのもの。もちろん、ミノフスキー粒子により索敵能力は非常に低い）、効果範囲内で敵を認識すれば爆発する。牽制にはもってこいだ。

爆発で大したダメージを負ってはいないようだ、ふらついているスゴックにヘッドバルカンをばら撒きながら近付く。

こちらを視認したようだ、もう遅い！ビームサーベルで腹部を横薙ぎ、切り捨てる。後方で爆発！

「観測手、敵はあとどれくらいだ！？」

『現在確認できている数で１１います！』

ホワイトベースの周囲にまとわり着くように、蒼白い軌跡を残しながらズゴックが攻撃を仕掛けている。

対空機銃で応戦しているが、あの数では焼け石に水だ。

再装填完了したビーム・ショットガンを、ホワイトベースに気を取られ不用意に近付いてきたズゴックに撃ち込む。焼け付くような閃光の後、両腕をもがれた状態で虚空の彼方へと流れていった。

「あと10だ。ホワイトベース、ハッチは開くな！蜂の巣にされるぞ！」

「こっちは腕がオシヤカなんだよ！？」

メインモニターでアリーヌ機を確認、漏電も起こっていない、どうやら衝撃で完全に死んでしまっているようだ。これは逆に好都合だ。

「まだ大丈夫ですよ、外から見たら分かります。カイ、アリーヌさんの援護につけるか？」

「もつついてるよ！」

「ムサイはどうだ！？」

「Fラインを超えて接近！各機は敵主砲による砲撃に注意を！」

ムサイが近寄ってるか……叩きに行きたいが、こつムサイを狙えスを狙われたんじゃ無理だ。

「第六ブロック被弾！乗組員は退避を！」

「対空砲火、弾幕薄いぞ！主砲、メガ粒子砲、左翼のムサイを狙え！パイロット各員、後部ミサイルを撃つ！退避しろ！」

混戦だ。頼むぞ、アムロ……

- - - -

「ハア……ハア……ハア……」

息が詰まるような緊張感、敵艦隊への単騎上空奇襲攻撃だ。緊張もする。

天辺へと移動完了、うまい具合に三艦が固まっている。護衛も三機のみようだ。行ける！

ピピピピピピ、と音を立てロックオンマークが敵戦艦への効果的な攻撃ポイントを指定する。

ブリッジ、両エンジンブロック、機関部。ロックオン完了。

ズキュウーン！という、ガンダム特有のビームライフル発射音が四連発、撃沈！

こちらに気付いたのか、敵の新型が迎撃に上がってくる、ビームが二発！左腕のスロットルを更に加速させ、バレルロールしながら撃つ！朱の閃光、一発は外れたが二機が爆発、一機とすれ違う。

いや、攻撃してくるな！？シールドをかるく上げ、ビームライフルを撃ち込む。やっぱり！

こちらを向いて今まさに攻撃しようとしていた敵MSの腹部へと朱色のビームが吸い込むように当たり、爆発した。

もう一機！？いや、当たらない。落ち着いて敵戦艦のブリッジ部分

を狙い、撃つ！

ショックウェーブ！すぐ近くで迎撃していた敵のMSも巻き込まれて爆発した。

「フウ……来るなら来い、ジオン軍め！ガンダムがある限り平和な宇宙をお前達の勝手にはさせんぞ！！」

一息つく、残るは更に後方に控えるムサイ一艦のみだ。ファルメルとか言ったかな？

一応は隠密作戦であつたため、無線封鎖を解く。

と、すぐに通信が入った。

『アムロ！信じられんが、いや、信じたくないんだが、敵の新型MAの反応がそっちに向かっている。

砲戦MA”ゾック”だ。いいか？ゾックだぞ？ゾック。信じられるかボケエ！！！！』

「れ、レアさん？ええと、分かりました」

またレアさんが荒れているようだ、あの人、よく分からないタイミングで荒れるからなあ……

『あ……あー、えーと、こっちのカタはほぼついた。でだ、そっちに向かっているゾックは、どうやら月方面からの援軍艦隊からの増援らしい。

こちらに残りのムサイに向かって包囲攻撃を仕掛ける、キツいだろうがゾックを潰してくれ』

「了解！やあーってやるぜ！！」

『……ああ、頑張れ……』
レアさんも激戦で疲れているようだ、久々の宇宙空間での戦闘つて
のもあるかもなあ……

閃光！緑色のロケットの先頭部分からビーム砲を連発してくる。
……？いや、違う。外部に取り付けられていたブースター・ユニツ
トがポロポロと外れ、最後には腕と四つの脚部が展開。緑色のMA、
ゾックが姿を現した。

「コイツか！うわあああ！？」
そのまま体当たりを仕掛けられた、大きな衝撃でシールドが吹き飛
ばされる、が、ガンダムには傷一つ無い。

『死ねっ！』混線！？こっちの台詞だ！
「お前が死ねえ！！」

再度突進をしようとするゾックと相對、両肩のビームサーベルを抜
くと同時に切り捨てる！

『ぎゃああああー！！』
「ざまあみろ！」

ゴオオツ！と、音を立て、切り捨てた半身がファルメルへと向かう
『よ、避けられません！うわああああ！』

大爆発！！大きなショックウェーブと共に周囲の敵は全て消え去っ
た……

フウ、今回も激戦だったな。一分もかからなかったけど。……レア

さんに連絡入れるか。

「こちらアムロ、ムサイとゾックを片付けました」

『そうか！こっちは最後の一機を片付けてハアアアアア！？う
おおあ！？』

衝撃音？それから、レアさんへの通信が繋がらなくなった。どうし
たんだ！？

「フラウ、レアさんどうなった！？」

『ええと、一瞬硬直したと思ったらデブリに突っ込みました』

い、いったいどういうことなんだ……？

- - -

「で、起きたらまた浦島太郎になってたってワケですか……」

「レア君、よく知ってるわね、そんなジャンパンの民話」

看護室で目覚めた……というパターンかと思ったら、広い病室のベ
ッドで起きた。

窓の外を見るに、どうやらどこかのコロニー、もしくは軍事基地に
いるようだ。

「あ、いや。まあ、昔聞いたことがあったただだよ。で、今日は何
日でここは何処なんだ？俺としては、もう戦争が終わってくれてる
とありがたいんだけど」

「今日は12月13日、まだ戦争中よ。といっても、偉い人達はそ

ろそろ決戦だつて物騒なこと言ってるけど」

マサキの手を借りて体を起こす、バキバキと間接が軋む。

「にしても、また気絶してたのか俺……」

「ええ、皆もなんというか、慣れてきたみたいよ？レア君、貴方気絶グセでもあるんじゃないの？」

なにその癖、怖いわ。

「よつ、はつ。さて、ここは何処なんだ？」

一応の検査確認ということで、体中に刺さっている点滴だとか、エコー？を外す。

断つておくが、既にマサキがカルテに記入を終えている。あの様子を見るに、どうせ体に異常な点は無いのだろうし。

「サイド6の中央病院よ、通常ではあまり長期の滞在許可は下りないのだけれど、今回は特別つて事で5日間の滞在許可が下りてるわ」マサキの肩を借りて立ち上がる。横のボックスには自身の連邦軍服が入っていた。

「おつとと」

一週間以上寝ていたのだ、フラつきもするか。というか、腹減ったな……

「大丈夫？車椅子持ってきたほうが良い？」

心配そうな顔でマサキが覗き込む。車椅子か、うーむ。まあ、いらないかな？

「いや、いいわ。自分で歩いて体調を取り戻した方がいいだろうし。腹減ってたんだよね。」

腹が減るのは元気な証拠！ってね」

「そう、今だとアムロが17バランチのユーノーに用事で出て行つて、1700には戻るハズよ。それにあわせて、ホワイトベースにも戻つて。いいわね？」

現在時刻は1100、あと6時間ほどか。

「丁度いい、昼飯にでも出る？」

「ごめんなさい、ホワイトベースへの医療品の搬入作業があるのよ。私はもう済ませちゃったし……」

「あらら、しゃーない、一人で済みますか……」

病院を出て、適当な所で昼食を済ます。ちなみに、クッソマズいハンバーガーだった。

意外と濃くて、腹にずーんとくる。喰い終わってから気付いたけど、病み上がり喰うもんじゃねえな……

振動、と、爆発音？……戦闘か？コロニー内で！？

コロニー防衛軍であるジム・コマンドが数機出てくる、ザクの改良タイプもだ。

両軍のMSが発砲、を開始する。幸いなことに、爆発する武器やビーム兵器を携行していないようだ。

「クッソタレが、何考えてやがるんだジオンは……！」

民間人が何事かと見物に集まっている、何を考えているんだ！？

「おい、よせ！戦争なんだぞ！シエルターに逃げるんだ……！」

「あ、ああ……そうか」

平和ボケでもしてんのか？

「民間警察！避難誘導はまだか！」

ドンッ！子供が膝にぶつかつた。そのまま森の方に駆けて行く。

「オイ！そっちはさつき破損したザクが行ったんだ！シェルターへ行け！」「ごめんなさあゝい！」

そのまま走り去っていった。

「ああ、クソッ！ガキが！」

あの子供一人を止めに行くことは出来ない、目の前には多数の民間人がいる。幸い、森ならば戦火が飛ぶことも無いだろう。

「キャッ！」

喪服を着た紫髪の少女が、大人たちのシェルターへの避難行為から弾き出される。

既に近くのシェルターブロックは満員になっているようで、避難行動が成り立っていない。

「クソッタレ、逃がすのは女子供が先だろうが！おい、大丈夫か？立てるか？」

「……………」

怯えた目をして立っていないでいる、そうか、喪服を着ているし不幸でもあったのだろう。そんな状態で戦闘という極限状態に陥れば、シヨック状態にもなる。

「大丈夫、大丈夫だ。俺はレア・プラナ。君の名前は？」
戦闘を見せないように胸に抱える。

「ユウリ……ユウリ・アジッサ……」

「そうか、ユウリちゃん。大丈夫だ。ああ、クソ！何をやっているんだあのジムは！アムロでも呼んでこいってんだよ！」

空中でジムコマンドの右腕が吹き飛び、そのままビルに落着する。

「ア、ムロ……？」

「あ、ああ、俺の仲間だよ。今にジオンを倒して戦闘を終わらせてくれるさ。」

民間警察！この子供を頼む！おおい、そのエレカ！止まれ！軍の者だ！」

「な、何だ？こっちは避難してんだ！お、オイ！俺のエレカ！」

「緊急事態だ！C - 6 ベイに取りに来るんだ。いいな！？」

ホワイトベースのあるブロックに辿り着く前には戦闘が終わっていた。

俺の頑張りはいったい……

果てしなき攻防戦：後（後書き）

意外とあっさり。

冒険王部分は終了です、長々とお付き合いいただきありがとうございました。

一応は80、めぐりあいにつながるように書きましたが、その分ちよつと微妙なオチになったかな？と、後悔。

以前言っていたように、以降は冒険王風の完全オリジナルになります。人死にもできるだけ出さないように努力はしますが、なにぶん元ネタがガンダムだけあって確約は出来ません。ご容赦ください。

レアの気絶？いや、別に複線でもなんでもなくて、時間経過のためのワンクッションです、はい。

作者はこれが初めてのSSです、誤字、おかしい表現等ありましたらご指摘頂けるとありがたいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0455s/>

機動戦士ガンダムの世界に転生？くそっ しょうがねえな

2011年5月18日01時21分発行